

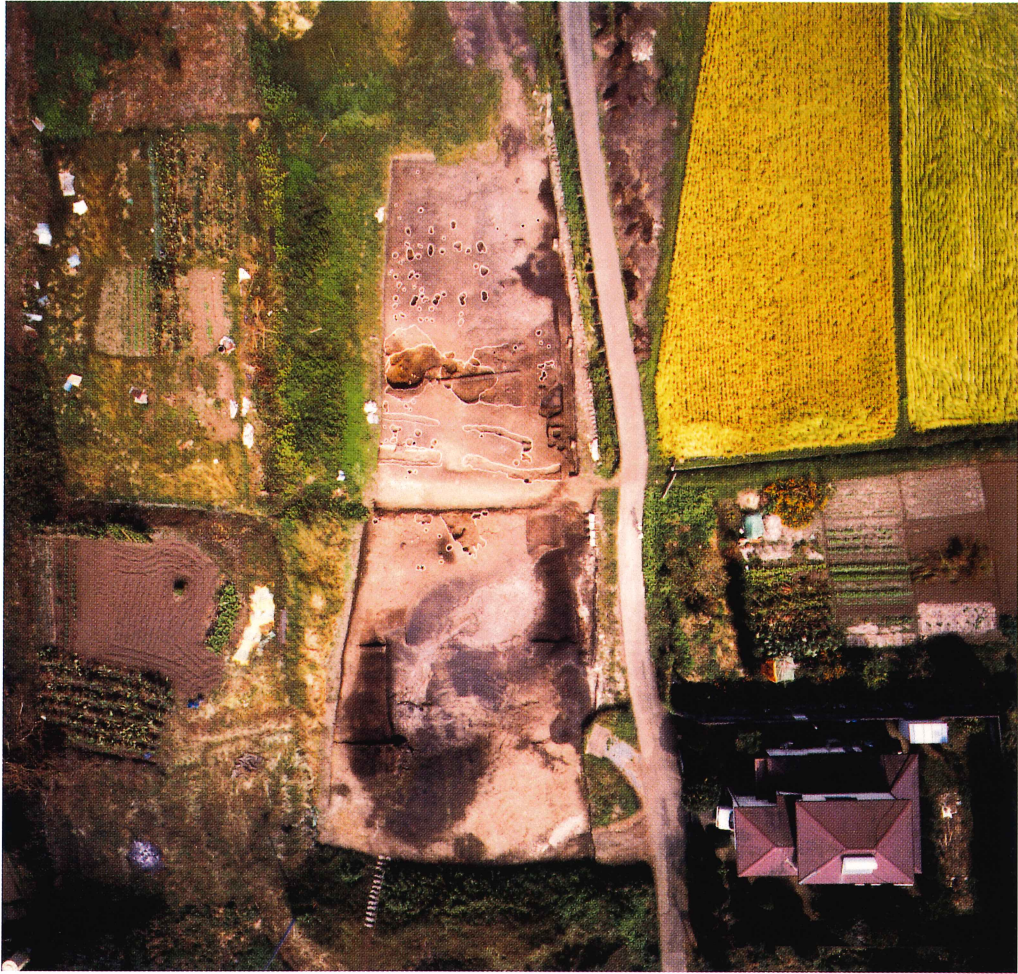
県道松岡日岡線改良工事関係に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

二 目 川 遺 跡

2 0 0 1

大分県教育委員会

フタ メ ガワ
二 目 川 遺 跡



二目川遺跡Ⅱ区全景



II区出土施釉陶器



II区出土円面硯

序 文

大分県教育委員会では、平成11・12年度の2年次にわたって、大分県大分土木事務所スポーツ公園建設部の依頼を受け、県道松岡日岡線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査を実施してまいりました。改良工事は大分県スポーツ公園周辺の交通網整備の一環として計画されたもので、本書は工事に先立ち発掘調査した遺跡の報告書です。

本書に記載された大分市所在の二目川遺跡からは8世紀後半～9世紀前半を中心とする古代の遺構・遺物が発見されており、これは古代の人たちの営みの一端を示すものであり、この地域の歴史を解明する上で貴重な資料となるものと思われまます。

今後、本書が埋蔵文化財に対する保護・啓発並びに学術研究の一助となり、かつ県民の皆様に広く活用いただければ幸いです。

最後、この発掘調査に多大なご協力をいただきました関係各位に対して、心から感謝申し上げます。

平成13年 3月30日

大分県教育委員会教育長

田 中 恒 治

例 言

- 1、本書は平成10・11年に実施した県道松岡日岡線改良工事に伴う二目川遺跡の報告書である。
- 2、調査は、大分県教育委員会が大分県大分土木事務所スポーツ公園建設部の委託を受け実施した。
- 3、出土した鉄滓については大沢氏に分析を依頼し、分析結果の玉稿をいただいた。
- 4、遺跡・遺構の実測と撮影は調査担当者の栗田勝弘・高橋信武・甲斐寿義・山路康弘が主に行った。
遺物の実測・トレースは第1章第1節は栗田が、第1章第2節は甲斐・山路が主に行った。
- 5、遺構写真は高橋・甲斐・山路によるが、空中写真は株式会社スカイサーベイに委託した。
- 6、遺物写真は栗田・甲斐・友岡信彦・衛藤麻衣による。
- 7、本書の執筆者は以下のとおりである。

第1章	甲斐 寿義
第2章第1節	栗田 勝弘
第2章第2節1・2・4	甲斐 寿義
第2章第2節3	山路 康弘
- 8、本書で用いた方位はすべて磁北である。
- 9、出土遺物及び関係資料は大分県教育庁文化課文化財資料室に保管している。
- 10、本書の編集は甲斐が行った。

目 次

第1章 序章	1
第1節 調査の経緯	1
1、調査に至る経緯	1
2、調査団の構成	2
第2節 遺跡の立地と環境	2
1、地理的環境	3
2、歴史的環境	3
第2章 発掘調査の成果	6
第1節 平成10年度試掘調査	6
1、調査の経緯	6
2、遺構と遺物	6
(1) 二目川遺跡 A 地区	6
(2) 二目川遺跡 B 地区	12
3、小結	15
第2節 平成11年度本調査	16
1、調査の経緯	16
2、調査の概要	16
3、I区調査の成果	19
(1) 遺構と遺物	19
(2) まとめ	25
4、II区調査の成果	27
(1) 層序	27
(2) 遺構と遺物	29
① 旧石器・弥生時代の遺物	29
② 古代の遺構と遺物	30
(3) まとめ	69
5、付 篇	71

挿 図 目 次

第1図	二目川遺跡の位置	1	第34図	北側土坑群 SH2出土遺物実測図(2)	35
第2図	県道松岡日岡線調査地点位置図	2	第35図	北側土坑群 SH2出土遺物実測図(3)	36
第3図	二目川遺跡と周辺の遺跡	4	第36図	北側土坑群 SH2B 出土遺物実測図	37
第4図	二目川遺跡A・B調査区配置図	6	第37図	北側土坑群 SH1出土遺物実測図	39
第5図	二目川遺跡A地区周辺採集物	7	第38図	北側土坑群 SK1出土遺物実測図	40
第6図	二目川遺跡A地区周辺採集物	7	第39図	北側土坑群 SK3出土遺物実測図	41
第7図	1号不定形土坑実測図	8	第40図	北側土坑群 SK5出土遺物実測図	41
第8図	1号不定形土坑内出土遺物	9	第41図	北側土坑群 SK6出土遺物実測図	42
第9図	1号不定形土坑内出土遺物	10	第42図	北側土坑群 SX4出土遺物実測図(1)	43
第10図	2号不定形土坑実測図	11	第43図	北側土坑群 SX4出土遺物実測図(2)	44
第11図	2号不定形土坑内出土遺物	11	第44図	北側土坑群遺物出土状況	45
第12図	二目川遺跡B地区出土遺物	12	第45図	溝状遺構実測図	47
第13図	二目川遺跡B地区出土遺物	12	第46図	SX1・SX2遺構実測図	48
第14図	二目川遺跡B地区出土遺物	13	第47図	SX1・SX2遺物出土状況	48
第15図	二目川遺跡B地区出土遺物	14	第48図	SX1出土遺物実測図	49
第16図	二目川遺跡B地区出土遺物	14	第49図	SX3遺構実測図	51
第17図	二目川遺跡I区周辺地形図	16	第50図	SX3出土遺物実測図	51
第18図	I区遺構配置図	18	第51図	SX5・SX6遺構実測図	51
第19図	I区1号掘建柱建物実測図	19	第52図	SX5出土遺物実測図(1)	52
第20図	1・2号土坑、1号井戸及び出土遺物実測図	20	第53図	SX5出土遺物実測図(2)	53
第21図	3～5号土坑及び出土遺物実測図	21	第54図	SX6出土遺物実測図	55
第22図	6～8号土坑及び出土遺物実測図	22	第55図	各遺構出土土錘実測図	55
第23図	9～11号土坑実測図	23	第56図	包含層出土遺物実測図(1)	57
第24図	12・13土坑実測図	24	第57図	包含層出土遺物実測図(2)	58
第25図	II区層序図	26	第58図	包含層出土遺物実測図(3)	59
第26図	遺構配置図	27	第59図	包含層出土遺物実測図(4)	60
第27図	旧石器・弥生時代の遺物実測図	28	第60図	包含層出土遺物実測図(5)	61
第28図	1号掘建柱建物遺構実測図	29	第61図	包含層出土遺物実測図(6)	62
第29図	北側土坑群実測図	30	第62図	包含層出土遺物実測図(7)	63
第30図	北側土坑群土層断面図及び実測図(1)	31	第63図	包含層出土土錘実測図(8)	64
第31図	北側土坑群土層断面図及び実測図(2)	32	第64図	包含層出土遺物実測図(9)	65
第32図	北側土坑群遺物取り上げ順序	33	第65図	包含層出土遺物実測図(10)	66
第33図	北側土坑群 SH2出土遺物実測図(1)	34	第66図	包含層出土遺物実測図(11)	67

表 目 次

第1表	二目川遺跡II区出土土錘計測表(1)	55	第2表	二目川遺跡II区出土土錘計測表(2)	64
-----	--------------------	----	-----	--------------------	----

写 真 図 版 目 次

図版1	二目川遺跡A地区1号不定形土坑出土遺物	87	図版7	二目川遺跡II区 SK1・2、SK5・6	93
図版2	二目川遺跡B地区出土の土壁状遺物	88	図版8	北側土坑群出土遺物(1)	94
図版3	I区作業風景	89	図版9	北側土坑群出土遺物(2)	95
図版4	遺構検出状況、1・3号土坑	90	図版10	SX1・5出土遺物	96
図版5	II区作業風景	91	図版11	包含層出土遺物	97
図版6	1号掘建柱建物跡・発掘状況	92			

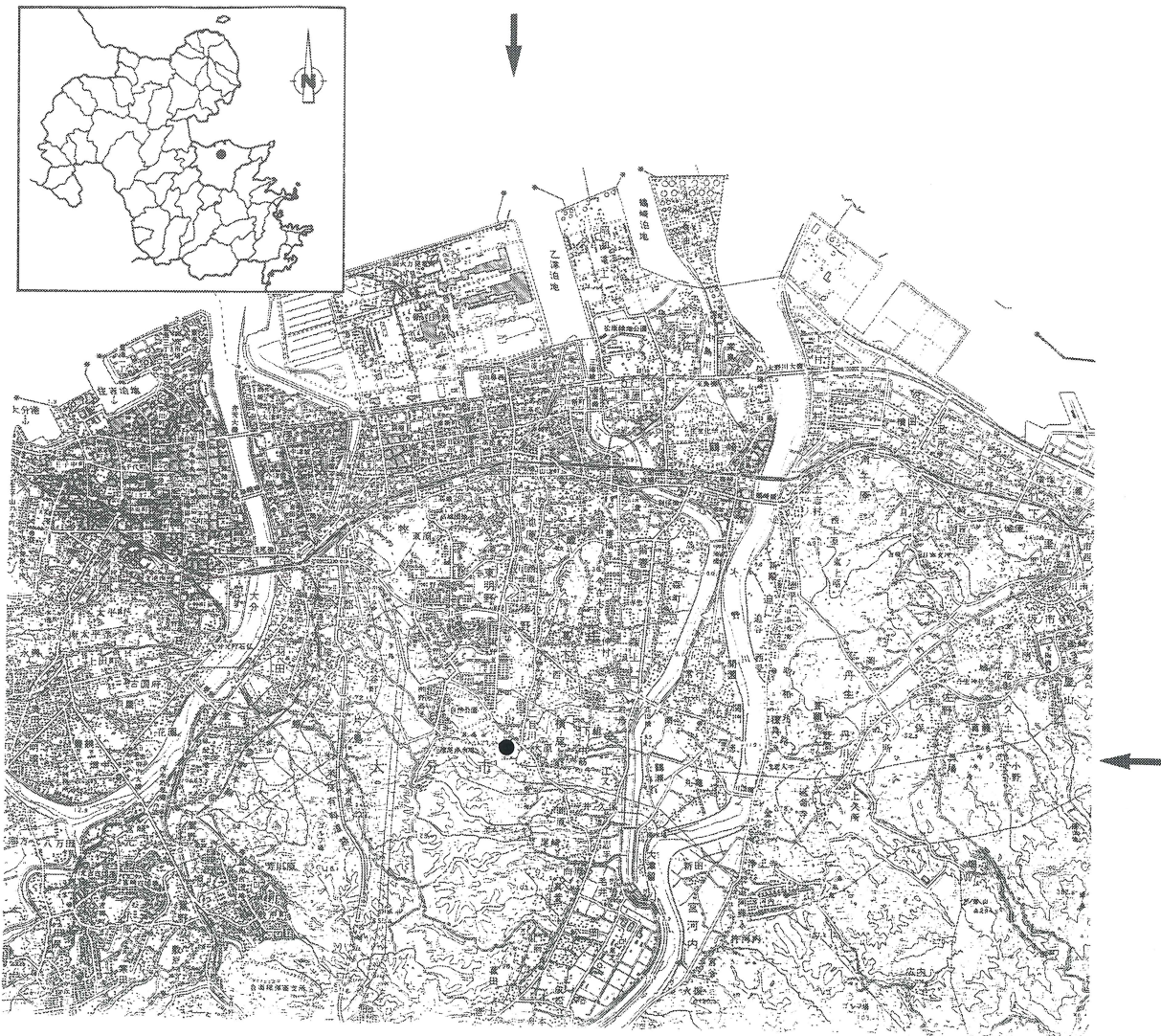
第1章 序章

第1節 調査の経緯

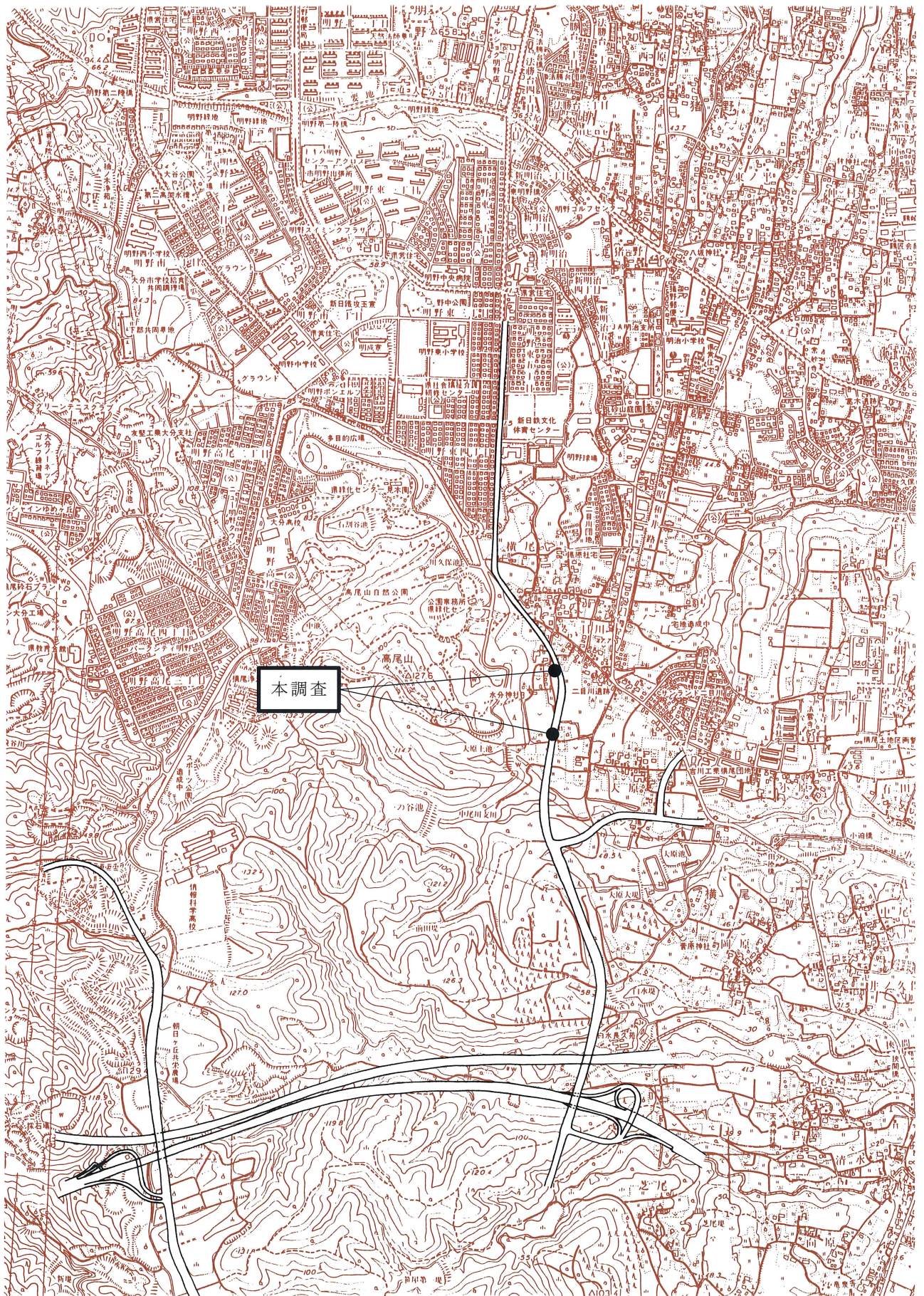
1、調査に至る経緯

大分県スポーツ公園は、平成14（2002）年のワールドカップや二順目国体のメイン会場である。大分県は平成8（1996）年度より平成13（2001）年の完成を目指して工事を開始すると共にスポーツ公園周辺の交通網の整備にも着手した。平成13（2001）年供用予定の県道松岡日岡線改良工事もその一環である。建設予定の松岡～横尾間約2,700mは既に供用中の松岡日岡線の南側延長部にあたり、平成12（2000）年完成予定の国道197号南バイパスに直結する。平成14（2002）年にはスポーツ公園と直結する市道に連結することにより東九州自動車道とスポーツ公園とのアクセスが可能になる。工事に先立ち、大分県教育委員会では建設予定地が周知遺跡であることから工事施工者である大分県大分土木事務所スポーツ公園建設部と区間内の埋蔵文化財の取り扱いについて協議し、平成10（1998）年6月より路線内の試掘を行い3ヶ所の埋蔵文化財包蔵地を確認した（その内1ヶ所については試掘時に調査済み）。その結果を基に大分県教育委員会は再度大分県大分土木事務所スポーツ公園建設部と協議し、その委託を受け平成11（1999）年より本調査を実施することになった。

二目川遺跡B地区の本格的調査は平成11（1999）年6月30日に開始し10月12日に終了した。奈良～平安時代にかけての掘立建柱建物跡1棟をはじめとする遺構群、包含層からは多量の土器を主とする遺物が出土した。その中でも製塩土器や多量に出土した鞆の羽口、また焼土を含む土坑などは本遺跡の性格を解明する上にも重要な資



第1図 遺跡の位置（国土地理院 50,000分の1「大分」）



第2図 県道松岡日岡線調査地点位置図

料である。また、この遺跡はきわめて限られた時期の遺跡であり、二目川遺跡の南に展開する同時期の遺跡や須恵器の窯跡などとの関連性も考えられ、鶴崎丘陵における歴史を解明する上で貴重な発掘成果が得られることとなった。

2、調査団の構成

発掘調査・報告書作成は以下の組織・期間で行った。

二目川遺跡 A・B 地区（試掘調査）

調査期間 平成10（1998）年6月11日～平成10（1998）年8月17日

調査主体 大分県教育委員会

調査委員 後藤一郎（文化課長）

調査主任 清水宗昭（文化課課長補佐兼埋蔵文化財第二係長）

調査担当 栗田勝弘（文化課主幹）

二目川遺跡 I・II 地区

調査期間 平成11（1999）年6月30日～10月12日

調査主体 大分県教育委員会

調査委員 山本芳直（文化課長）

調査主任 清水宗昭（文化課課長補佐兼埋蔵文化財第二係長）

調査担当 高橋信武（文化課副主幹）

甲斐寿義（　　主査）

山路康弘（　　嘱託）

調査協力者 高倉洋彰（西南大学文学部教授）

第2節 遺跡の立地と環境

1、地理的環境

大分平野は九州の北東部に位置し、北に瀬戸内海西端の別府湾、東に佐賀関半島及び豊後水道、南に祖母傾山系、西には九重連山が展開している。平野の三方は九六位山、霊山、障子岳、高崎山、雨乞岳などの400m～800m級の山々を取り囲み、平野の中央部には大分県を代表する河川である大分川と大野川が北方の別府湾に流れ込んでいる。気候的には瀬戸内型が南海型や九州山地型に移行する遷移域にあるとされている。

二目川遺跡B地区はこの大分平野の東部、大分市大字横尾字二目川に所在する。地形的には大野川左岸、標高165mの古城山を基部として南から北へ延び別府湾を望む洪積台地の東端、鶴崎台地と呼ばれる丘陵上の高尾山麓東斜面、標高約50mに立地している。地質学的には横尾面とよばれる段丘で、鶴崎台地上では最も広く分布する段丘面であり、大分層群の滝尾V層、片島互層上部にあたる（以上大分市史）。段丘の東は、大野川の侵食により崖となり大野川支流の乙津川を望み、さらに沖積地を挟んで現在の大野川が北流している。なお、遺跡の現状は畑地及び水田である。

2、歴史的環境

鶴崎台地やその対岸の丹生台地上には旧石器時代から近世にいたるまでの遺跡が数多く存在することが知られている。それに比べ大野川が形成する沖積平野では極端に遺跡数が激減する。このことは大野川の氾濫のすごさを物語るとともに人々がその氾濫を避けるため安定した台地上に生活の場を求めたからであろう。ここでは二目川遺跡と関係のありそうな時期の周辺の遺跡をみってみる。

旧石器時代

この段丘上の歴史は旧石器時代にさかのぼる。かつて同じ段丘上にある多武尾遺跡の溝状遺構埋土中から無斑晶流紋岩製の石器が出土したことにより、段丘上にも旧石器時代の遺跡の存在が予見されていたが、近年、大分県スポーツ公園建設に伴う緊急発掘調査で西日本でも有数の原石産地遺跡である一方平I遺跡が発掘されたことにより大規模な旧石器時代の遺跡の存在が明らかになった。同じスポーツ公園内の一方平II・III遺跡、牧ノ内遺跡、



第3図 二目川遺跡と周辺の遺跡 (国土地理院 25,000分の1「鶴崎」)

番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
①	二目川遺跡	2	牧六分遺跡	3	牧遺跡	4	松栄山横穴墓群	5	高城石棺群
6	下郡横穴墓群	7	北下郡横穴墓群	8	穴井前横穴墓群	9	下郡遺跡群	10	羽田遺跡
11	長谷横穴墓群	12	滝尾百穴横穴古墳群	13	岩屋遺跡	14	津守遺跡	15	高松東遺跡
16	小池原貝塚	17	米竹遺跡	18	地藏原遺跡	19	千歳城遺跡	20	尾崎遺跡
21	北の崎遺跡	22	猪野遺跡	23	葛木遺跡	24	米良草遺跡	25	水分神社銅矛出土地
26	横尾下組遺跡	27	多武尾遺跡	28	東中尾遺跡	29	有田遺跡	30	有田遺跡
31	横尾貝塚	32	岡原遺跡	33	松岡遺跡	34	清水遺跡	35	向原遺跡
36	真萱遺跡	37	真萱石棺	38	松岡城址	39	京ヶ尾銅矛出土地	40	一の谷横穴墓群
41	一の谷南横穴墓群	42	門前遺跡	43	上松岡遺跡	44	一方平Ⅰ遺跡	45	一方平Ⅱ遺跡
46	一方平Ⅲ遺跡	47	一方平Ⅲ遺跡	48	論出遺跡	49	牧ノ内遺跡	50	九池遺跡
51	上牧ノ内Ⅰ遺跡	52	上牧ノ内Ⅱ遺跡	53	上牧ノ内Ⅲ遺跡	54	小平ノ辻遺跡	55	鶴崎町遺跡
56	鶴崎御茶屋跡	57	専想寺遺跡	58	王越遺跡	59	屋宗横穴墓群	60	西上の原北遺跡
61	上の原北遺跡	62	丹生遺跡群	63	野間古墳1号墳	64	野間古墳2号墳	65	野間古墳3号墳
66	野間古墳4号墳	67	野間古墳5号墳	68	野間古墳6号墳	69	野間古墳7号墳	70	野間古墳8号墳
71	野間古墳9号墳	72	野間古墳10号墳	73	延命寺遺跡	74	新田遺跡	75	阿蘇入横穴墓群

九池遺跡、上牧ノ内Ⅱ遺跡では少数の石器や剥片類が、同じ丘陵上の明野遺跡、尾崎遺跡でも流紋岩の剥片が出土していることから小規模な遺跡も点在していたと思われる。

縄文時代

この時期の遺跡としては、丘陵下の小池原貝塚や、横尾貝塚が知られている。ここでは前期から後期にかけての土器が検出され、遺構も埋葬・土坑・住居跡などが明らかになったが、丘陵上ではまだこの時代の遺跡の存在は知られていなかった。ところが上述の一方平Ⅰ遺跡や隣接する一方平Ⅱ遺跡では無文・押型文土器、平椀・塞ノ神式土器を主体とした集石炉を伴う遺跡が発見され、また一方平Ⅳ遺跡では中期の船元式や後期の西平式土器なども出土したことにより、丘陵上にも当該期の小規模ではあるが遺跡の存在が確認された。

弥生時代～古墳時代

弥生時代になると丘陵上の遺跡数も増加する。かつて明野団地造成の際に、前期から古墳時代に至るまでの土器や石器の散布が著しく認められたことによりこの丘陵上にも当該期の大規模な集落遺跡の存在が予見されていたが(註1)、近年、丘陵上の開発に伴いその存在が確認されることになった。早期から前期の段階では遺跡数はまだまだ希薄であるが、刻目突帯文土器を中心とする一方平Ⅳ遺跡や尾崎遺跡が挙げられる。東対岸の丹生台地では丹生、小原、一木、田尾、木田、平野の各地で前期土器が採集されている。中期～後期の遺跡としては多武尾遺跡、横尾下組遺跡、東中尾遺跡、岡原遺跡、松岡遺跡、二目川遺跡B地区など特に後期の遺跡数が爆発的に増加する。この時期には、大分平野や大分川・大野川の上・中流域でも同じように遺跡数が増大し、広範囲に広がる。多武尾遺跡の小銅鐸、水分神社や松岡の京ヶ尾遺跡出土の銅矛は祭祀に伴うものとして注目される。

古墳時代では、地蔵原遺跡で布留式土器を伴う竪穴住居が検出されている。松岡の小牧山古墳群と真萱石棺、横尾の有田古墳群、横穴墓群としては松岡の一ノ谷横穴群、一ノ谷南横穴群、戸無瀬横穴群などが知られている。

奈良～平安時代

この時期の遺跡としては、瓦や硯が出土した地蔵原遺跡、古代の道が発見された猪野新土井遺跡、土師器の窯跡の井ノ久保遺跡などがあげられる。また、近年、スポーツ公園の建設に伴う開発により当該期の遺跡数が増大した。二目川遺跡B地区に隣接する牧ノ内遺跡、論出遺跡、九池遺跡などでは二目川遺跡B地区と同時期の遺物が多量に出土し、虫喰谷では大分平野では初めての須恵器の窯跡が発見された。また、上牧ノ内Ⅰ・Ⅱ遺跡は丘陵先端部からは大量の土師器が出土し、何らかの祭祀跡と考えられている。これらの遺跡は、いずれも二目川遺跡B地区の南側に展開しておりほぼ同時期の遺跡であることから何らかの関係があると考えられる。

註1 賀川光夫「大分県の考古学」1971

第2章 発掘調査の成果

第1節 平成10年度試掘調査

1、調査の経緯

県教育庁文化課では平成10年度に、スポーツ公園建設に伴う、県道松岡・日岡線の道路建設施行区間約2kmの試掘・確認調査を実施した。その結果、路線内の周知遺跡である二目川遺跡において、3個所に遺構、遺物の集中する地域があり、これを二目川A地区、二目川B地区、二目川C地区と呼称した。ここでは、二目川A地区、二目川B地区の試掘調査結果を報告する。

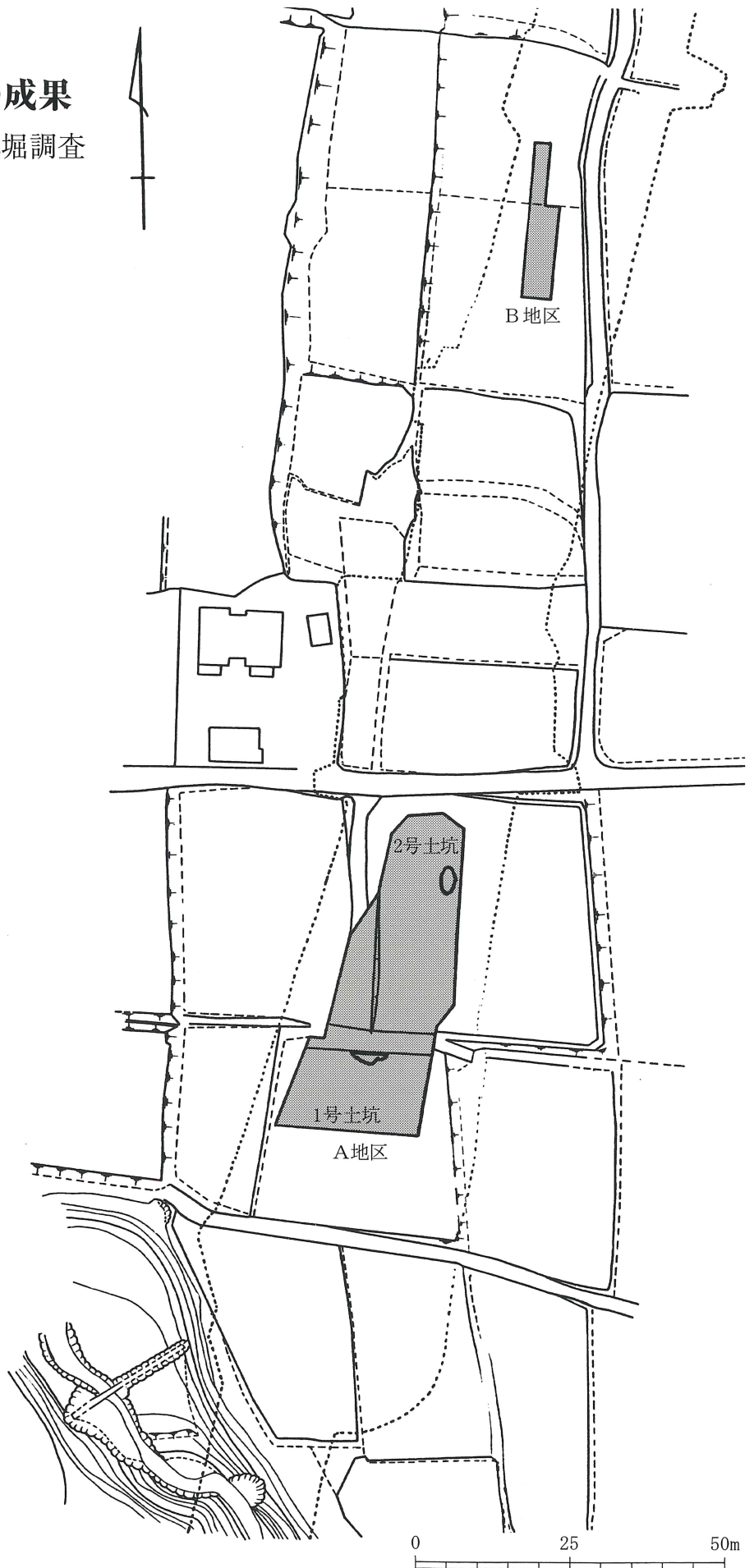
2、遺物と遺構

(1) 二目川遺跡A地区

二目川A地区は、標高約54mで面積約800㎡である。現況は水田と畑地であり、遺構は表土、耕作土を除いた約50cm前後下のローム層直上で検出できる。遺構、遺物としては古代の不定形土坑を二基とこれに伴う遺物を検出している。また、A地区及びその周辺部から若干の遺物を収集している。

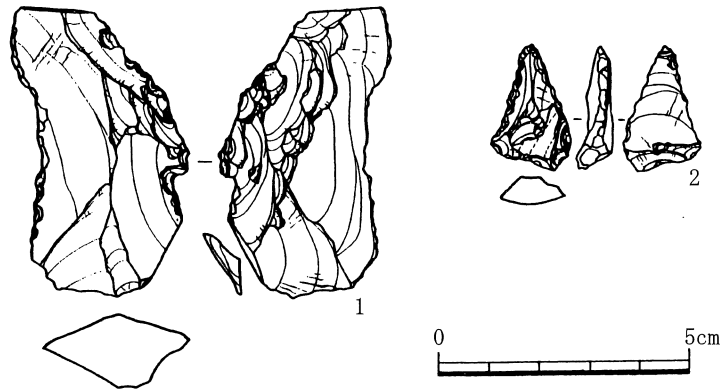
A地区は試掘調査として施行したが、遺構・遺物が僅少なため、結果としては、試掘調査の延長で調査を終了することができた。

1は無班晶流紋岩製の分厚い剥片である。側辺の一部には細かな二次加工調整を施す。後期旧石器時代のものである。縦長5.8cm、横長3cm、重さ21.5g。2は姫島産黒曜石製の石鏃未製品である。不定形剥片の周辺に細かな加工を加え三角形に調整したものである。縦長2.5cm、横長1.6cm、重さ1.7g。3は砂岩製の砥石である。形は立方体を呈し、全ての面でツルツルの研ぎ痕が認められる

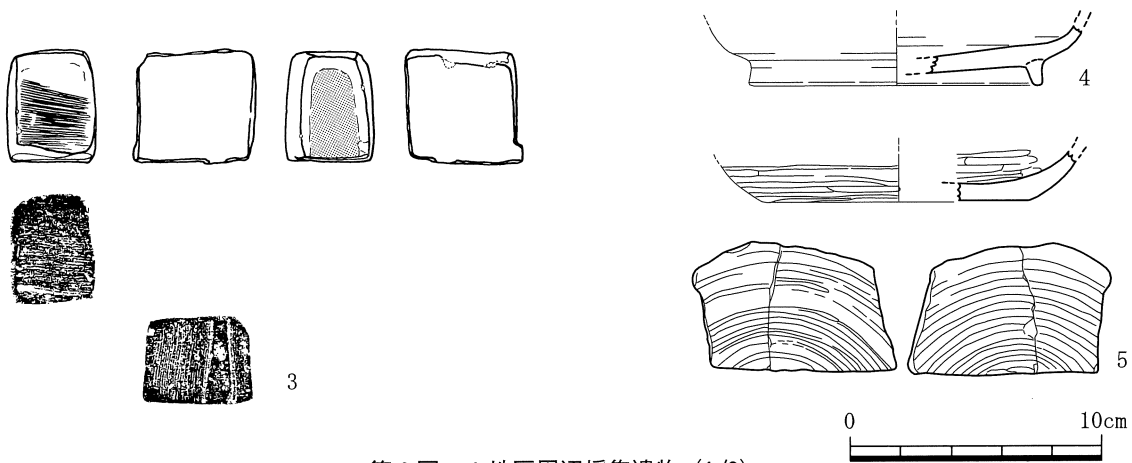


第4図 遺跡の位置 (国土地理院 50,000分の1「大分」)

が、2面には微細な線状痕跡を残している。最大縦長4.5cm、横長4.3cm、厚さ3.4cm、重さ119g。4、5は土師器の坏の底部である。4は高台付きであり、裏表は回転撫で調整を施す。復元底径11.8cm。5の復元底径は11cmであり、表裏の表面には緻密な回転ヘラ磨きが施されている。いわゆる都城系の一群であろうか。



第5図 A地区周辺採集遺物 (2/3)



第6図 A地区周辺採集遺物 (1/3)

1号不定形土坑 (第7図)

A地区の南寄り中央で1号不定形土坑が検出されている。土坑は東西に延びた近代の溝状遺構で大きく切られており、平面プランは明瞭ではない。遺存部分は、方形プランのコーナーと楕円状土坑が切り合った様相を呈するが、全体的な形態は不明である。遺構の立ち上がりは緩く確認面から床面までは10~20 cmを呈している。床面上には焼土や炭化物のまとまりがあちこちに点在している。遺物は古代の土師器類である。

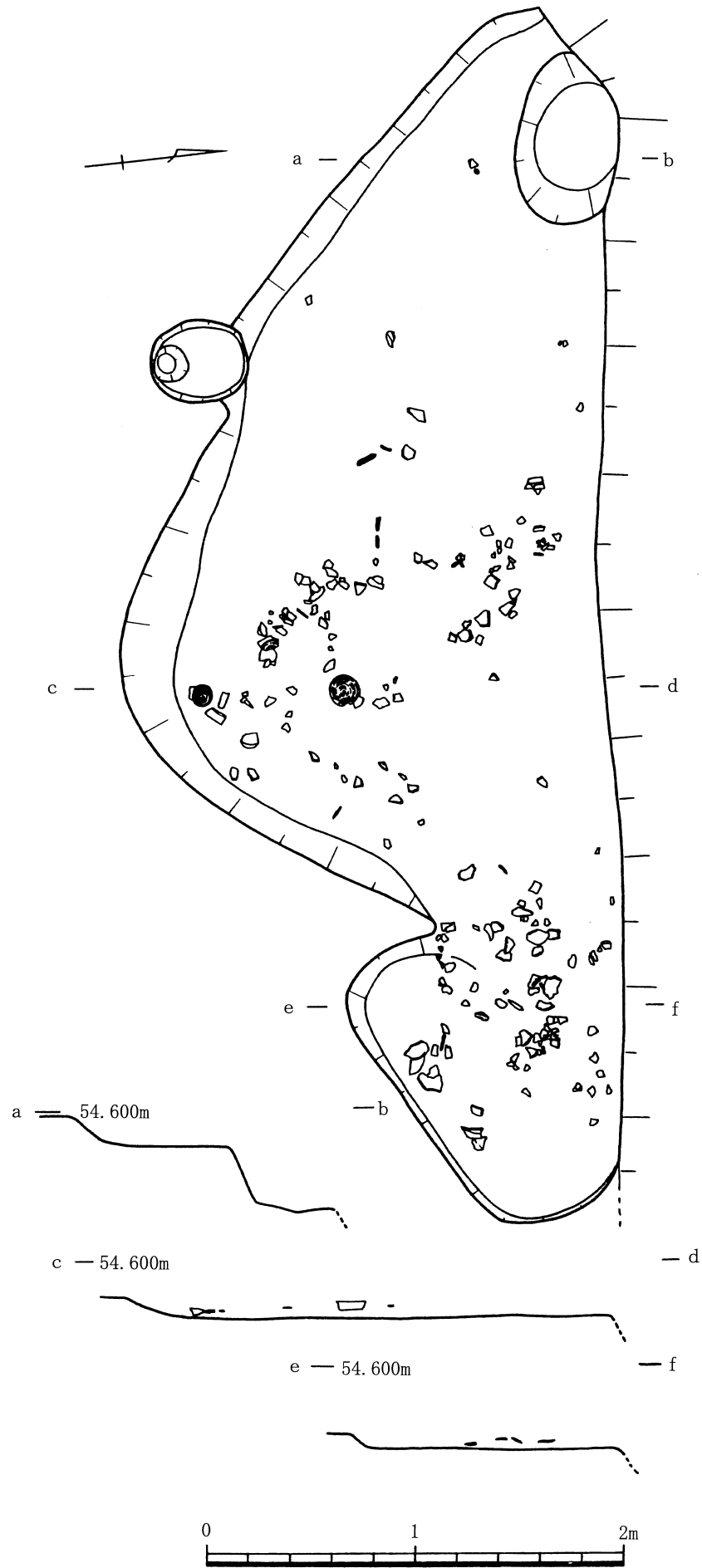
1号不定形土坑内出土遺物 (第8、9図)

第8図1~17は土師器の坏身である。底部はいずれも右回り回転のヘラ切り調整であり、坏の表裏面は撫で調整している。底部はヘラ切り離しのままであり、中央部に低い瘤状の痕跡がのこっている。底部から斜めに延びた体部との境は、3、15を除いて全体的に丸く仕上げている。1、2、10、16は口縁部がやや窄まるものである。口径は直径13.1~15.6 cm、底径は7.2~12.5 cm、器高は3.7~4.1 cm内に納まっている。第9図1~5は器高の高さのわりには、口径の広い土師器の坏の一群である。表裏は撫で調整され、底部は回転ヘラ切り痕跡を呈する。3は口縁部が尖り、底部と体部との境は丸く、やや上げ底気味である。この一群の口径は、直径14.6~18cm、底径は11.8~15 cm、器高は2.5~3.6 cm内に納まっている。6~8は体部から底部にかけて丸く納まる土師器の椀の一群である。6は表裏撫で調整され、口径12.8cm、底径は8 cm、器高は3.3 cmの小型である。7は口径17.6cmで表裏撫で調整され、口縁部内側は沈線状に成形されている。8は口径19cmである。表裏撫で調整後、口縁部内側と体部は回転ヘラ磨き調整で成形されている。都城系といわれる特徴的な一群である。9~13は土師器の坏の蓋である。丸みを持つ天上部から斜めに下りた口縁部は尖り気味である。表裏撫で調整されている。11~13は低いボタン状のつまみの付くものである。撫で調整後、11の天井部はヘラ磨き、13は回転ヘラ磨き

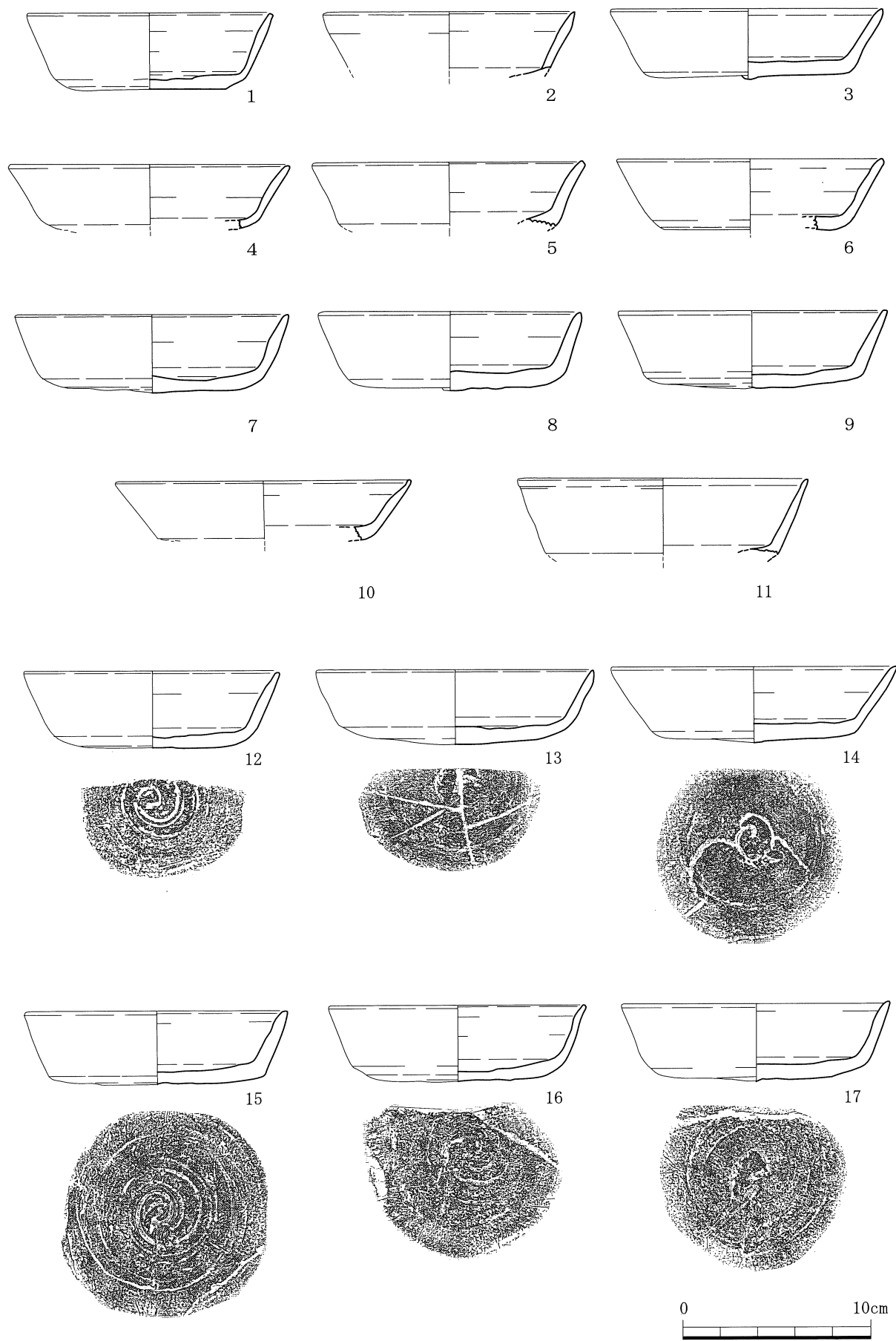
を施している。11が口径15 cmの他は全て口径14cmである。14は土師器の高坏である。口唇部は沈線状の成形し、高坏内部底はヘラ研磨している。脚部の先端は鳥のくちばし状に仕上げている。口径16.9 cm、底径9.2 cm、器高10 cmである。15は土師器の甕の口縁部である。

2号不定形土坑(第10図)

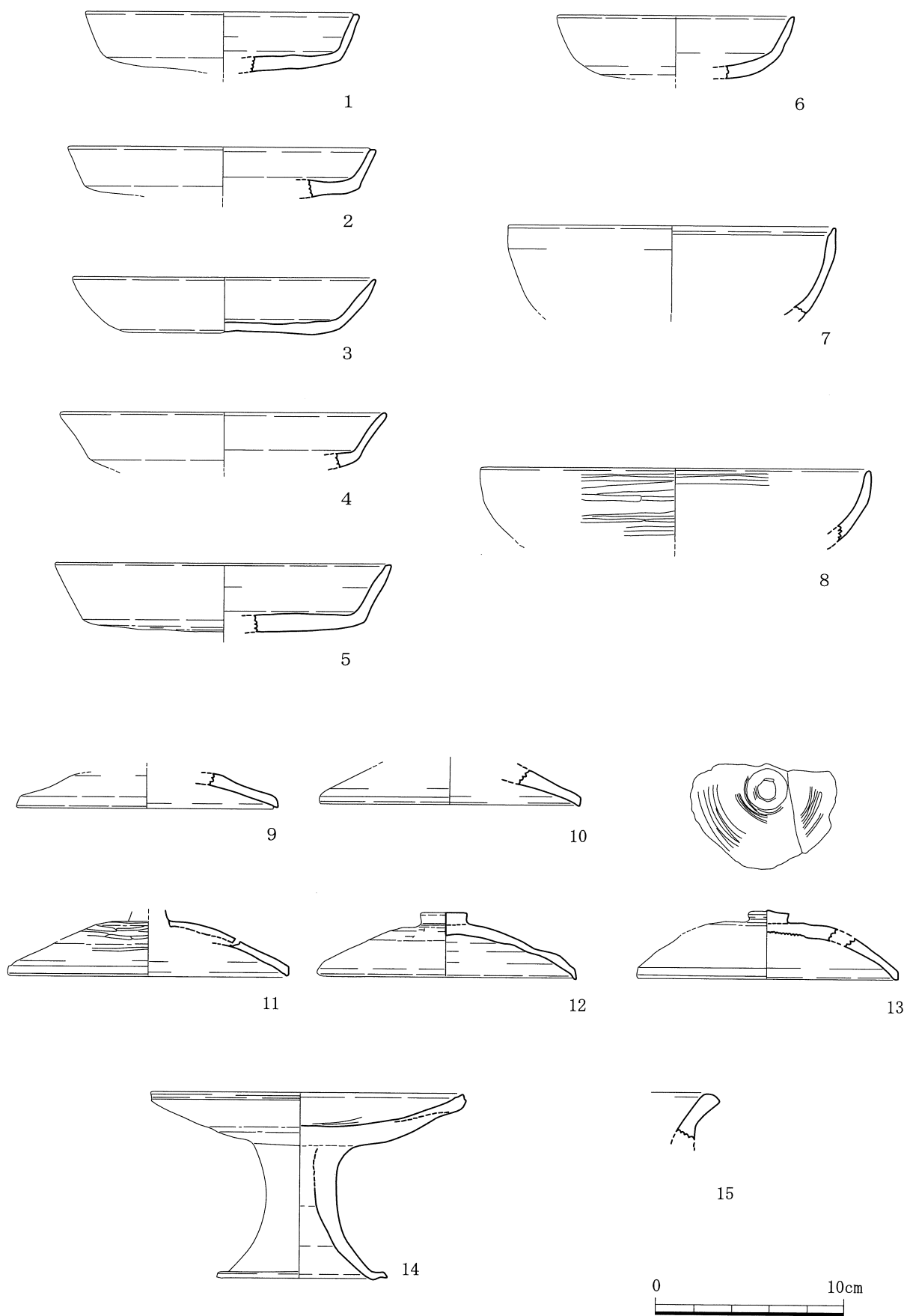
A調査区の北東部、表土下約50cmで検出された楕円状プランの土坑である。長径8.4m、短径4.5mであり、土坑の深さは確認面から平均40cm程度であり、中央の円形状土坑では75 cmである。確認面の標高は53.400mを測る。土坑の覆土は黒褐色を呈している。土坑は円形や隅丸三角形のものが複数組み合わせたり、結果的に楕円状土坑になったものであると推測される。土坑の床面からの立ち上がりは緩い。なお、中央の円形状土坑の覆土上には黄褐色の貼り床状の土が堆積していた。



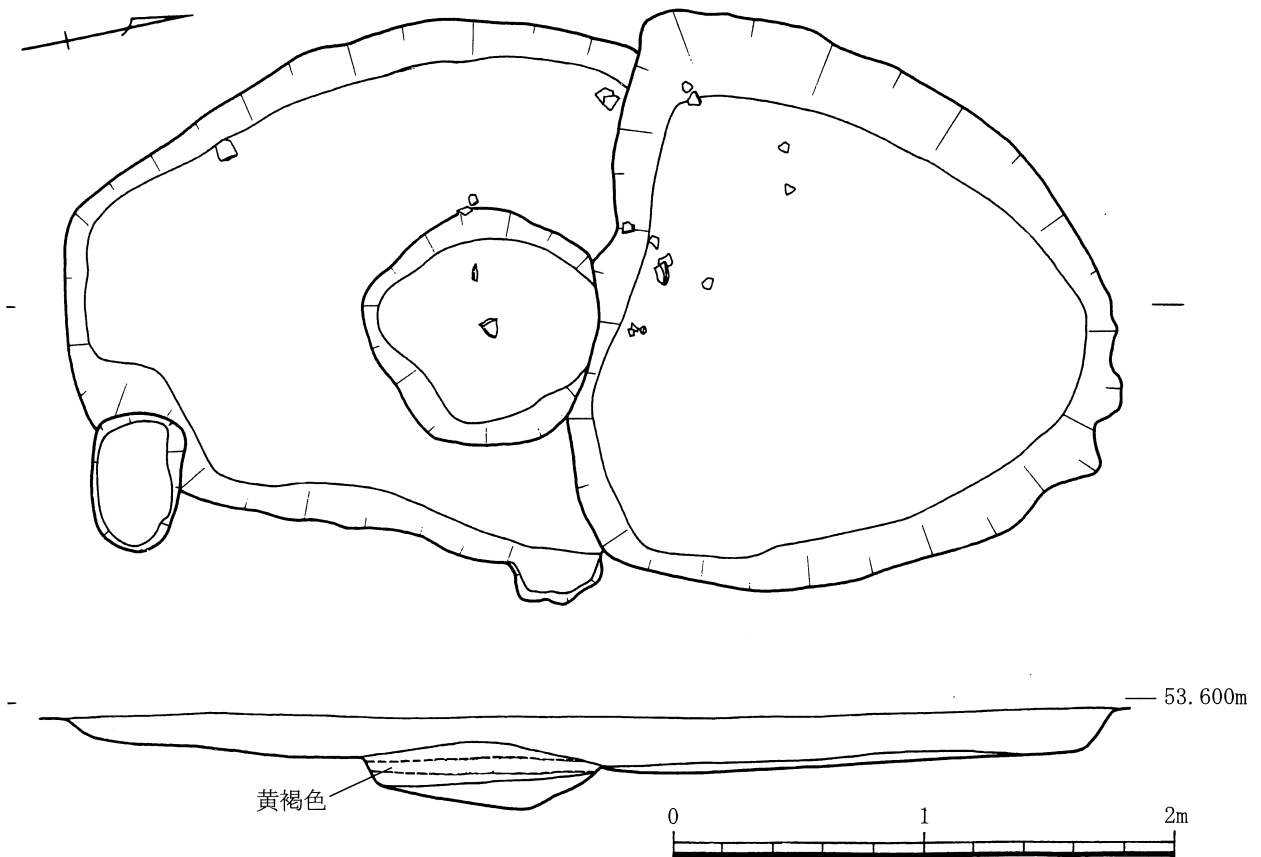
第7図 1号不定形土坑実測図(1/30)



第8图 1号不定形土坑内出土遗物 (1/3)



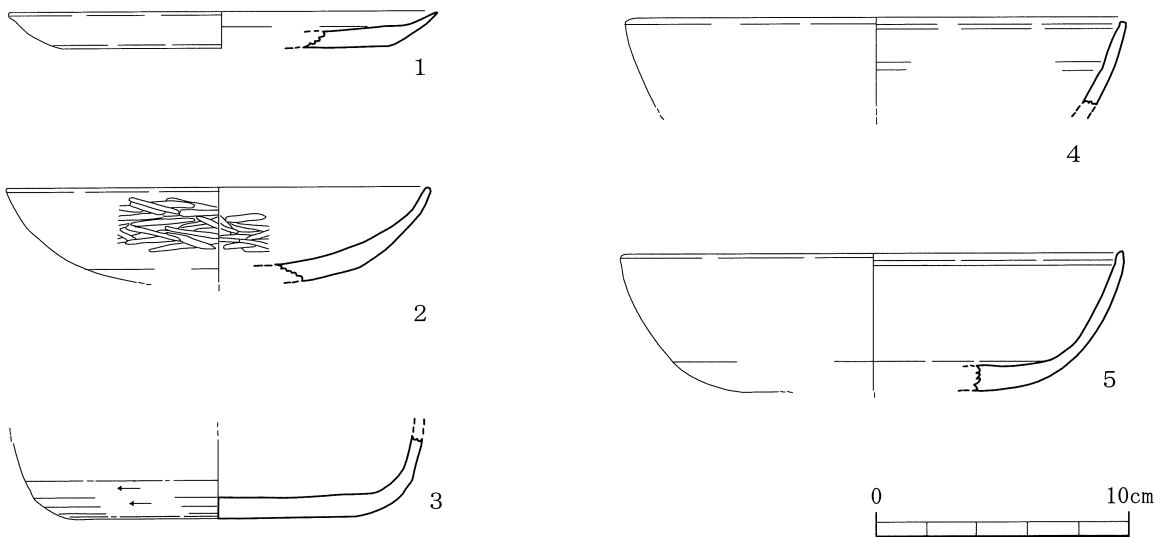
第9图 1号不定形土坑内出土遗物 (1/3)



第10図 2号不定形土坑実測図 (1/30)

2号不定形土坑内出土遺物 (第11図)

1は土師器の皿である。平坦な底部から斜めに延びた口縁部の端は細く仕上げている。底部は回転ヘラ切り後撫で調整。口径17cm、底径13cm、器高1.4cmである。2は土師器の椀形土器である。表裏は撫で調整後にヘラ磨き調整をしている。口径16.8cm、器高3.8cmである。3は土師器の坏底部である。底径22cmで体部との境は丸く、回転ヘラ切り痕跡を残している。4、5は土師器の椀形土器であり、表裏は撫で調整している。4、5の口径は20cmで、5の器高は5.5cmを呈する。口縁部の内側には一本の沈線が巡っている。

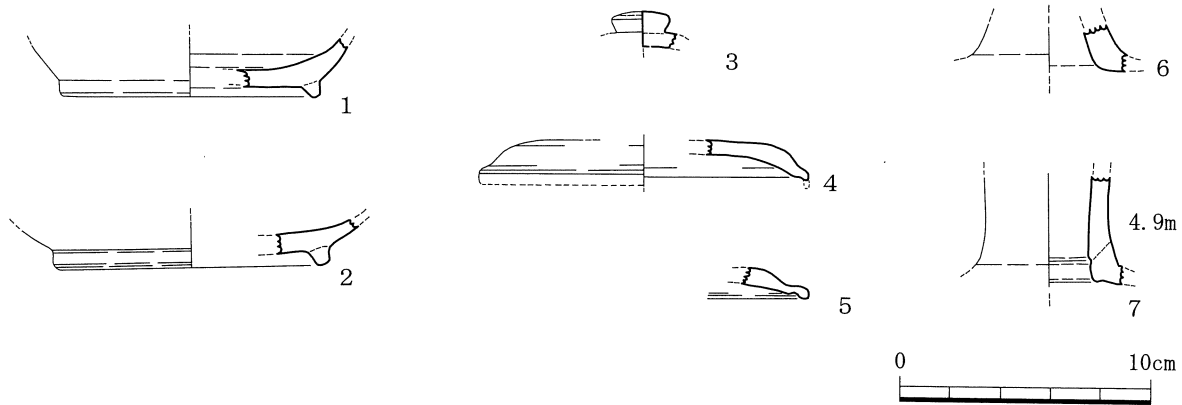


第11図 2号不定形土坑出土遺物実測図 (1/30)

(2) 二目川遺跡B地区

須恵器 (第12図1～7)

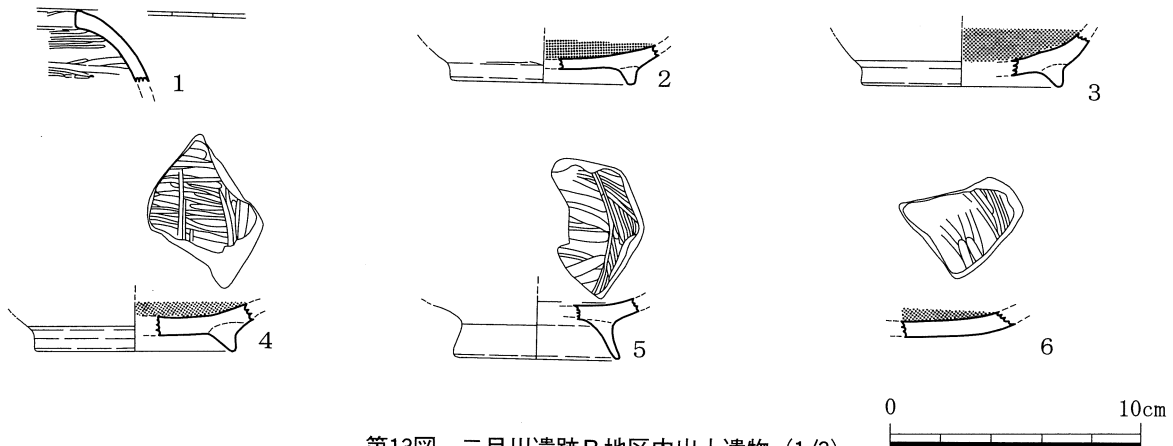
1、2は高台付きの須恵器の坏である。1の底径は10.4cm、2の底径は11cmである。3～5は須恵器の蓋である。3はボタン状のつまみ部分、4の口径は13.2cmで蓋の口縁部は欠損している。5はいわゆる鳥の嘴状に仕上げている。6、7は須恵器の壺の頸部である。7の首部の径は4.9cmである。



第12図 二目川B地区内出土遺物 (1/3)

黒色土器A (第13図1～7)

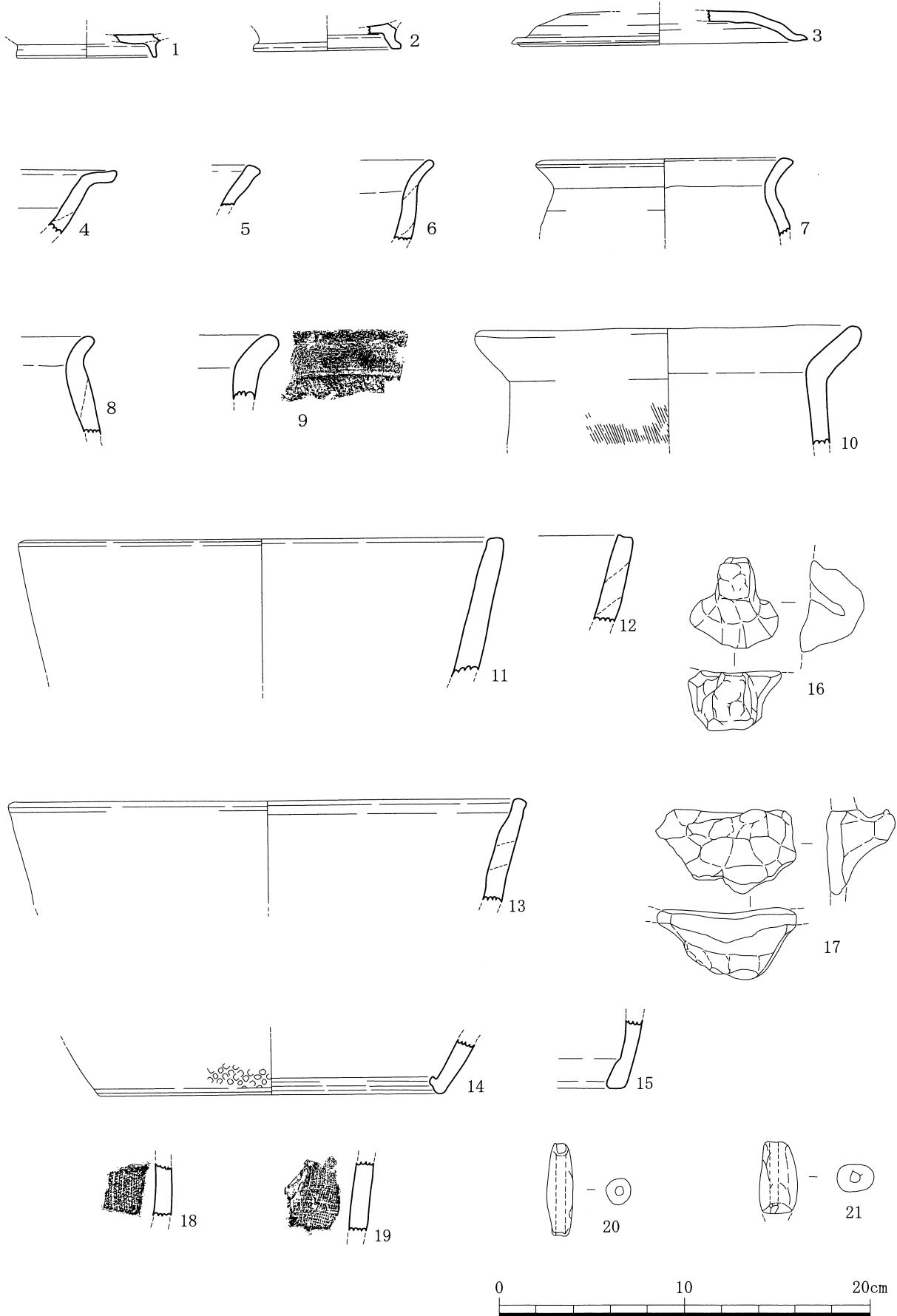
1～6は黒色土器Aと呼ばれる内黒土器である。1は内湾する口縁部である。土鍋であろうか。口縁と内側はヘラ磨きされている。2～5は高台付きの椀である。内面は黒色であり、ヘラ研磨されている。2の底径は7.4cm、3、4の底径は8cm、高台のやや高い5の底径は6.6cmである。4、5のヘラ磨きは顕著である。6は坏か皿の底部である。内黒でヘラ研磨が施されている。



第13図 二目川遺跡B地区内出土遺物 (1/3)

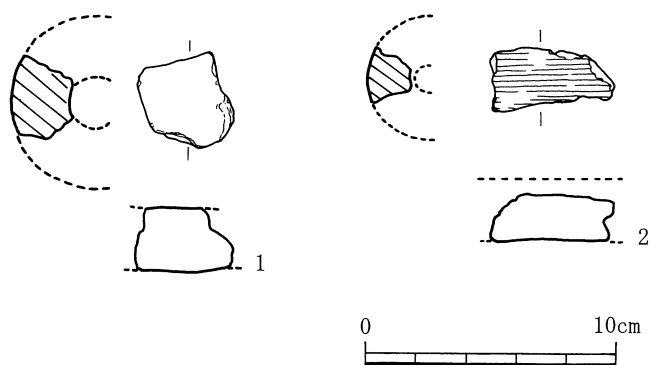
土師器 (第14図1～21)

1、2は土師器で高台付きの坏の底部である。1の底径は7.7cm、2は精製胎土で底径は8cmである。3は土師器の坏の蓋である。天井部は回転ヘラ切り、表裏は撫で調整している。鳥の嘴状を呈する口径は16cmである。4～6は土師器の鉢の口縁部である。表裏は横撫で調整を施す。7は土師器の小型甕である。口径14cmで、表裏撫で調整。8～10は甕形土器である。表裏は撫で調整され、9、10の表面には斜め縦方向の刷毛目調整が施されている。10の口径は20.8cmであり、胎土に結晶片岩を多量に含んでいる。企救型甕と言われるものである。11～15は甕の破片である。11～13は口縁部であり、11の口径は26.2cm、13の口径は27.8cmである。表裏撫で調整をしている。14、15は段を持つ甕の底部である。14は底径18cmであり、表面下端には格子目の叩きが施されている。16、17は甕や甕の把手である。手づくねであり、16は上方に巻き上げている。18、19は焼



第14图 二目川遺跡B地区出土遺物 (1/3)

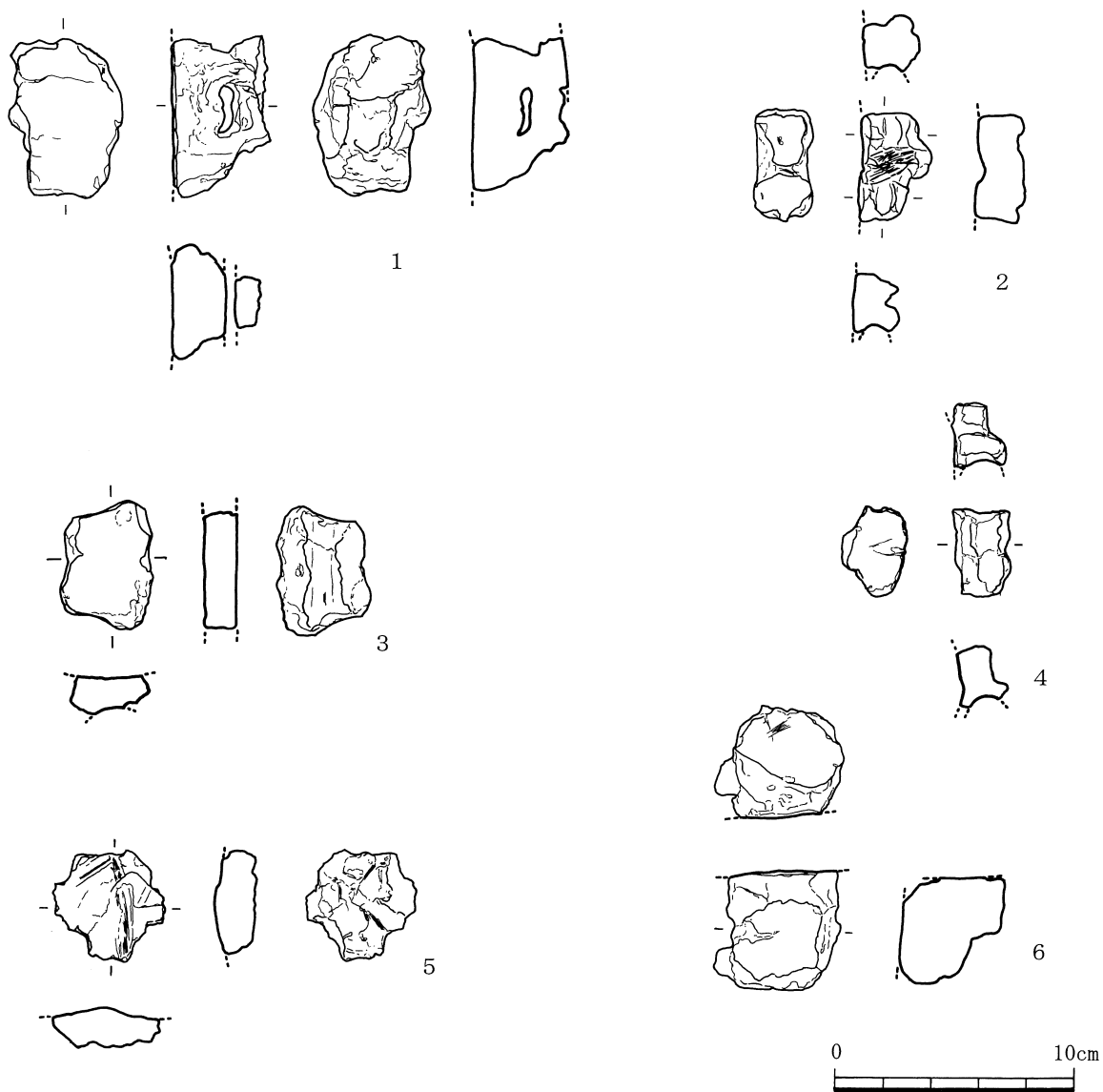
き塩用の製塩土器である。形作りの土器であり、内面には布目痕跡がのこっている。六連式といわれるものであろう。20、21は管状土錘である。20は長さ5 cm、最大径1.4cm、重さ9.2 g。21は一部欠損しており、現状での長さは3.9cm、最大径2 cm、重さ12.8 g。



第15図 二目川遺跡B地区出土遺物 (1/3)

鞆の羽口 (第15図1、2)

1、2は鞆の羽口である。1の外径は6.8cm、内径2 cm。2の外径は5 cm。色調は赤褐色で硬化してる。



第16図 二目川遺跡B地区出土遺物 (1/3)

焼土塊（第16図 1～6）

1～6は焼けた土壁の一部と考えられる焼土塊である。土塊にはスサ状の炭化物が混入しており、スサを切っ
て混ぜ込んだ様相として観察することができる。1は最大長6.5cm、最大幅4.8cm、厚さ4cmで赤褐色を呈する。
土塊には平坦面を一部に残し、土塊の中心には、直径3cmの竹状のものを4分割した一つと推察できる圧痕が
遺存していた。2は最大長4.5cm、最大幅3cm、厚さ2cmで赤褐色を呈する。中央には直径1.2cmの荒縄の圧
痕や竹管状の圧痕が付着していた。3～5の焼土塊には、片面に平坦面を持つものや竹管状の圧痕が遺存してい
る。6は「L」字状に平坦面を持つものである。

3、小結

A調査区の不定形土坑とB調査区の焼土塊について

A調査区の遺構としては、古代の不定形土坑が2基であった。その内、1号土坑は近代以降の溝に大きく削平
を受けており平面プランは判らない。覆土には焼土と古代の土師器の完形品や破片が多数包含されていた。また、
2号土坑は楕円状を呈するが、幾つかの土坑が切り合った関係にある。このような様相は、日出町会下遺跡(註1)
で検出された同時期の不定形土坑の実態と酷似している。つまり、会下遺跡では、出土した焼土塊と掘立柱建物
に付随する不定形土坑の機能として7項目を掲げ、土坑群の機能としては、第1義的には建物の壁土を採取した
穴と想定し、これに水とスサとを捏ね合わせ、建物の壁土を造った場所として推測した。その後、土坑は廃棄物
の処理場として、つまりゴミ捨て穴として二次的に活用されたものと推察した。この考え方は、今回の調査資料
の所見によっても矛盾無く説明できそうである。

それは、B地区で検出された土壁と推察される遺物の発見である。これは、赤褐色を呈し、土の中にスサ状の
炭化物が混入している焼け土の塊(註2)である。これらは、用途不明なものとして処理されがちであるが、掘立
柱建物の土壁に用いられていたものが、火災により焼失したものと推量することも可能である。つまり、建物使
用の土壁は歳月と共に風化して自然に戻るが、火を受けた部分のみが、土器と同じ様に硬化し、風化作用を免れ
たと解釈することができそうである。

焼土塊の特徴をみると、次のように整理できる。

- (1) 焼土塊は赤褐色で、塊の中にはスサ状の炭化物が混入している。土の表面は手捏ねのような粗い感触を呈する。
- (2) 焼土塊は厚さ2～4cmであり、平坦面を一～二面に残している。中には「L」字状に平坦面を持つものもある。
- (3) 焼土塊の中心には、直径3cmの竹管状のものを、4分割した一つと推察できる中空部とその圧痕や管状の圧痕が遺存していた。
- (4) 焼土塊の中央には直径約1.2cmの荒縄の圧痕が付着していた。

ところで、現在でも、和風建築で土壁を塗る場合、割った竹を荒縄で交互に組んだものを土壁の骨組みとして
使用しており、これをベースとして、土壁を塗り込めて行くのが一般的である。(1)～(4)の特徴は、この考
え方に抵触する要素は無く、このことから、焼土塊は土壁であろうと推察されるのである。

不定形土坑の用途や機能は推測の域を出ないが、今回出土した焼土塊を上述したように、土壁と推察できれば、
会下遺跡で考察した不定形土坑の7項目の特徴と有機的に関連してくるのである。柱穴の並びだけで想像してい
た掘立柱建物の上部構造は、土壁の発見でかなりリアリティに富んだものとなり、建物様式にも幾つかのバリエ
ーションを想定することができそうである。

註1 栗田勝弘「会下遺跡」『大分空港道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1』大分県文化財調査報告第83輯 大分県教育委員会 1991

註2 土居和幸・行時志郎『小迫辻原遺跡発掘調査概報』日田市教育委員会 1990

第2節 平成11年度本調査

1、調査の経過

二目川遺跡の本調査は、平成10年度の試掘調査の結果を受け平成11年6月30日より実施した。調査対象区は2箇所であるが、その間の距離が250mほどあるため北側の調査区をⅠ区（試掘時はC地区）、Ⅱ区（試掘時はB地区）と設定し、Ⅰ区から本調査を開始した。

まずⅠ区の表土を重機により除去し、遺構を確認した。検出面がシルト質で水が湧くため遺構検出が困難であったが、2間×2間の掘立柱建物跡1棟と10数基の柱穴・土坑を検出した。そこで、調査区内を南北方向8m、東西方向10m単位にグリッドを設定し発掘調査を行った。（第18図参照）Ⅰ区の調査は7月19日に終了した。

Ⅱ区の調査は、Ⅰ区の調査と並行して7月5日より、重機で表土を除去する作業から開始した。耕作土を除去した後、Ⅰ区と同様に調査区内を南北方向8m、東西方向10m単位にグリッドを設定し（第26図参照）包含層の掘り下げから開始した。包含層の遺物については包含層が厚く古代の土器が多量に出土するため、グリッドごと一括して取り上げることにした。8月31日より包含層の掘り下げと並行して遺構検出作業を開始した。その結果、溝状遺構、竪穴住居跡（?）、2間×3間の掘立柱建物跡、用途不明の土坑などを検出した。9月10日より4A・B区の溝状遺構、9月13日より3A・B区の竪穴住居跡、9月20日より溝状遺構周辺や2B区の掘立柱建物跡や柱穴群、9月29日より4B・5B区の土坑の掘り下げを行い、遺物は遺構ごとに取り上げた。竪穴住居跡については複数の遺構が重複していたので、重複関係が明らかになるまで1mグリッドごとに遺物の取り上げを行った。調査の結果、当初、竪穴住居跡群と考えていた遺構は竪穴住居跡と複数の土坑が重複した土坑群であることが確認できた。すべての作業を10月12日に終了した。

2、調査の概要

Ⅰ区 調査面積 約790m²（北側約290m²・南側約500m²）

遺構…2間×2間の掘立柱建物跡1棟と10数基の柱穴・土坑を検出した。いずれも出土した土器から近世の遺構である。土坑については、木杵状の木片が残存しているものも数基存在する。

遺物…遺構から出土した遺物は数点でいずれも小片である。すべて江戸時代から明治時代にかけてのものであり、それ以前の遺物については確認できなかった。

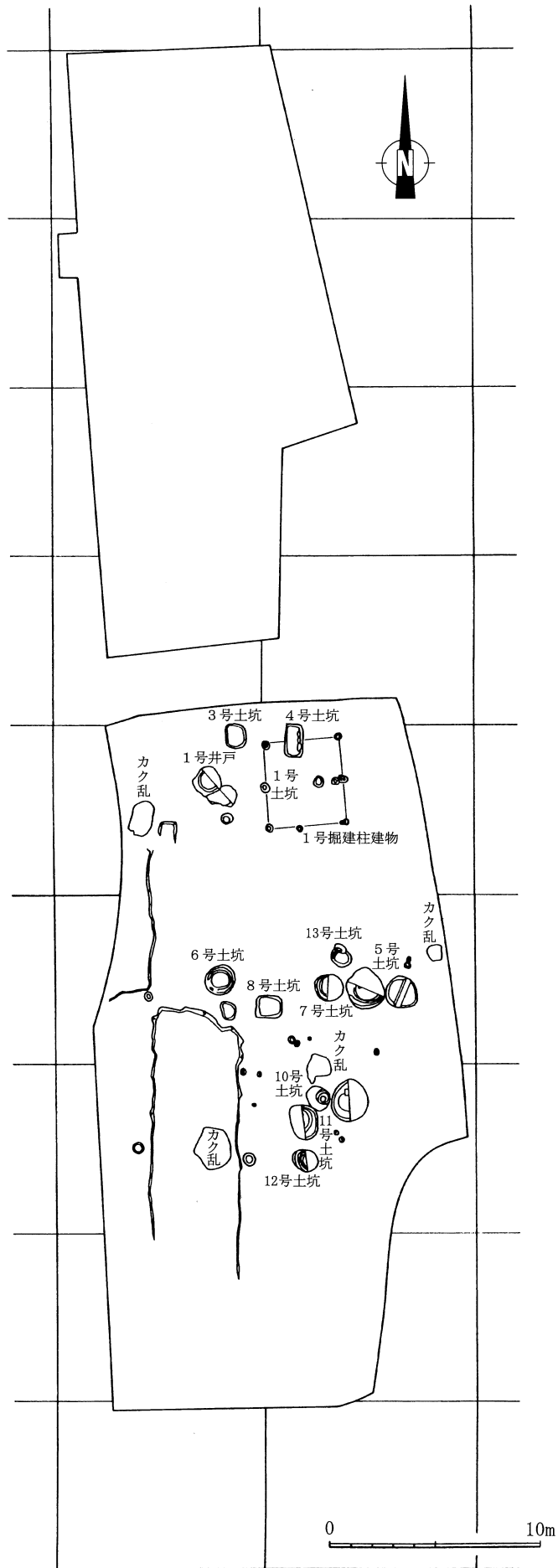
Ⅱ区 調査面積 約1200m²

遺構…溝状遺構3条、竪穴住居跡（?）1基、2間×3間の掘立柱建物跡1棟、用途不明の土坑12基、柱穴を多数検出した。用途不明の土坑のうち3基には焼土が含まれている。柱穴については建物が復元できたのは2間×3間の掘立柱建物跡1棟のみである。これらの遺構は出土した土器から8世紀後半から9世紀初頭の遺構と考える。

遺物…旧石器時代のナイフ形石器1本や流紋岩の剥片数点、弥生時代の石鏃1点などの石器類や、鞆の羽口、製塩土器、8世紀後半から9世紀初頭にかけての土師質土器や須恵器などの土器片が多量に出土した。



第17図 二目川遺跡 I・II区周辺地形図



第18図 I区遺構配置図 (1/300)

3、I区調査の成果

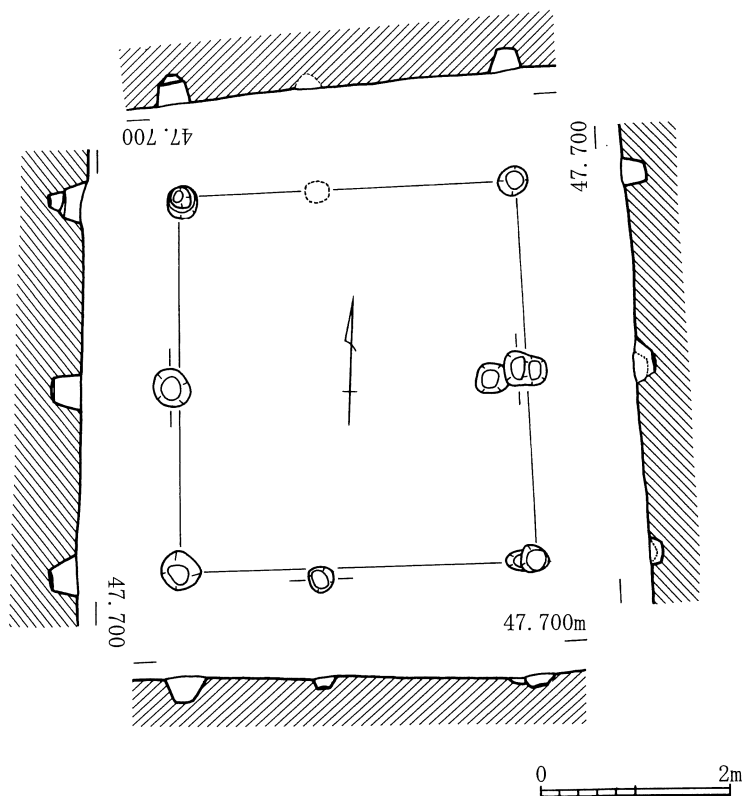
(1) 遺物と遺構

1号掘立柱建物(第19図)

I区南側の北端で検出され、2×2間で構成された建物である。規模は平均して東西約3.70m、南北約4.00mを測り、柱穴の深さは12~33cmである。柱穴内の埋土は、黒褐色土層である。また北側の柱穴は、一部平面では確認できなかったが、4号土坑の土層断面から4号土坑内に柱穴が存在していたことが確認できた。

1号土坑(第20図)

1号井戸に切られているが、現存している形状から隅丸長方形を呈する土坑で、床面は平坦である。規模は長軸1.04m+ α 、短軸0.95m、深さ12~18cmを測る。埋土はI層：茶褐色土層(灰白色粘土ブロックを含む)である。埋土に地山の灰白色粘土ブロックが混入しているため、掘削した後、すぐに埋め戻されたものと思われる。遺物としては、明治10年代の染付碗等の遺物が出土している。



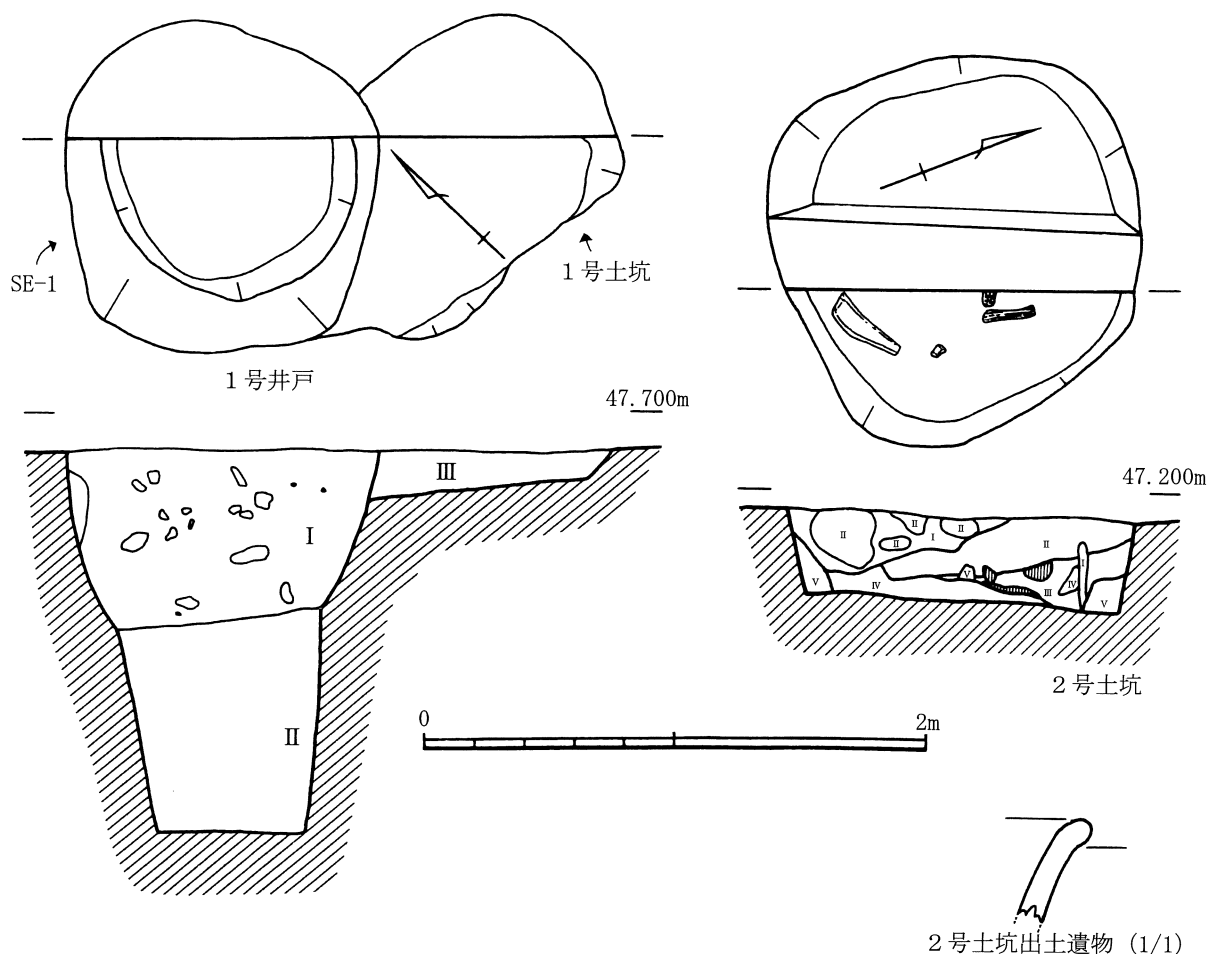
第19図 1号掘立柱建物実測図(1/80)

2号土坑(第20図)

ほぼ円形を呈する土坑で、床面はほぼ平坦である。規模は長軸1.54m、短軸は1.50m、深さ30~38cmを測る。埋土はI層：黒褐色土層、II層：灰白色粘土層、III層：I層より黒が強い、IV層：明褐色砂質土層、V層：灰白色粘土と黒褐色土の混合層である。またIII層中には10cm程の礫と、15~20cm程の木片がみられる。遺物としては、1の信楽焼の口縁部が出土した。時期は19世紀代で、口縁部は外反している。遺物の残存率が少ないため、復元口径は算出できず。他の遺物としては、19世紀代の土瓶や幕末以降の陶磁器等の小破片が出土している。また古代の甕の小破片が出土していたが、近・現代の遺物と共に出土しているため図示していない。



1号掘立柱建物跡



第20図 I区1・2号土坑、1号井戸実測図(1/30)及び出土遺物実測図(1/1)

3号土坑 (第21図)

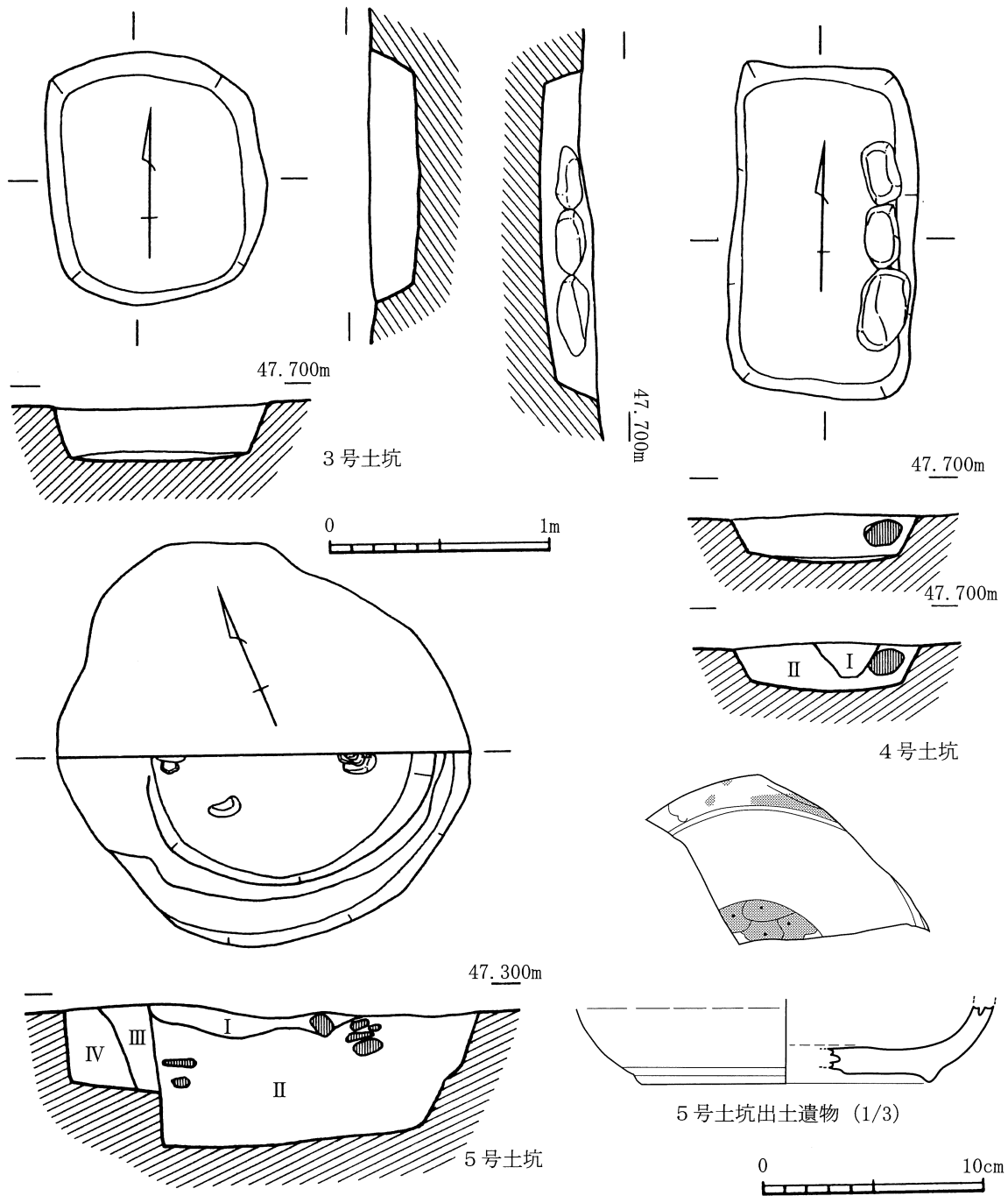
ほぼ隅丸長方形を呈する土坑で、床面はほぼ平坦である。規模は長軸 1.14m、短軸 0.97m、深さ22~24cmを測る。埋土はI層：茶褐色土層（灰白色粘土ブロックを含む）である。

4号土坑 (第21図)

隅丸長方形を呈する土坑で、床面はほぼ平坦である。規模は長軸1.49m、短軸0.83m、深さ16~23cmを測る。東壁側には30~40cmの礫が3個並んで、埋められていた。埋土はI層：黒褐色土層、II層：黒褐色土層（灰白色粘土ブロックを含む）である。また、I層は1号掘立柱建物の北側の柱穴と思われる。このことから、4号土坑の出現時期は、1号掘立柱建物より若干上がる。

5号土坑 (第21図)

ほぼ円形を呈する土坑で、床面は2段掘りをなす。規模は長軸1.88m、短軸1.83m、深さ34~65cmを測る。埋土はI層：茶褐色土+黒褐色土の混合層、II層：黒褐色土層（5~13cmの礫を数個と、灰白色粘土ブロックを少量含む）、III層：黒褐色土層（II層より灰白色粘土ブロックが多く含まれている）、IV層：黒褐色土層である。遺物としては、1の肥前磁器染付皿が出土した。時期は18世紀後半で、底部が蛇ノ目高台となっている。復元底径は8.6cmである。他の遺物としては、明治10年代の染付碗等の遺物が出土している。



第21図 I区3～5号土坑実測図(1/30)及び土遺物実測図(1/3)

6号土坑(第22図)

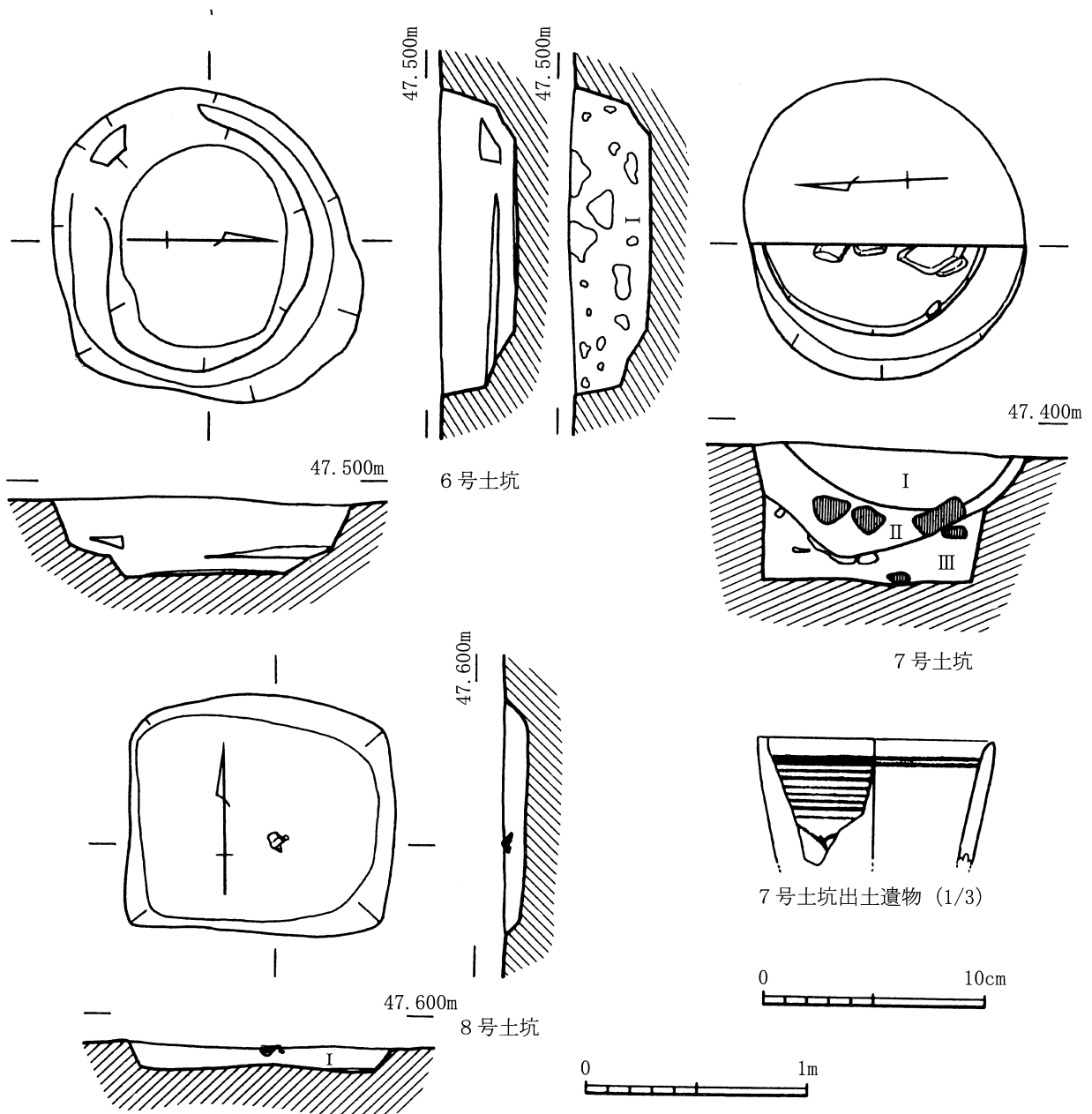
ほぼ円形を呈する土坑で、床面は2段掘りをなす。規模は長軸 1.51m、短軸 1.30m、深さ20～30cmを測る。埋土はI層：暗褐色土層(灰黄褐色粘土ブロックを含む)である。このことから掘削した後、すぐに埋められたものと思われる。

7号土坑（第22図）

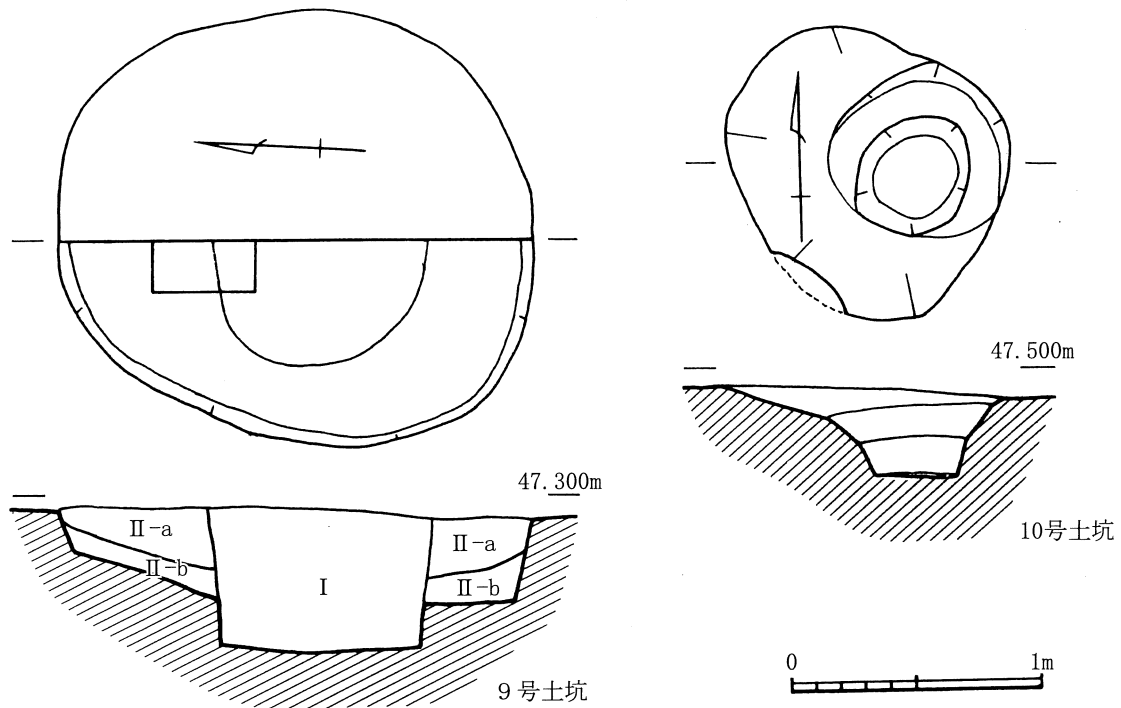
楕円形を呈する土坑で、床面はほぼ平坦である。規模は長軸1.34m、短軸1.22m（半掘のみなので推定）、深さ57～59cmを測る。埋土はⅠ層：黒褐色土層（明褐色ローム質のブロックを含む）、Ⅱ層：黒褐色土層、Ⅲ層：黒褐色土層（灰白色粘土ブロックを含む）である。またⅡ層には10～20cm程度の礫が数個見られる。遺物としては、1の肥前端反碗の口縁部が出土した。時期は1820～60年代で、復元口径は7.0cmである。他の遺物としては、肥甕の胴部等の遺物が出土している。

8号土坑（第22図）

ほぼ隅丸方形を呈する土坑で、床面はほぼ平坦である。規模は長軸 1.19 cm、短軸 1.07m、深さ 9～12cmを測る。埋土はⅠ層：暗褐色土層（灰黄褐色粘土ブロックを含む）である。遺物としては、小土器破片が出土している。



第22図 I区6～8号土坑実測図（1/30）及び土遺物実測図（1/3）



第23図 I区9～10号土坑実測図(1/30)

9号土坑(第23図)

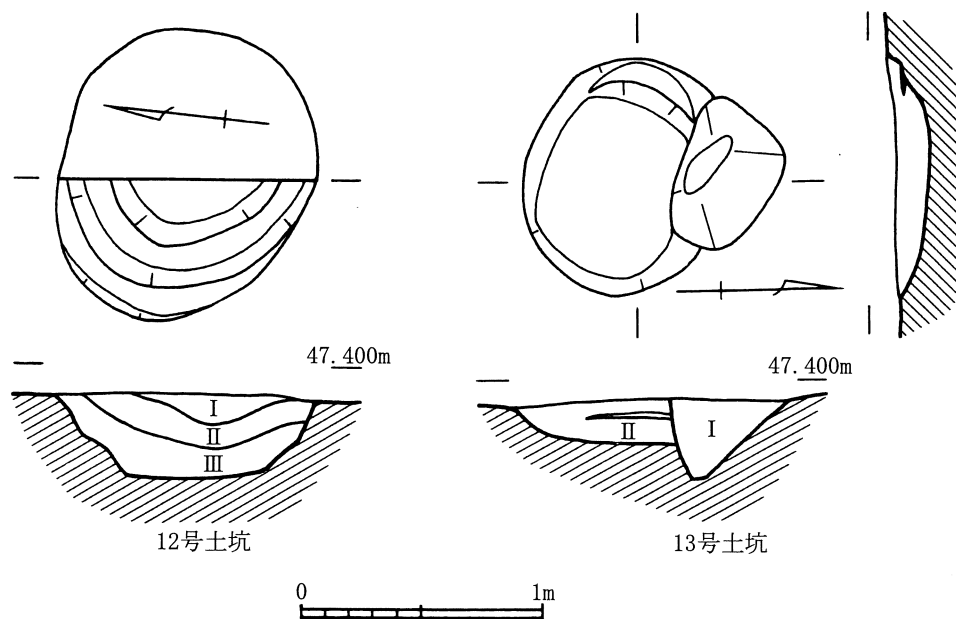
楕円形を呈する土坑で、床面は2段掘りをなす。規模は長軸1.57m、短軸1.52m(半掘のみなので推定)、深さ16～36cmを測る。埋土はI層：明褐色土層、II-a層：茶褐色土層(灰白色粘土ブロックを含む)、II-b層：II-a層より灰白色粘土ブロックが多い、III層：黒褐色土層である。遺物としては、土師質土器の小破片等の遺物が出土している。

10号土坑(第23図)

11号土坑に一部切られている、楕円形を呈する土坑で、床面は2段掘りをなす。規模は長軸1.17m、短軸1.06m、深さ12～35cmを測る。埋土はI層：茶褐色土層(灰白色粘土ブロックを含む)である。埋土に地山の灰白色粘土ブロックが混入しているため、掘削した後、すぐに埋め戻されたものと思われる。遺物としては、戦前の肥前系の碗と思われる小破片が出土している。

11号土坑(第23図)

10号土坑を一部切っている、楕円形を呈する土坑で、床面は2段掘りをなす。規模は長軸1.67m、短軸1.32m(半掘のみなので推定)、深さ10～41cmを測る。埋土はI層：黒褐色土層(灰白色粘土ブロックを含む)・II層：I層より黒が強い土層である。



第24図 I区12・13号土坑実測図 (1/30)

12号土坑 (第24図)

楕円形を呈する土坑で、床面は2段掘りをなす。規模は長軸1.22m (半掘のみなので推定)、短軸1.08m、深さ20~34cmを測る。埋土はI層：明褐色ローム層、II層：黒褐色土層 (灰白色粘土ブロックを含む)、III層：黒褐色土層 (明褐色ローム質のブロックを含む) である。また遺物としては、陶磁器や須恵器の小破片等が出土している。

13号土坑 (第24図)

楕円形を呈し、樹痕に切られている土坑で、床面はほぼ平坦である。規模は長軸0.96m、短軸0.62m + α 、深さ11~18cmを測る。埋土はI層：黒褐色土層、II層：茶褐色土層 (灰白色粘土ブロックを含む) である。

1号井戸 (第20図)

ほぼ円形を呈し、2号土坑を切っている井戸である。規模は長軸1.28m (半掘のみなので推定)、短軸1.24m、深さは1.50~1.53mを測る。埋土はI層：黒褐色土層 (中に灰白色粘土ブロックを含む)、II層：I層より黒が強く、灰白色粘土ブロックが細かい土層である。遺物はほとんど出土していないが、1号土坑から明治10年代の染付が出土していることから、出現時期は明治10年代以降となる。

(2) まとめ

二目川遺跡B地区の発掘調査では、市道を挟んで調査区が分かれることから、北側をI区、南側をII区とした。またI区の中央には私道が走っているためI区北側とI区南側とに分けた。I区中心での標高は47.5mを測り、I区の発掘調査面積は約784.0m² (I区北側 約287.5m²・I区南側約 496.5m²) である。またI区を含めて、周辺部は水田として利用されている。

I区北側では遺構が全く見あらず、遺物は表土面及び水田盤 (床土) 下から、陶磁器や土師質土器等の小破片が少量出土しただけである。

I区南側からは遺構を検出した。検出した遺構は、掘立柱建物1棟・土坑13基・井戸1基・柱穴17基 (小ピットを含む) である。また遺構面で、一部攪乱を受けている箇所もある。遺物は表土面及び水田盤 (床土) 下や遺構内から出土しており、18世紀前半の陶胎染付・18世紀代の肥前染付碗や明治10年代の染付陶磁器等が出土

している。

またこの調査区の地山の土を、地元の人々が焼き物を行う為に採取している姿を、調査中に見かけたので、この地域の土は焼き物を行うにあたって最適な土だと思われる。このことは周辺に窯跡が存在していることから裏付けられる。また土坑13基のうち、数基は粘土を採掘した遺構と考えられる。

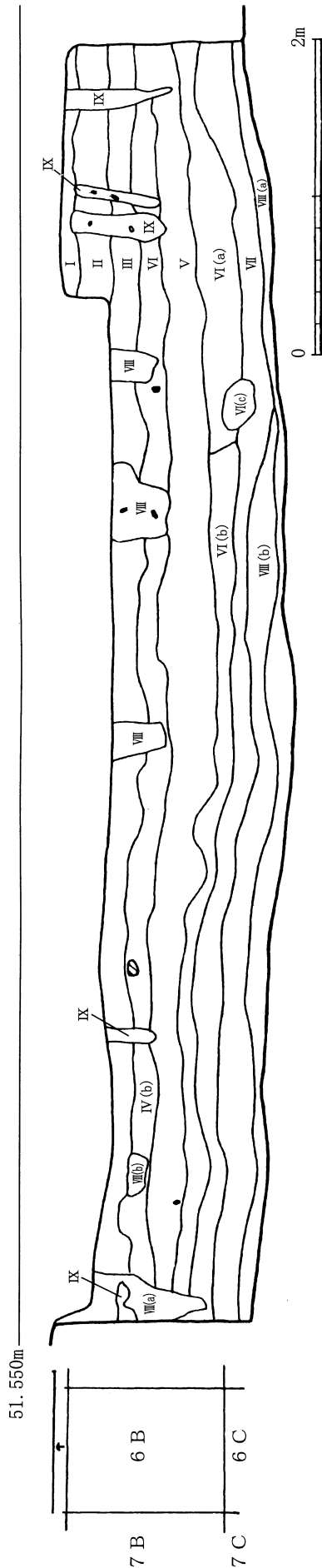
I区の地山は灰白色粘土及び灰黄褐色粘土である。また遺構内の埋土にはあまり差異が認められず、大きく10の堆積層に分けられる。うちわけは黒色土層・暗褐色土層（灰白色粘土ブロックを含む）・茶褐色土層（灰白色粘土ブロックを含む）・黒褐色土層（灰白色粘土ブロック及び灰黄褐色粘土ブロックを含む）・明褐色ローム層・明褐色土層・明褐色砂質土層・灰白色粘土層・茶褐色土+黒褐色土の混合層・灰白色粘土+黒褐色土の混合層である。これらほとんどの埋土は、出土遺物等から見て、江戸時代～近代にかけての所産と考えられる。



II区よりI区を望む



I区作業風景



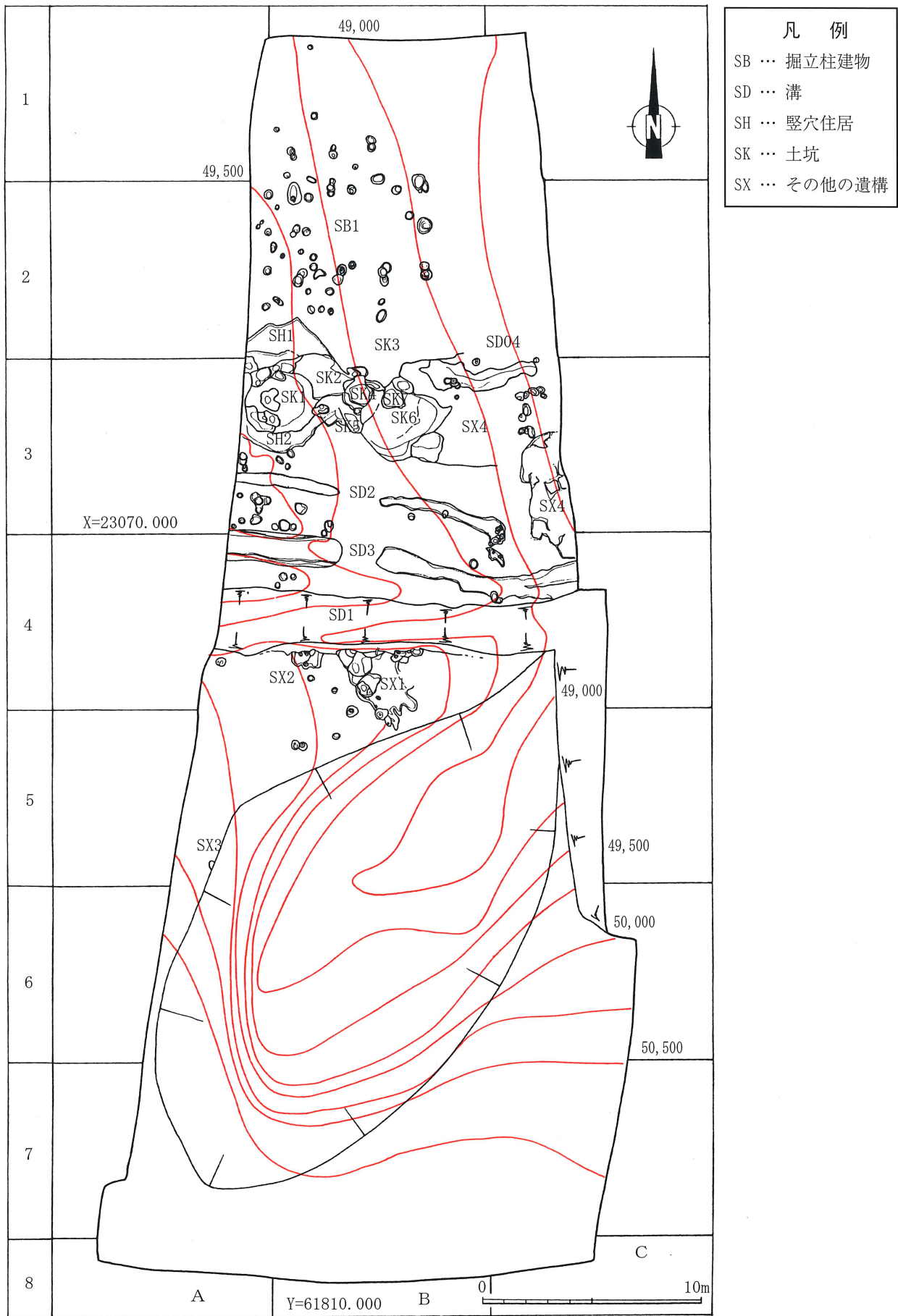
4、II区調査の成果

(1) 層序 (第25図)

二目川遺跡の地形は北および東方向に傾斜している。土層は中央の溝を境に南は厚く北は薄い。これは自然地形ではなく後世の開発の際、斜面をカットして整地したためである。なお、土層の様子から水田として使用された痕跡はなく、開発後は畑地として利用されたのであろう。II区の層序を土層の厚い調査区南側6B区西側壁面を図示して説明する。

- I層： Hue7.5YR2/1黒褐色土。きめが細かく土のしまりは弱い。1~2mm大の橙色パミスを微量に含む。
- II層： Hue10YR2/1黒褐色土。I層に比べてやや黒色が強くきめが細かく土のしまりは弱い。1mm大の橙色パミスを微量に含む。
- III層： Hue7.5YR1.7/1黒褐色土。II層に比べてやや黒色が強くきめが細かく土のしまりは弱い。1~3mm大の橙色パミスを微量に含む。
- IV層： Hue7.5YR1.7/1黒褐色土。色やきめの細かさはIII層とほぼ同じであるが土のしまりは強い。1~2mm大の橙色パミスを微量に含む。
- V層： Hue10YR1.7/1黒褐色土。粘質があり、しまりも強い。1mm大の橙色及び1~3mm大の1~2mm大の黄色パミスを微量含む。
- VI層(a)： Hue5YR1.7/1黒褐色土。きめが細かく粘質がありしまりも強い。2~3mm大の橙色及び1~2mm大の黄色パミスを微量含む。
- VI層(b)： Hue7.5YR1.7/1黒褐色土。VI層(a)に比べるとやや黒色が強い。きめが細かく粘質がありしまりが強い。1~3mm大の黄色パミスを微量含む。
- VII層： Hue5YR2/1黒褐色粘質土。黄色パミスと3mm大の黄橙色のパミスを含む。
- VIII層(a)： Hue10YR2/1黒褐色粘質土。VII層に比べてやや黒色が強い。2~5mm大の黄色パミスと1~2mm大の橙色パミスを微量含む。
- VIII層(b)： Hue10YR1.7/1黒褐色粘質土。VII層に比べてやや黒色が強くしまりが強い。2~5mm大の明褐色パミスと1~2mm大の黄橙色パミスを微量含む。
- IX層： Hue7.5YR2/1黒褐色土。きめが細かくしまりは強い。1~2mm大の橙色パミスを微量に含む。この土はII層上部から掘り込まれた土坑の埋土でI層の土と同じである。

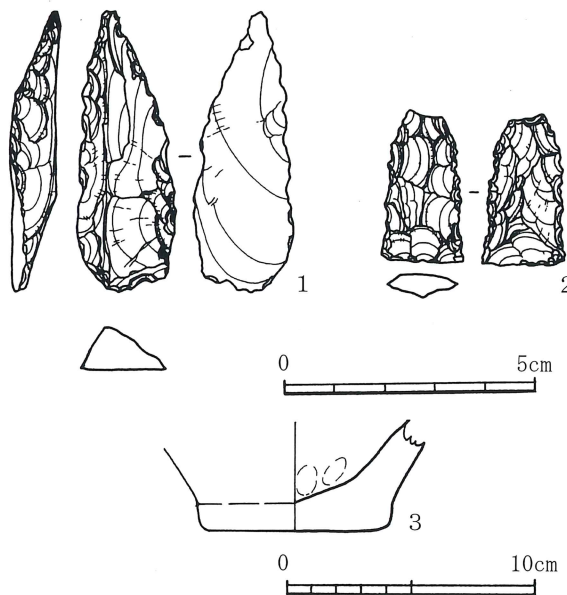
第25図 二目川遺跡II区層序図



第26図 二目川遺跡Ⅱ区遺構配置図

(2) 遺構と遺物 (第27図～第66図)

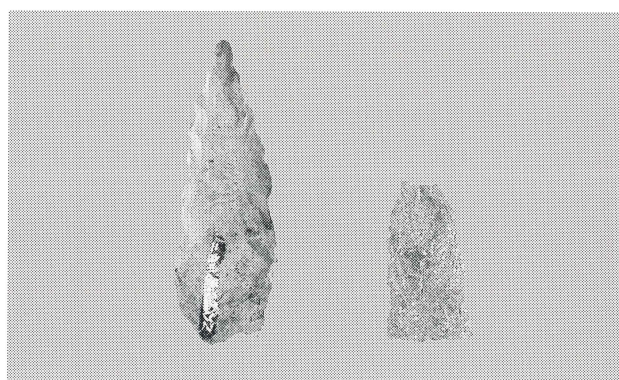
二目川遺跡B地区では若干の旧石器時代～弥生時代の遺物や、奈良～平安時代の遺構および多量の遺物を検出した。第26図は本遺跡の遺構配置図であるが、調査区中央のSD1より北側には溝状遺構が2条、土坑群、掘立柱建物跡、多数のピット群が展開しており、中央には重複した土坑群が展開する。調査区南側では用途不明の土坑を3基及びピットを検出したが、中央の大きな谷状の地形からは土器片が多量に出土している。以下、旧石器時代～弥生時代の遺物について、次に奈良～平安時代の遺構および遺物について説明を加えていくが、遺物については基本的には遺構毎に、包含層から出土した遺物や、時期の比定が困難な遺物や石器、鍛冶関連遺物、土製品についてはそれぞれ一括して説明を加える。



① 旧石器～弥生時代の遺物 (第27図)

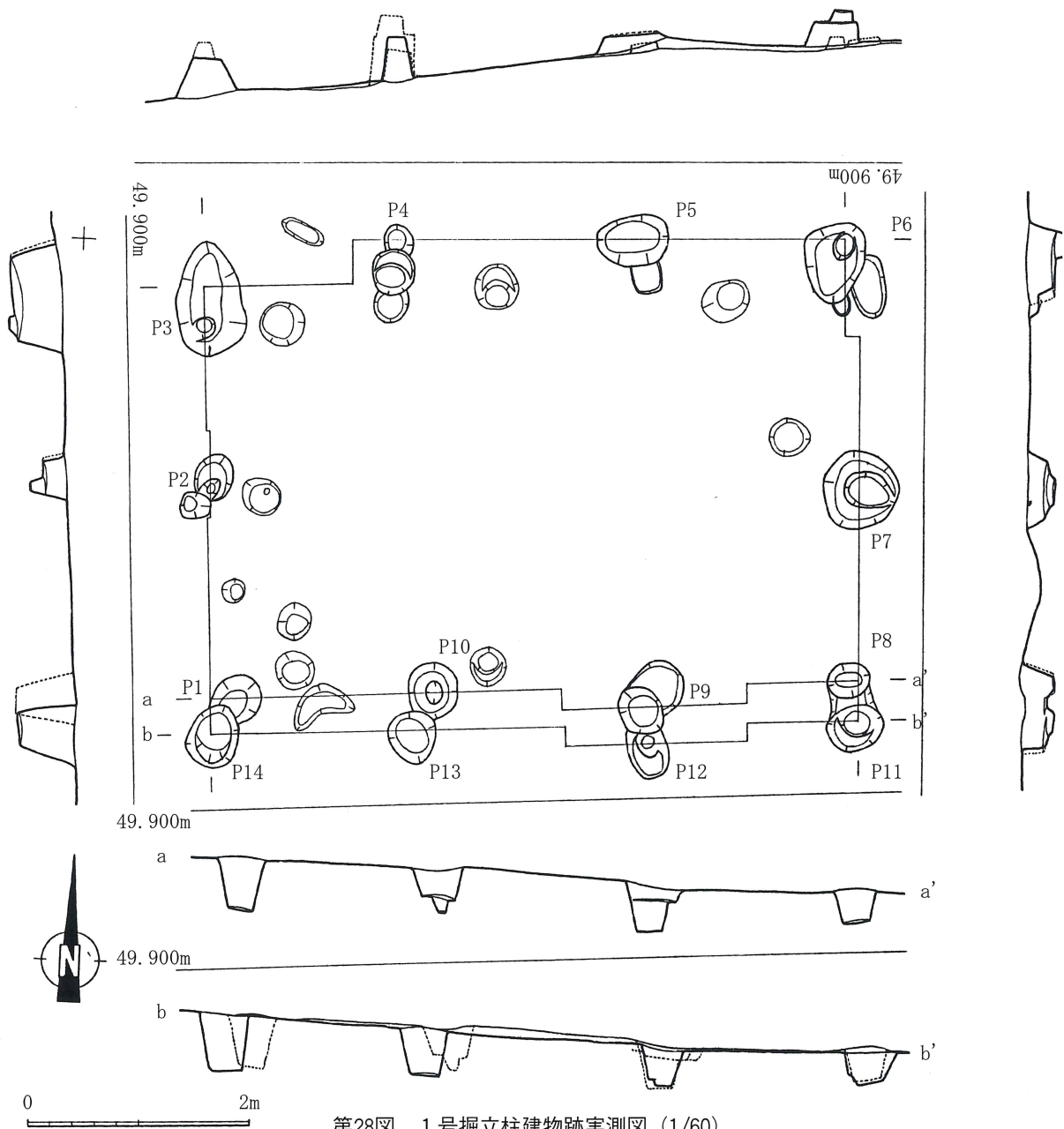
二目川遺跡B地区では若干であるが旧石器時代～弥生時代の遺物が出土している。1は旧石器時代の横長剥片を素材にしたナイフ形石器である。素材の打面部側を成形し刃部側下半を刃潰しして基部とする。基部は尖らず丸みを帯び先端部は尖る。2は石鏃である。先端が欠損しており両側の歯は細かい鋸歯状の鋸歯鏃である。3は弥生前期の甕の底部である。ローリングしており器面調整は不明であるが内面には指頭圧痕が残る。底径は6.8cmを計り胎土に長石、角閃石、2mm大や6mm大の石英、赤色粒、白色粒を含む。

第27図 二目川遺跡II区旧石器弥生時代の遺物実測図



ナイフ形石器

石 鏃



第28図 1号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

② 古代の遺構と遺物 (第28図～第66図)

ア、掘立柱建物跡 (第28図)

SB1

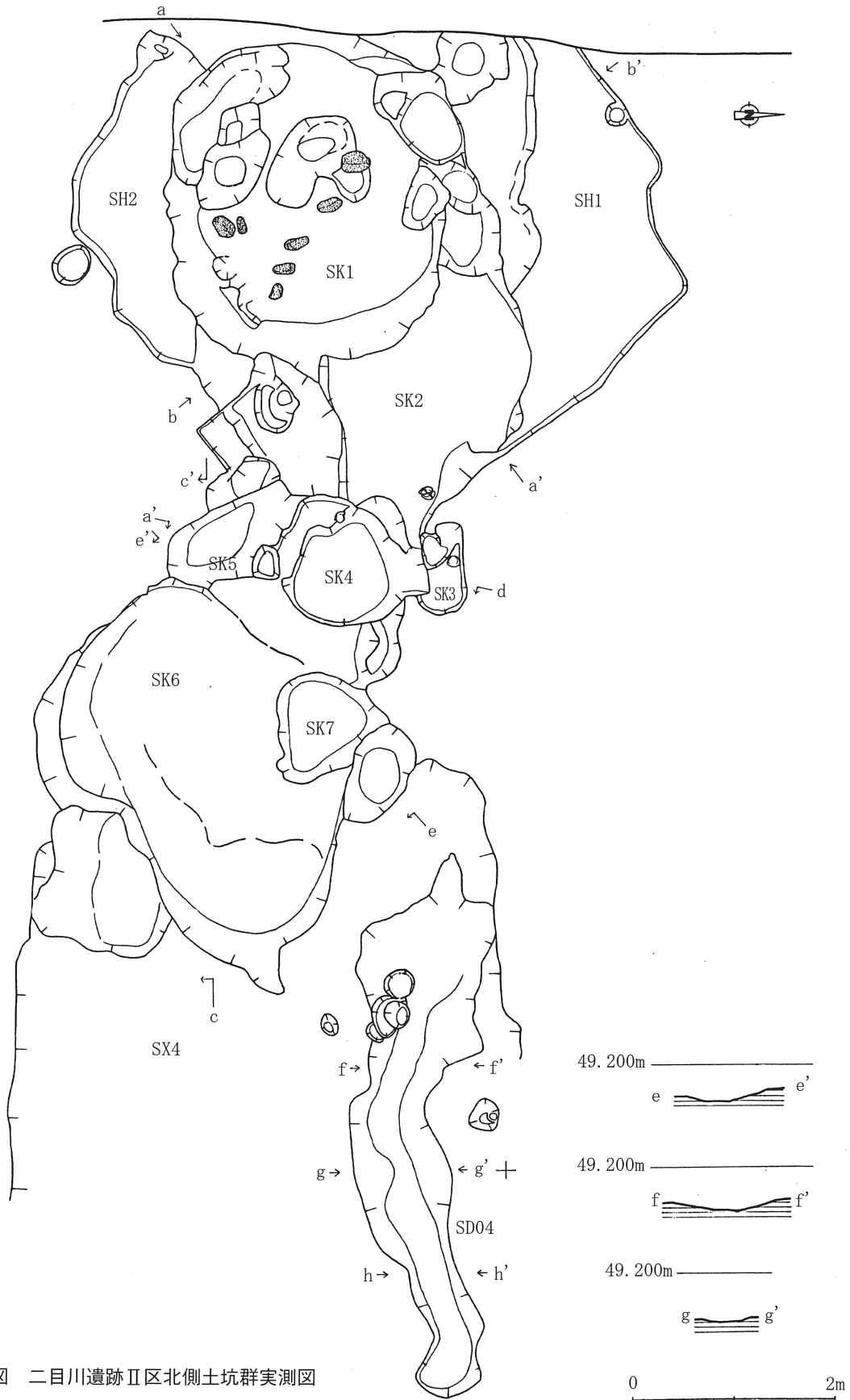
2B区で検出した2間×3間の建物跡である。実際に柱が立っていた小穴はほぼ検出できた。P11～P14は建物を拡幅した際の柱穴であろう。柱穴の平面形はいずれも楕円形で柱穴から遺物は出土していない。桁行方位はN-91°-Eを指す。梁行間平均193.3cm、桁行間平均 192.8cm。

SB1掘立柱建物跡計測表

桁行間： P1-186cm - P10・P10-188cm - P9・P9-190cm - P8・P3-190cm - P4・P4-206cm - P5・
P5-188cm - P6・P14-188cm - P13・P13-210cm - P12・P12-190cm - P11
梁行間： P1-192cm - P2・P2-148cm - P3・P8-170cm - P7・P7-222cm - P6・P11-220cm - P7・
P14-208cm - P2

イ、北側中央土坑群 (第29図)

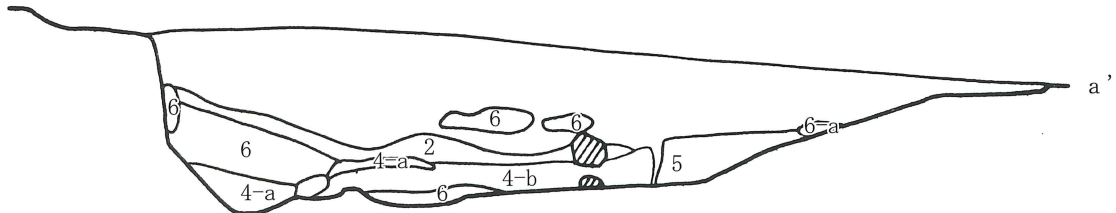
この土坑群は、遺構上面を検出した時点では竪穴住居址と思われる遺構が重複する様相を呈していたので、それぞれの遺構にSH1からSH5の遺構番号を設定し(第32図第1段階)土層ベルトを残しながら遺構の掘り下げを開始した。



第29図 二目川遺跡Ⅱ区北側土坑群実測図

1

50.200m



1層…黒褐色土、しまりが強く橙色パミスや黄褐色のブロックを若干含む。

5層…黒褐色土と黄褐色土の混合、粘質が若干ある。

2層… " 、褐色が強い。しまりは弱く粘質あり。

6層…黄褐色ブロック。しまりが強い。

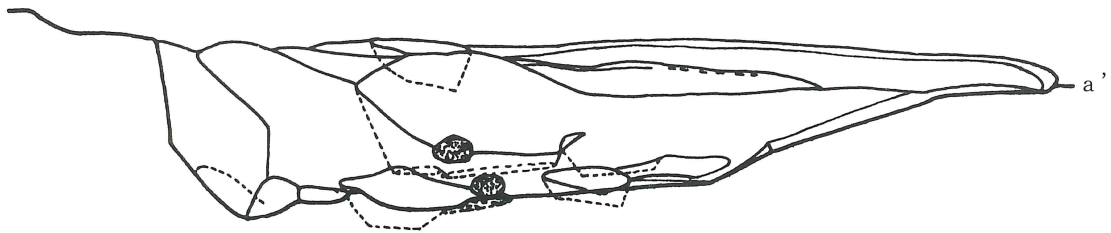
3層… " 、橙色パミスの量は少なくしまりが弱い。

4層… a 黄褐色土、よくしまっている。

b " 、やや黄色いが強い。

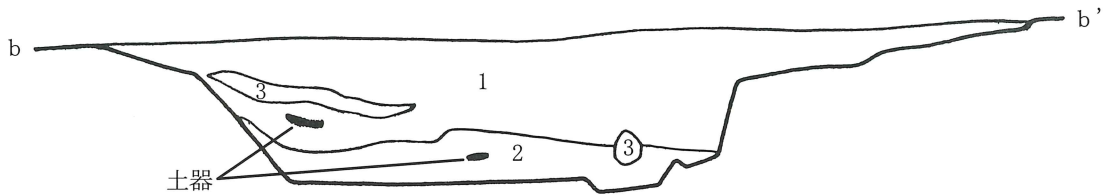
2

50.200m



3

50.200m



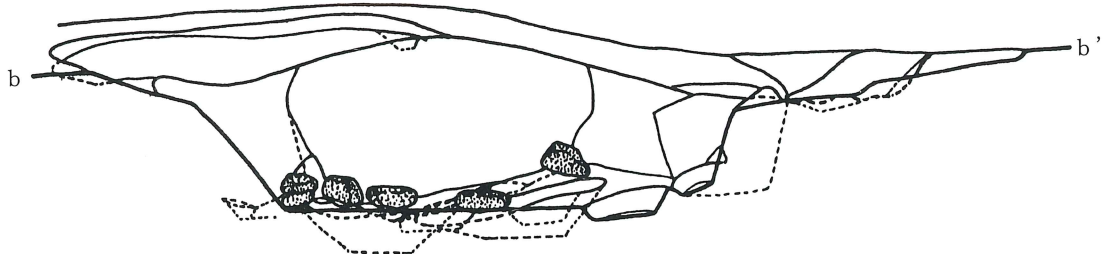
1層…黒褐色土。しまりが強く、橙色パミスを若干含む。

2層…黒褐色土と黄褐色土の混合。粘質が若干ある。

3層…黄褐色ブロック。しまりが強い。

4

50.200m



第30図 二目川遺跡Ⅱ区北側土坑群土層断面及び実測図(1)

5

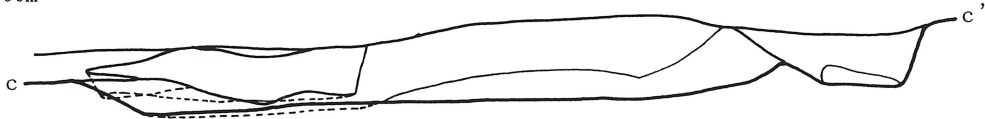
49.700m



- 1層…黒褐色土 よく締まっている。
 2層…黒褐色土 やや黒色が強い。黄褐色ブロック及び橙色パミスを若干含む。
 3層… { a 黄褐色ブロック よく締まっている。
 b " 黄褐色が若干強い。

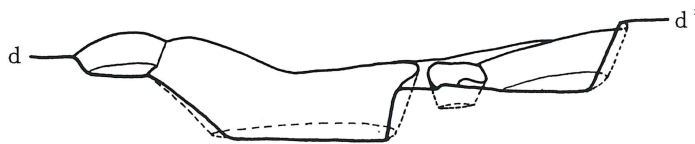
6

49.700m



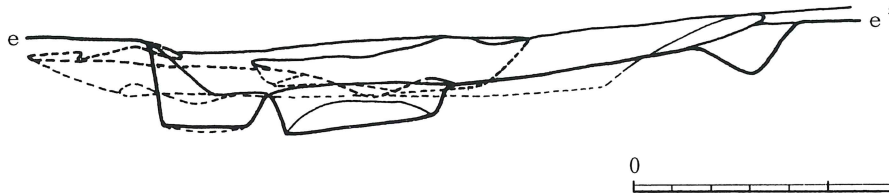
7

49.700m



8

49.700m

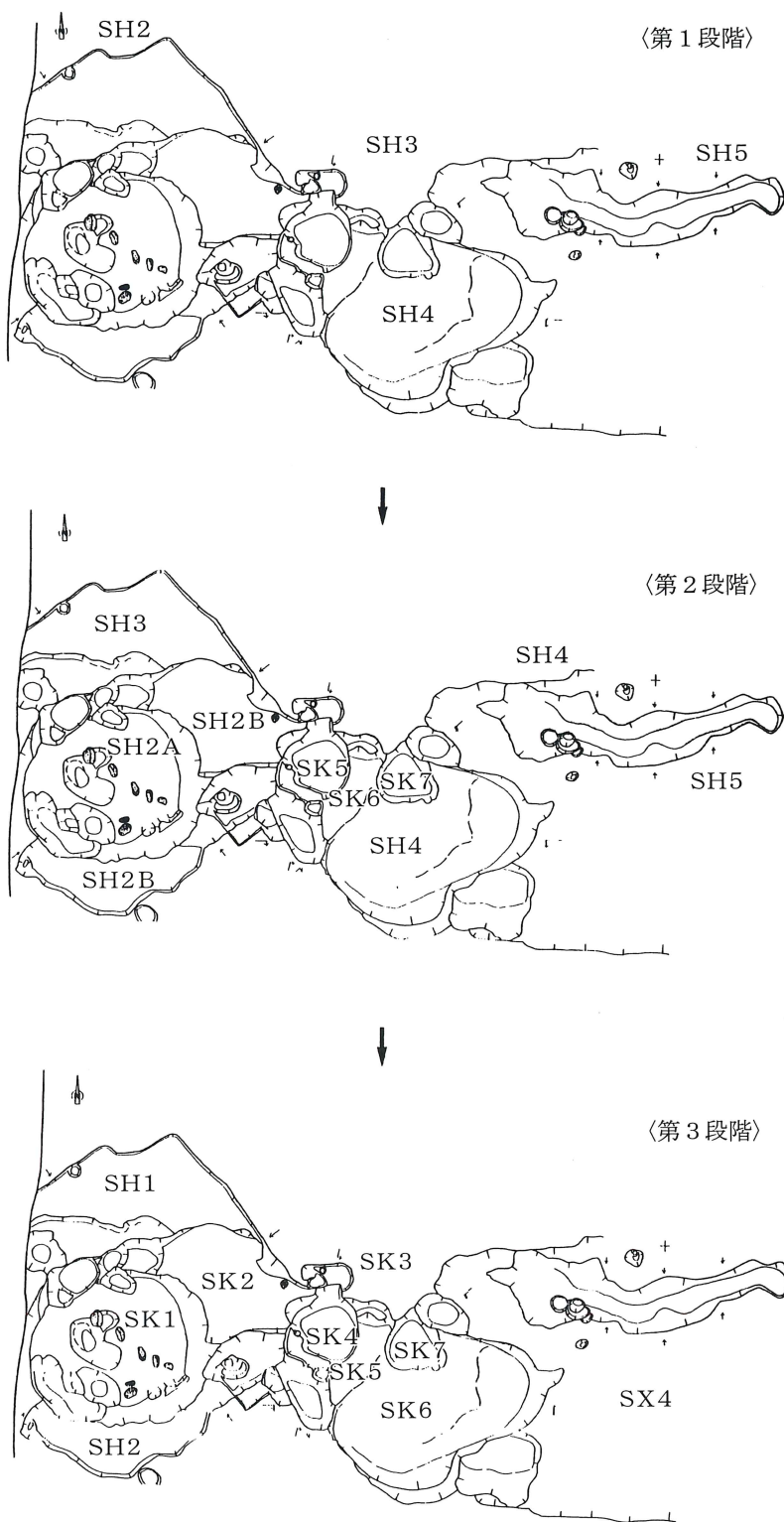


第31図 二目川遺跡Ⅱ区北側土坑群土層断面及び実測図(2)

遺構を掘り下げてみるとさらに複数の遺構が重複していたので、遺構番号を再設定し(第32図第2段階)、さらに遺構を掘り下げたところ、当初、住居址と考えていた遺構の多くが、実は複数の土坑により形成された土坑群であることが確認できた。そこで、最終的な遺構番号を設定し遺構の掘り下げを行い完掘に至った(第32図第3段階)。なお、SH1およびSH2については他の土坑と重複していたため、壁と床面の一部しか残存しておらず、また住居址に伴う柱穴等も検出していないために住居址と断定はできなかった。

この土坑群からは多量の土器を中心とした遺物が出土しているが、遺物を取り上げる際、第32図のように遺構を掘り下げる段階毎の遺構番号で取り上げたために、遺物の遺構番号を最終的には変更せざるを得なくなり、また一部遺構番号が重複したために、遺物の出土した遺構が不明確になってしまったことは非常に残念である。

ここでは、まず遺構を掘り下げる際の第1段階、第2段階で出土した遺物、各遺構及び遺構出土遺物の順で紹介していきたい。



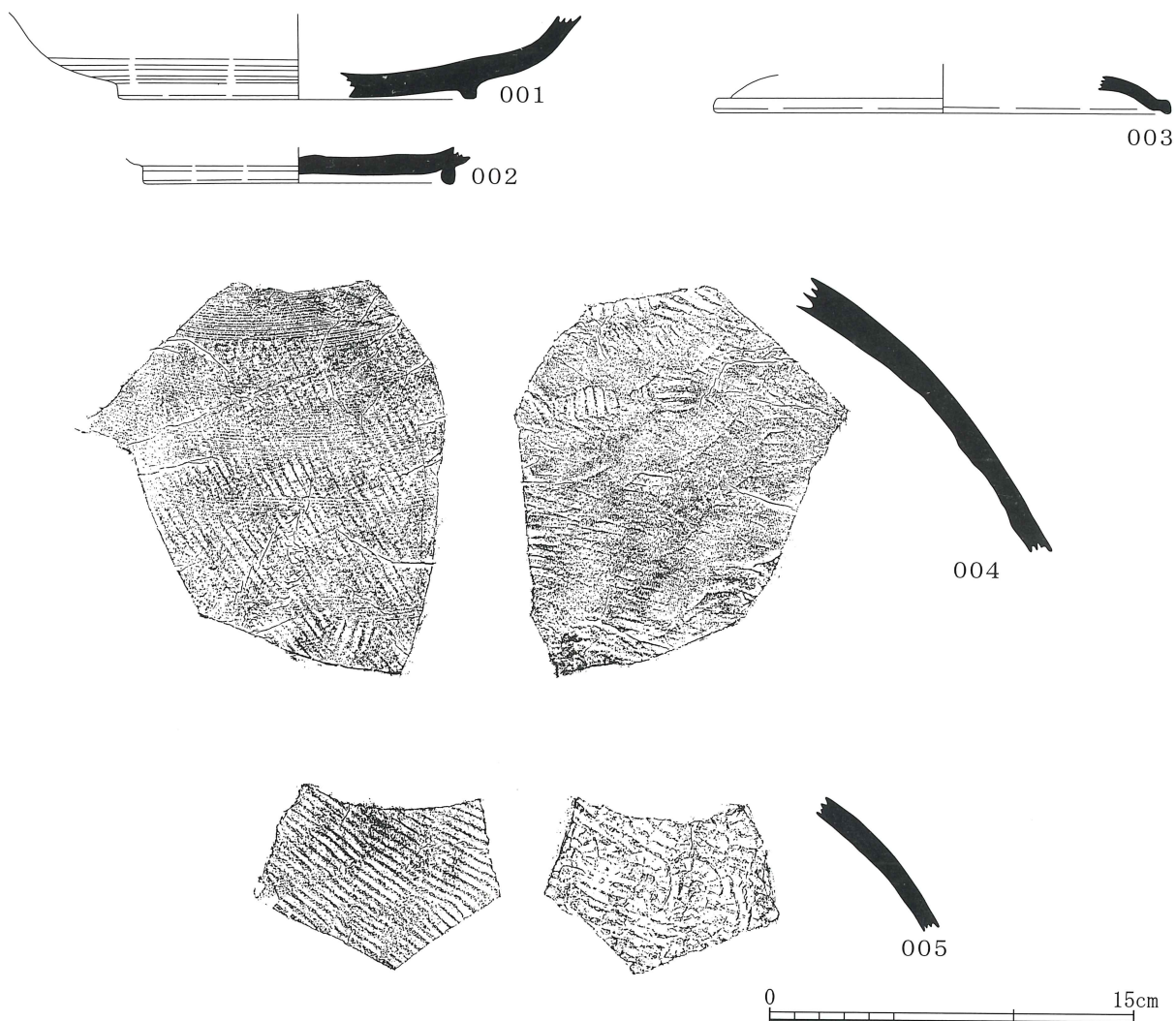
第32図 北側土坑群土層掘り下げ及び遺物取り上げ順序

磨きを施す。所謂「坏d」と呼称されているものである。いずれも橙色を呈しており、胎土には長石、角閃石、石英、赤色粒、白色粒を含む。009・010は土師質土器の小皿である。009は復元口径17.0cm、復元底径15.0cm、器高は2.2cmを計る。体部は短く開き気味に立ち上がり口縁端部は尖り気味に仕上げられている。底部はヘラ切り離しで内・外面にヘラ磨きを施す。010は復元口径14.0cm、復元底径15.0cm、器高は2.2cmを計る。体部は短

第1段階 (第33図～第35図)

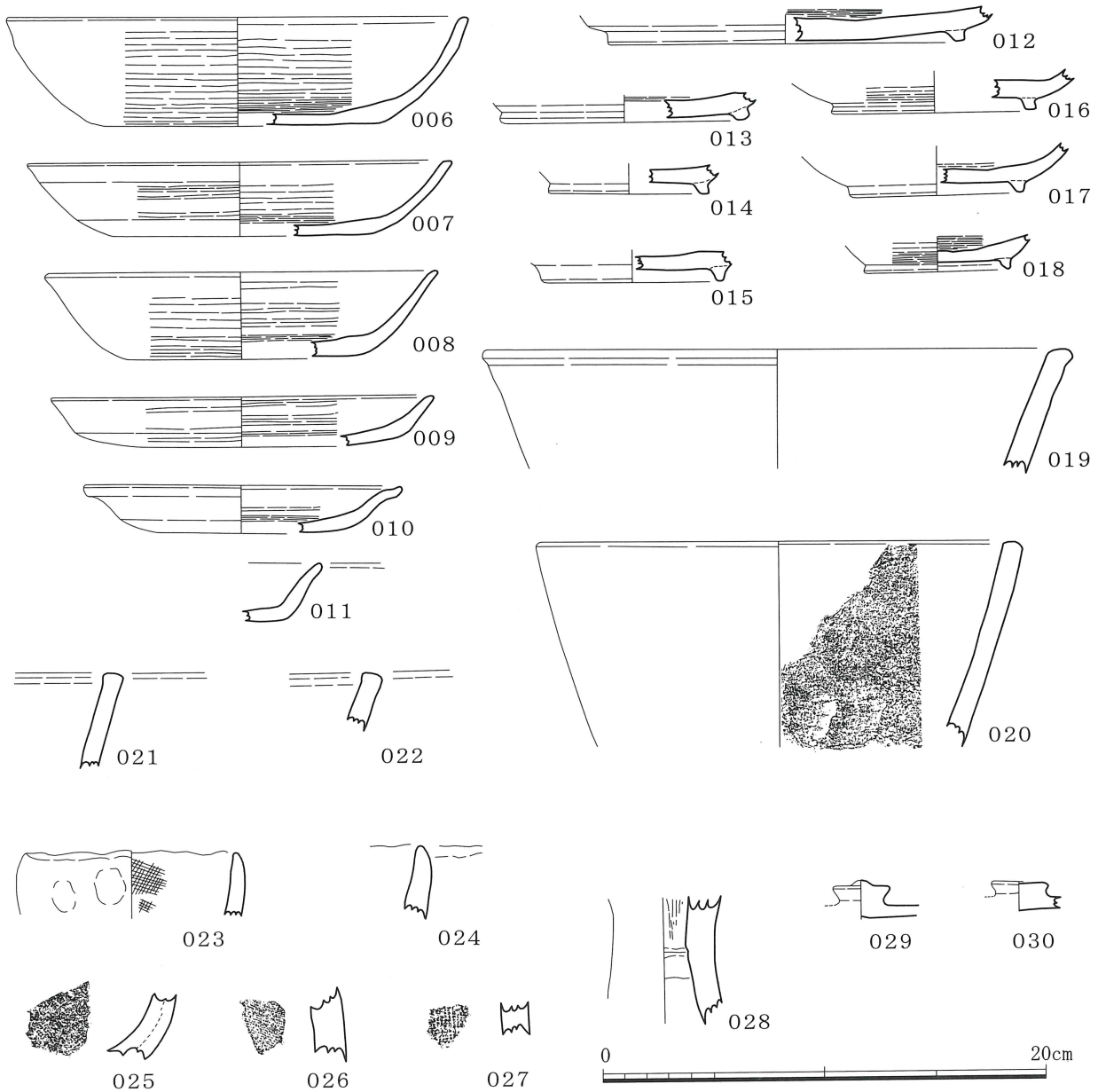
SH 2 出土遺物 (第33図～第35)

001～005は須恵器片である。001は低平な貼り付け高台を有する坏の底部片で復元底径14.4cm、底部はヘラ切り離し後高台を貼り付けており、体部の調整は内・外面共に回転横ナデであるが内面見込み部には不定方向のナデ、外面体部起ち上がりには回転ヘラ削りし成形している。002も001と同じく低平な貼り付け高台を有する坏の底部片であるが復元底径8.2cmと001に比べると小振りである。底部および体部内・外面の調整は001とほぼ同様であるが体部起ち上がりに回転ヘラ削りは施されていない。003は坏蓋片である。復元口径18.6cm、口縁部は鳥の嘴状を呈しており、内・外面共に回転横ナデである。004・005は大型の壺の胴部片か。004の内面には平行状の当具痕が、外面は格子目状のタタキ後カキ目仕上げである。005は内面には同心円状の当て具痕が、外面は平行タタキ後カキ目仕上げである。これらの須恵器はいずれも青灰色を呈している。坏身の高台がまだ底部端に貼り付けていない、坏蓋の身受け部の返りが消滅している、胴部片に平行タタキが施されていることなどから8世紀後半から9世紀初頭の範疇で考えられるものであろう。006～008は土師質土器の坏である006は復元口径20.4cm、復元底径12.8cm、器高4.8cm、007は復元口径18.6cm、復元底径11.0cm、器高3.3cm、008は復元口径17.0cm、復元底径10.0cm、器高3.8cmを計る。いずれも体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部は小さく外反し尖り気味に仕上げられる。底部はヘラ切り離しで、その後底部外面を回転ヘラ削りにより成形し、内・外面にヘラ



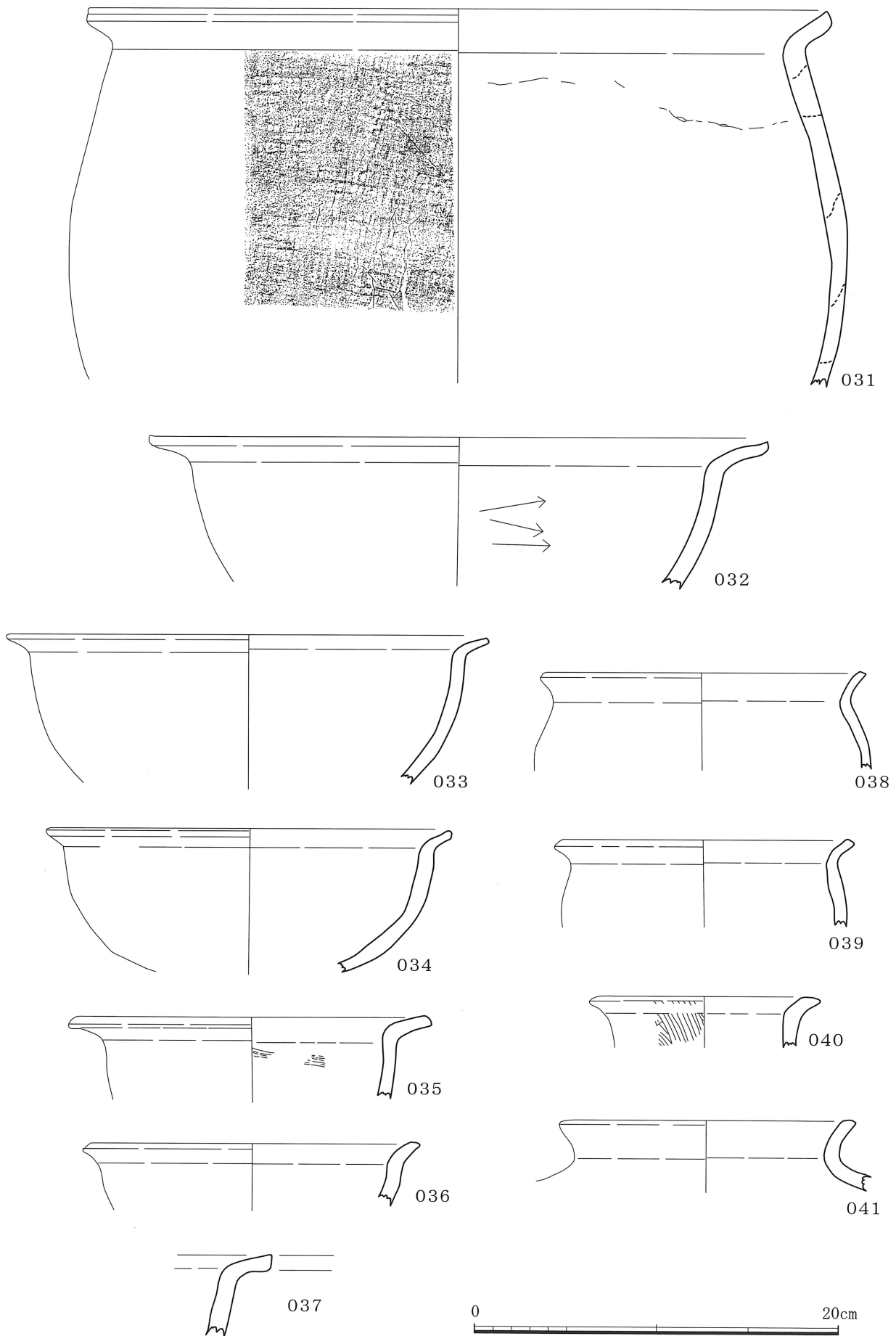
第33図 二目川遺跡Ⅱ区SH2出土遺物実測図(1)

く開き気味に立ち上がり口縁部はさらに開くが、端部は短く立ち上がりながら尖り気味に仕上げられている。坏蓋の可能性も考えられるが、内面に見られるヘラ磨きの痕跡が外面には認められないことからここでは小皿として扱うことにした。いずれも黄橙色を呈しており、胎土には長石、角閃石、石英、赤色粒、白色粒を含む。これらの坏や小皿は口径の大きさや器面調整から8世紀末～9世紀初頭の範疇に位置付けてよいものとする。011は坏片である。体部は直線的に立ち上がり口縁部付近でやや外反している。口縁端部は尖り気味に仕上げられており、底部はヘラ切り離しである。所謂「坏a」と呼称されているものである。012～018は低平な貼り付け高台を有する土師質土器の底部片である。012は復元底径が16.0cmと大型なので盤と考えたほうがよいであろう。体部は不明であるが底部はヘラ切り離した後丁寧なヘラ磨きが、器面の内・外ともに回転横ナデ後丁寧なヘラ磨きが施されている。013～018は坏である。013は復元底径10.8cm。体部は不明であるが底部はヘラ切り離しで、底部内面にはヘラ磨きが施されている。014・015の復元底径はそれぞれ7.2cm・7.8cmである。いずれもローリングが激しく器面の調整は不明である。016・017は底部の調整は不明であるが底部内面および体部内・外面にはヘラ磨きが施されている。復元底径はそれぞれ9.0cm・7.6cm。018の復元底径は6.2cm。底部はヘラ切り離し後ヘラ磨きが、器面の内・外には回転横ナデ後ヘラ磨きが施されている。014・015は黄橙色をそれ以外は橙色を呈しており胎土には長石、角閃石、石英、赤色粒、白色粒を含む。これらの高台坏は、012の高台はまだ底部端に貼り付けられておらず器面調整も丁寧なヘラ磨きが施されているのに対し016～018は高台が底部端に貼り付けられておりヘラ磨きも散漫であることから若干の時期差が存在するが、いずれにしても8世紀後半から9世紀初頭に位置付けてよいものとする。019～022は甑の口縁部である。いずれも直行する口縁部であるが020は若干内湾気味である。

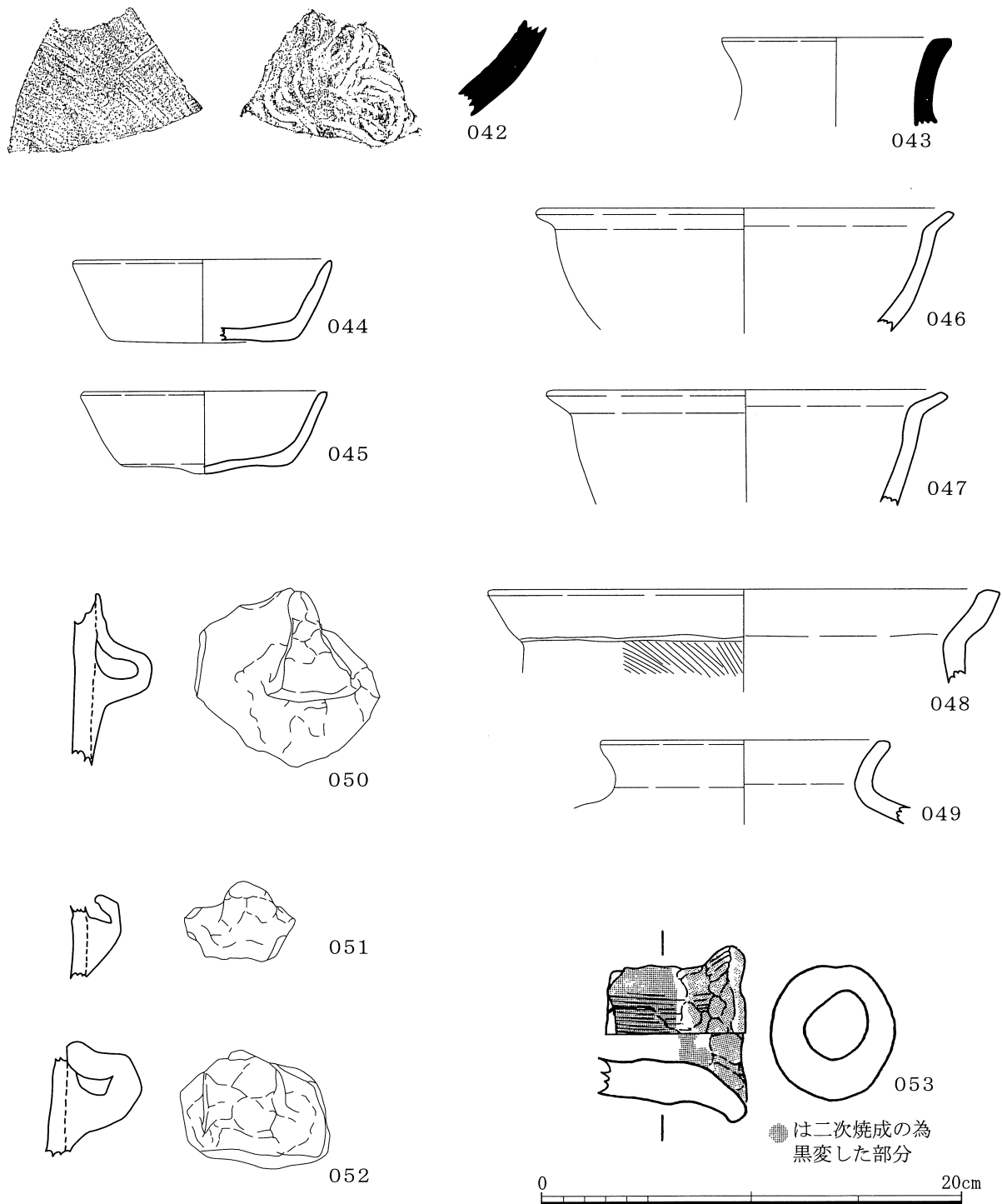


第34図 二目川遺跡Ⅱ区SH 2 出土遺物実測図(2)

019～021 の外面調整は板状工具による横方向のナデで、内面も横方向のナデであるが020の内面には同心円状の当て具痕が残る。019 及び 020 の口径はそれぞれ26.2cm・21.6cmでいずれも黄橙色を呈しており胎土には長石、角閃石、石英、赤色粒、白色粒を含む。023～027 は円筒形の製塩土器である。023・024 は口縁部で、端部はやや内湾し尖り気味に仕上げられている。外面には成形の際の指頭圧痕が、内面には布目痕が残ることから型作りによって製作されたことがわかる。(註1) いずれも茶褐色を呈しており胎土には長石や石英、砂粒や小礫を含むが023には1cm大の石英、024には3mm大の結晶片岩や8mm大の小礫が含まれている。028 は土師質土器の高坏の脚である。内面はヘラ削り後ナデ仕上げ、外面は回転横ナデで、橙色を呈しており、胎土には長石、角閃石、石英、白色粒や砂粒を多く含む。029・030は坏蓋の宝珠型つまみでつまみ径はいずれも4.6cmを計り橙色を呈している。019～030はいずれも土器片のため時期を比定するのは困難であるが、いずれもSH 2より出土したことから前述の土器とほぼ同時期のものと考えられる。031大型の甕型土器である。復元口径は39.0cm、胴部最大径41.4cm。「く」の字状に大きく外反する口縁を有す。内面はローリングが激しく不明であるが、外面には格子目上のタタキ痕が残る。黄橙色を呈しており胎土には長石、角閃石、3mm大の石英、赤色粒、白色粒や5mm大の小礫を含む。



第35図 二目川遺跡Ⅱ区SH2出土遺物実測図(3)



第36図 二目川遺跡Ⅱ区SH2B出土遺物実測図

所謂「豊後大分型甕」（註2）と呼称されているものである。032～037は鉢型土器である。底部の形状は不明であるが丸底であろう。内湾する胴部は口縁部で大きく外反しする。内・外面ともに工具を使用した回転横ナデで口縁端部は横ナデである。煤の付着しているものも多く土鍋として使用された可能性もある。それぞれの復元口径は032が32.8cm、033は26.2cm、034は22.0cm、035は19.4cm、036は17.4cmで、031・037は黄橙色で他は橙色を呈しており胎土には長石、角閃石、石英、赤色粒、白色粒や砂粒を含むが032には3mm大の石英と5mm大の小礫、033には7mm大の小礫034には4mm大の石英が含まれている。038～040は甕型土器である。いずれも「く」

の字状に大きく外反する口縁部を有する。038・039は工具を使用した回転横ナデか、いずれも胎土には長石、角閃石、石英、赤色粒、白色粒や砂粒を含むが、040には石英を中心とした多量の砂粒が含まれており、外面に粗いハケ目が施されている。この甕は所謂「企救型煮沸具」と呼称されているものに酷似している。それぞれの復元口径は038が17.8cm、039は15.8cm、040は10.8cmである。038・040は黄橙色、039は橙色を呈している。041は壺型土器の口縁部である。器面調整は、内面はローリングが激しく不明であるが外面は回転横ナデであり口縁端部は横ナデである。復元口径は16.0cmで橙色を呈しており胎土には長石、角閃石、石英、赤色粒、白色粒や砂粒を含む。以上の土器についても「企救型煮沸具」にいたることから8世紀末から9世紀初頭に位置付けることができよう。

第2段階（第32図）

SH2B 出土遺物（第36図）

042・043は須恵器で青灰色を呈す。042は壺の底部付近で内面が同心円の当て具痕が残る。外面は格子目状のタタキの後平行タタキで仕上げている。043は短頸壺の頸部から口縁部である。復元口径は11.0cm、器面の調整は回転横ナデで端部は面取りが施されている。044・045は土師質土器の坏である。いずれも体部が直線的に立ち上がり口縁端部が尖り気味におさまる所謂「坏a」と呼称されているものである。底部はヘラ切り離しで、器面の調整は内・外面ともに回転横ナデである。いずれも橙色を呈しており、胎土に長石、角閃石、石英、赤色粒、白色粒や砂粒を含む。044の復元口径は12.4cm、復元底径8.6cm、器高は4.9cmで045は復元口径11.8cm、復元底径8.0cm、器高は3.7cmを計る。046・047は鉢型土器である。いずれも口縁部が「く」の字状に大きく外反する。046は橙色、047は黄橙色を呈しており、器面調整は胴部が内・外面ともに回転横ナデで口縁端部は横ナデ、復元口径は046が19.4cm、047は18.4cmである。胎土は046には長石、角閃石、石英、赤色粒、白色粒や砂粒を含むが、047には砂粒はあまり含まれない。048も甕型土器であるが、この甕は外面に粗いハケ目を残し胎土に石英を中心とした多量の砂粒を含むことから「企救型煮沸具」の系譜を引く甕であろう。橙色を呈し、復元口径は24.0cmで、口縁部と胴部の境には沈線をめぐらしている。049は壺型土器の口縁部である。器面調整は、胴部は内・外面ともに回転横ナデで端部は横ナデである。復元口径は13.6cmで、橙色を呈し胎土に長石、角閃石、石英、赤色粒、白色粒や砂粒を含む。050～052は甌の把手破片である。これは今のところ大分平野でしか確認されていない所謂「豊後大分型甌」と呼称されている甌の把手である。黄橙色を呈し胎土に長石、角閃石、石英、赤色粒、白色粒や砂粒を含む。053は鞆の羽口の送風口もしくは連結部か。内面はナデ仕上げ、外面はハケ目が施されており上端部はソケット状に広がり指頭圧痕が残る。上端部外径は8.0cm、内径が6.8cmを計り、外面には鉄分や鉄滓が付着しており、二次焼成のためか黒変している部分も見られる。茶褐色を呈し胎土に長石、角閃石、石英、赤色粒、



白色粒や砂粒を多く含む。鞆の羽口については時期の比定は難しいが「豊後大分型甌」（註3）や「企救型煮沸具」（註4）に酷似した甕と供伴することから8世紀末から9世紀初頭に位置付けることができよう。

Ⅱ区作業風景

第3段階（第37図～第43図）

SH1（第24図）

土坑群北西に位置する。中央部を他の土坑に切られており北側の壁の一部が残っただけである。コーナー付近の壁が最も残りがよく高さは8cmを計る。床面に深さ10cmを計るピット状の掘り込み1基を検出したが位置的にこの遺構に伴う柱穴とは断定できない。

出土遺物（第37図）

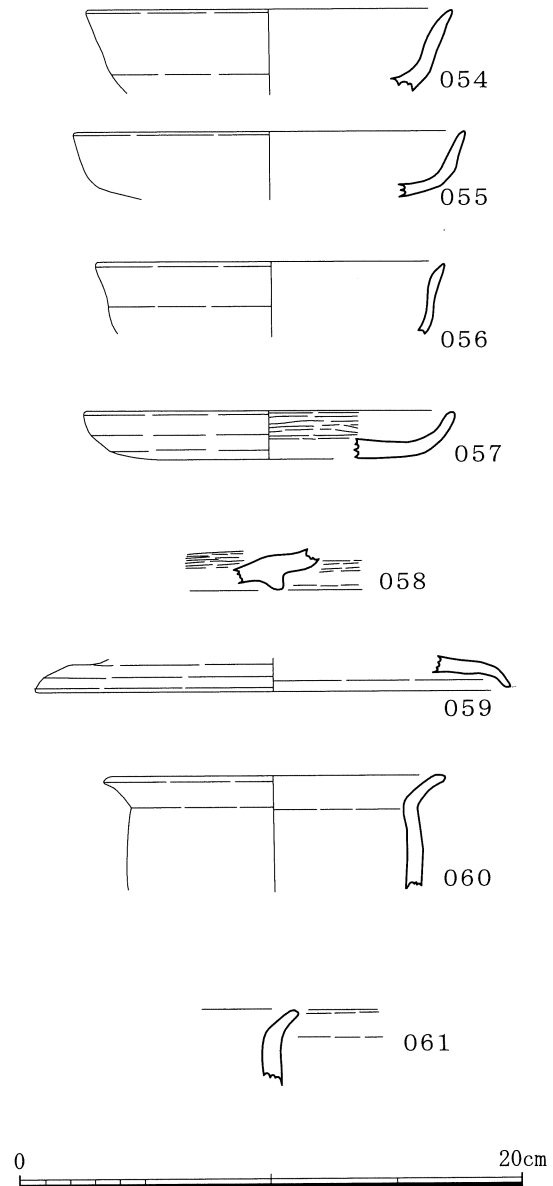
054～056 は土師質土器の坏であろう。復元口径は 054 が14.4cm、055 は15.8cm、056 は14.0cm。いずれも底部が欠損しているため器形は不明であるが、056 の底部は丸底か。器面の調整は、054・056 はローリングが激しく器面調整は不明であるが、055 の底部はヘラ切り離した後ナデ、体部は内・外面ともに回転横ナデである。054・056 は黄橙色、055 は橙色を呈し胎土に長石、角閃石、石英、赤色粒、白色粒を含む。057 は小皿で復元口径は14.8cm。橙色を呈し胎土に長石、角閃石、石英、赤色粒、白色粒を含む。底部はヘラ切り離した後ヘラ磨き、内面は回転ナデ後ヘラ磨きが施され、外面は回転横ナデ後体部下位には回転ヘラ削りである。058 は低平な貼り付け高台を有する橙色を呈した坏の底部片である。底部はヘラ切り離した後ヘラ磨き、内・外面は回転横ナデ後ヘラ磨きが施されている。059 は坏蓋である。復元口径は18.8cm、器面調整はローリングが激しく不明である。橙色を呈しており、胎土に長石、角閃石、石英、赤色粒、白色粒を含む。059 の復元口径は13.6cm、橙色を呈しており、胎土に長石、角閃石、石英、赤色粒、白色粒及び砂粒を含む。060・061 は甕型土器で061は口縁部である。いずれも口縁部が「く」の字に大きく外反している。060 の口径は13.6cmを計り、器面調整は内・外面ともに回転横ナデ、口縁端部は横ナデである。061の口縁端部は尖り気味に仕上げている。いずれも橙色を呈しており、胎土に長石、角閃石、石英、赤色粒、白色粒を含むが、060には3mm大の061には4mm大の石英が含まれる。

SH2（第29図）

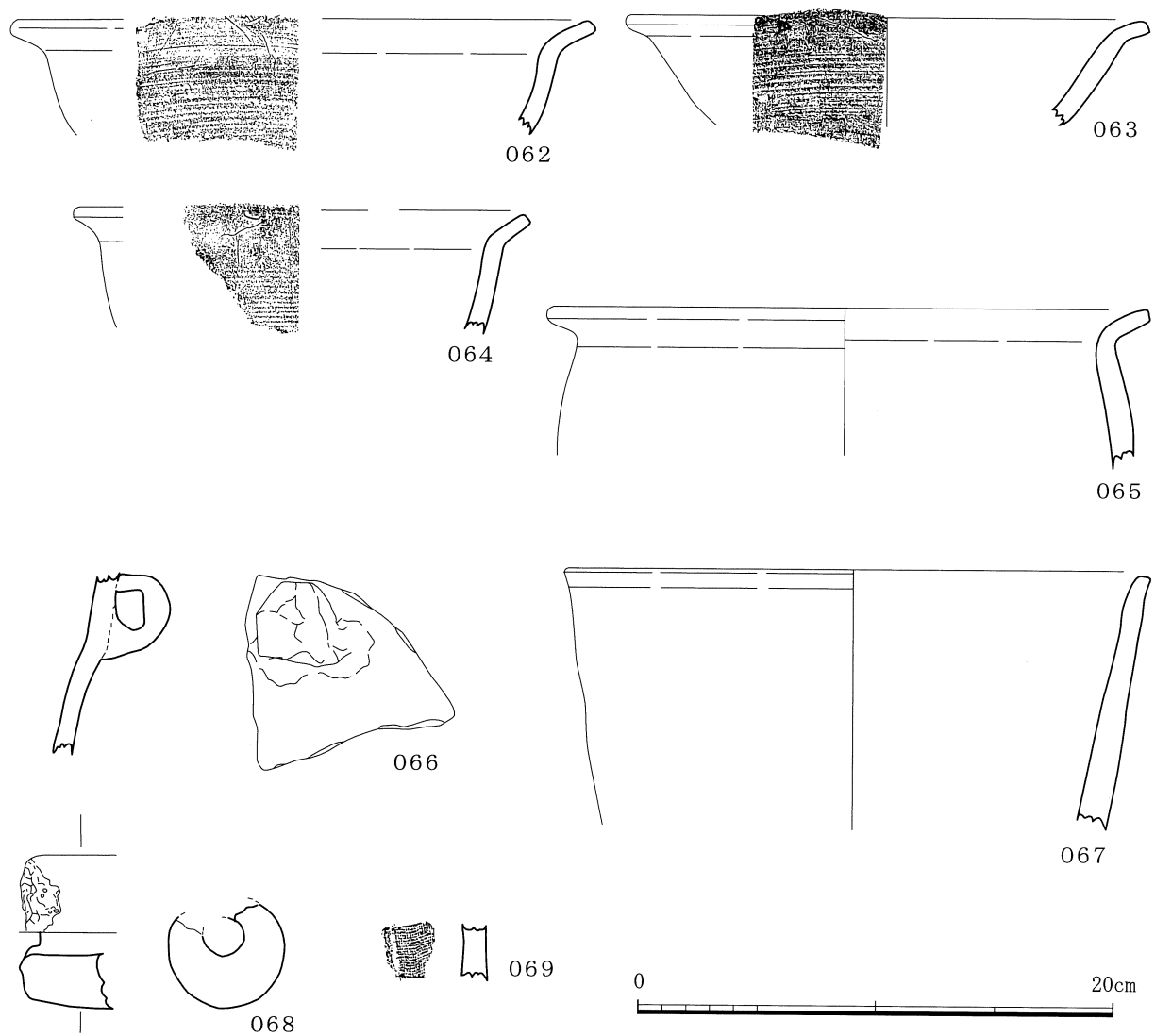
土坑群南西に位置する。中央部を他の土坑に切られており南側の壁の一部が残っているだけである。SH1よりも残りが悪い。西側の壁が最も残りがよく高さは11cmを計る。床面に深さ4cmを計るピット状の掘り込み1基を検出したが位置的にこの遺構に伴う柱穴とは断定できない。

SK1（第29図）

土坑群西側に位置する大型土坑である。平面プランは楕円形で 長径は320cm、短径 270cm、深さ91cmを計る。第30図1・3はこの土坑の土層断面図であるが、西側より土が流れ込みながら堆積したことがわかる。南側の床面や壁には長さ160cm、幅64cm、深さ94cmの掘り込みや長さ114cm、幅 56cm、床面まで 8 cm、深さ 59cmの2段の掘り込みが、中央には 長さ約114cm、幅98cm 深さは床面まで11cm、底まで23cmの2段の掘り込みが、北側の床面や壁には長さ116cm、幅70cm、深さは床面50cm、底まで55cmの2段の掘り込みや長さ55cm、幅42cm、深さ7cmの掘り込みが複雑に重複している。



第37図 二目川遺跡Ⅱ区SH1出土遺物実測図



第38図 二目川遺跡Ⅱ区SK1出土遺物実測図

出土遺物（第38図）

062～064 は鉢型土器である。これらの土器の特徴は器面外面の最終調整にハケ目を使用して回転横ナデを行いカキ目状の仕上げを施していることである。須恵器の製作技法を用いたものであろう。それぞれの復元口径は24.0cm・21.6cm・18.8cmで062は橙色、他は黄橙色を呈しており、胎土に長石、角閃石、石英、赤色粒、白色粒を含む。065 は甕型土器である復元口径は25.2cm、器面調整は内・外面共に工具を使用した回転横ナデで、口縁端部は横ナデである。浅黄橙色を呈しており、胎土に長石、角閃石、石英、赤色粒、白色粒を含む。066・067は甌及び甌の把手片である。066の復元口径は24.6cm、内・外面共にナデで、口縁端部は横ナデである。066は橙色、067は黄橙色を呈しており胎土に長石、角閃石、石英、赤色粒、白色粒や砂粒を含む。068は甌の羽口である。内・外面共にナデ仕上げで端部には鉄分や鉄滓が、また二次焼成により黒変した部分が認められる。上面の内径は2.0cm、外径は6.6cm、端部の内径は2.0cmを計り、黄橙色を呈し胎土に長石、石英、赤色粒、白色粒を含む。069は製塩土器片である。内面には布目痕が残る。

SK2 (第29図)

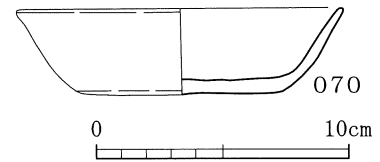
土坑群中央やや西よりに位置する大型土坑である。西側を他の土坑に切られており平面プランは不明であるが床面は広く平坦であることから住居址の可能性もある。深さは29cmを計る。

SK3 (第29図)

土坑群中央北よりに位置する楕円形の土坑である。東側にテラスを設けており長さ94cm、幅48cm、テラス面まで20cm、深さ29cmを計る。南側をSK4に切られている。

出土遺物 (第39図)

070 は坏で、口径13.0cm、底径8.3cm、器高3.4cmを計る。体部は直線的に立ち上がり口縁部付近でやや外反している。口縁端部は尖り気味に仕上げられており、内、外面共に回転横ナデで底部はヘラ切り離しである。所謂「坏a」と呼称されているものである。茶褐色を呈し胎土に長石、角閃石、石英、赤色粒、白色粒を含む。



第39図 SK 3 出土遺物実測図

SK4 (第29図)

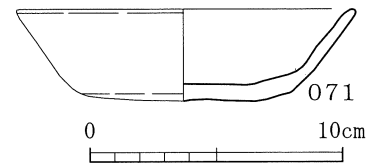
土坑群ほぼ中央に位置する不定形の土坑である。南側にテラスを設けており長さ158cm、最大幅132cm、テラス面まで24cm、深さ61cmを計る。床面は平坦でなく中央部がやや窪んでいる。

SK5 (第29図)

土坑群ほぼ中央に位置する土坑である。北側にテラスを設けているが、東側をSK6、西側SK4に切られており平面プランは不明である。長さ200cm、床面まで12cm、テラス面まで12cm、深さは24cmを計る。

出土遺物 (第40図)

071 は坏で、口径13.5cm、底径8.0cm、器高3.6cmを計る。体部は直線的に立ち上がり、口縁端部はやや丸く仕上げられる。内、外面共に回転横ナデで底部はヘラ切り離しである。見込み部には不定方向のナデが認められる。所謂「坏a」と呼称されているもので、茶褐色を呈し胎土に長石、角閃石、石英、赤色粒、白色粒を含む。



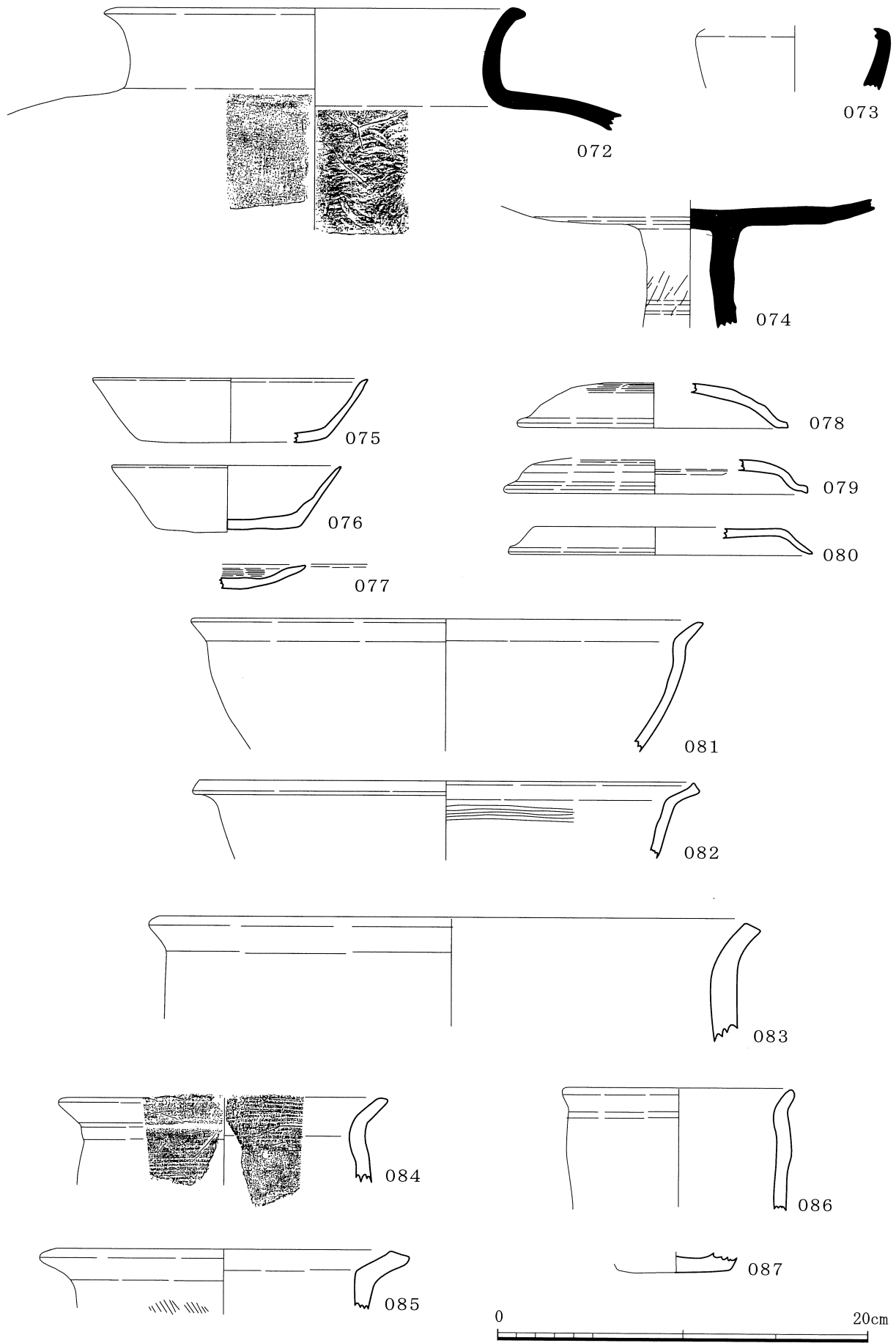
第40図 SK 5 出土遺物実測図

SK6 (第29図)

土坑群東に位置する大型の不定形土坑である。長さ360cm、最大幅320cm、深さ40cmを計る。床面は平坦ではなく東側は窪んでいる。

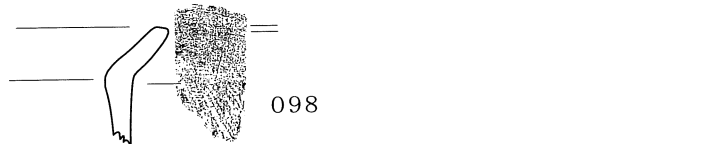
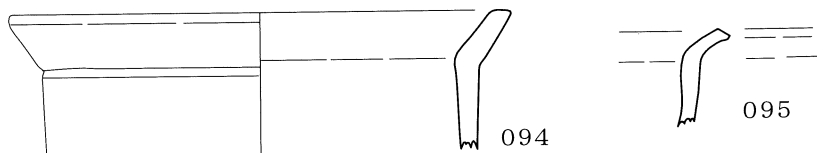
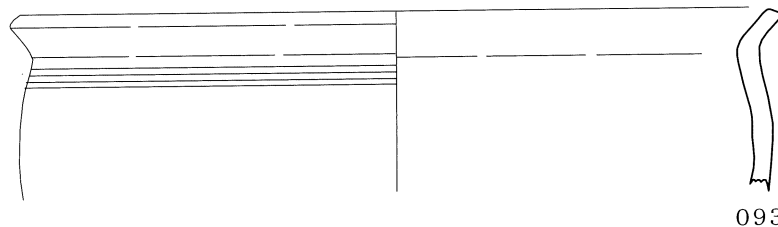
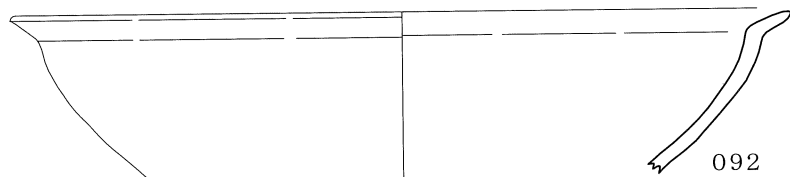
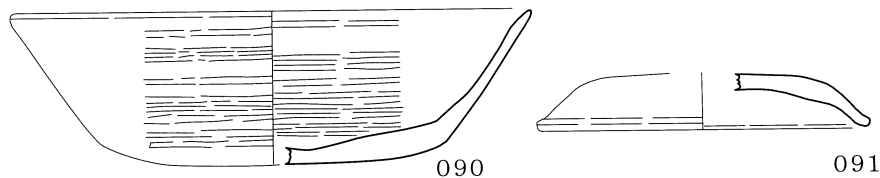
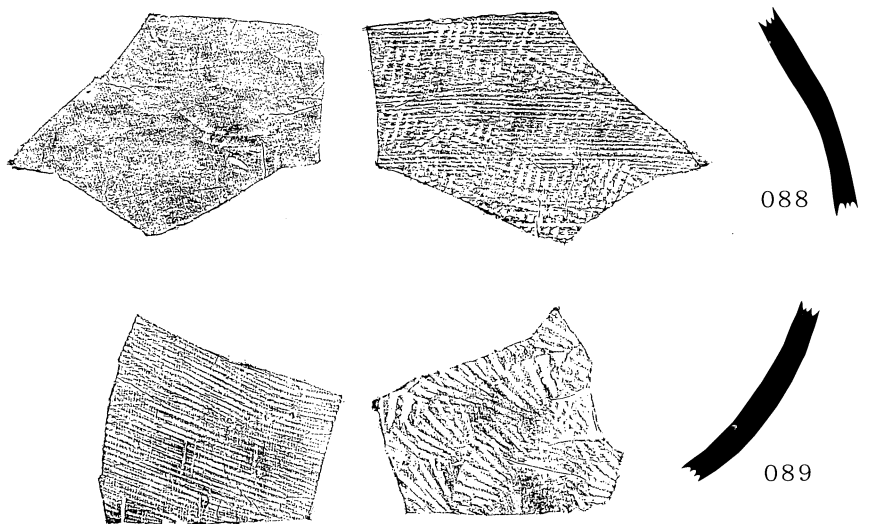
出土遺物 (第41図)

072・073 は須恵器である。072 は壺の肩部から口縁部で復元口径は21.2cm。口縁部は内・外面共に回転横ナデ、肩部内面には同心円状の当て具痕が残り、外面は格子目状のタタキ後カキ目仕上げである。073 も壺の肩部であろう。内・外面共に回転横ナデで肩部の径は10.6cmを計る。いずれも青灰色を呈す。074 は須恵器の高坏である。復元脚径は5.6cm、坏部内面は回転横ナデ後指ナデ、外面はヘラ削り、脚部外面は回転横ナデである。淡青灰色を呈す。075 は土師質土器の坏である。体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部は小さく外反し尖り気味に仕上げている。ローリングが激しく器面調整は不明であるが、所謂「坏d」と呼称されているものであろう。復元口径24.8cm、復元底径10.4cm、器高は3.4cmを計る。橙色を呈しており、胎土には長石、角閃石、石英、赤色粒、白色粒を含む。076 は、口径12.2cm、底径7.8cm、器高3.6cmを計る。体部は直線的に立ち上がり、口縁端部は尖り気味に仕上げている。ローリングが激しく器面の調整は不明である。浅黄橙色を呈し胎土には長石、角閃石、石英、赤色粒、白色粒を含む。077は小皿の口縁部である。器面調整は内面が回転横ナデ後ヘラ磨きを、外面は回転横ナデである。橙色を呈している。078～080は土師質土器の坏蓋である。いずれも身受け部の返りは消滅しており口縁端部は鳥の嘴状を呈している。器面調整はいずれもローリングが激しく、078外面に一部ヘラ磨きの痕が認められるのみである。それぞれの復元口径は14.8cm、16.2cm、17.0cmで078は橙色、079は黄橙色、080は明黄褐色を呈しており、胎土には長石、角閃石、石英、赤色粒、白色粒を含む。081・082 は鉢型土器である。



第41図 二目川遺跡Ⅱ区SK6出土遺物実測図

いずれも口縁部が「く」の字状に大きく外反しており、端部は081が尖り気味に仕上げられ、082は面取りしている。いずれも内・外面共に回転横ナデである。081には内面に板状工具の痕跡が残る。083～086は甕型土器である。それぞれの復元口径は30.8cm、18.2cm、16.8cm、12.2cmである。083-086はローリングが激しく器面調整は不明であるが、084は胴部内面がナデ、外面はハケ目が施され、胎土に2～9mm大の石英を中心とした小礫を多量に含むことから「企救型煮沸具」の系譜を引く甕であろう。085は内・外面共に口縁部までカキ目仕上げが施されている。083・085は橙色、084黄橙色を呈しており、胎土には長石、角閃石、石英、赤色粒、白色粒を含むが、083には4mm大の石英や5mm大の小礫及び砂粒を含む。087は壺の底部である。外面はヘラ切り離し後板状工具によるナデで、内面はナデか。底径は6.6cmを計る。橙色を呈し胎土には長石、角閃石、石英、赤色粒、白色粒や5mm大の小礫を含む。



SK7 (第29図)

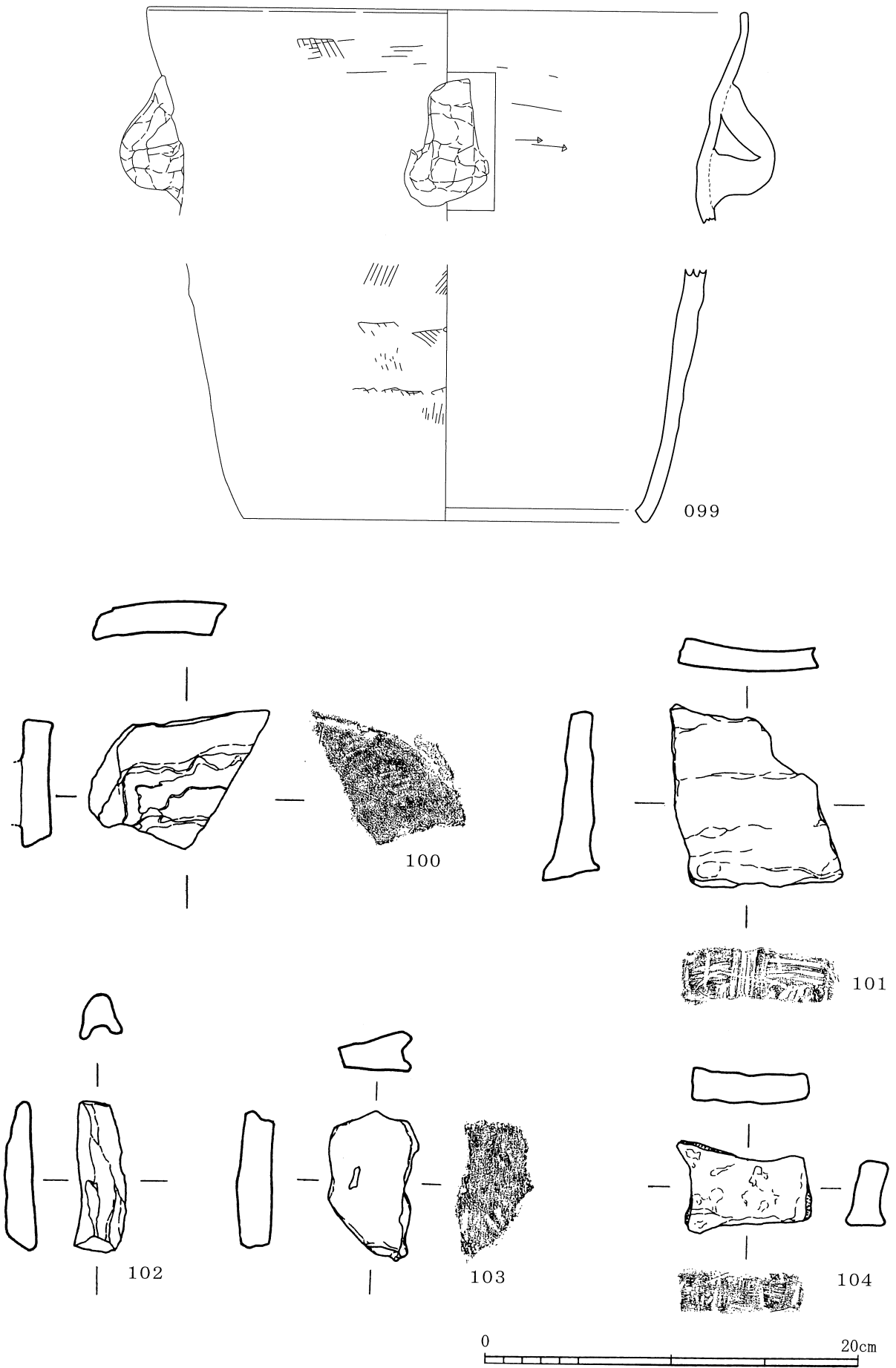
土坑群東に位置する不定形土坑である。長さ112cm、最大幅110cm、深さ21cmを計る。床面は平坦であるが南にやや傾斜している。SK6を切るように掘り込まれている。

SX 4 (第29図)

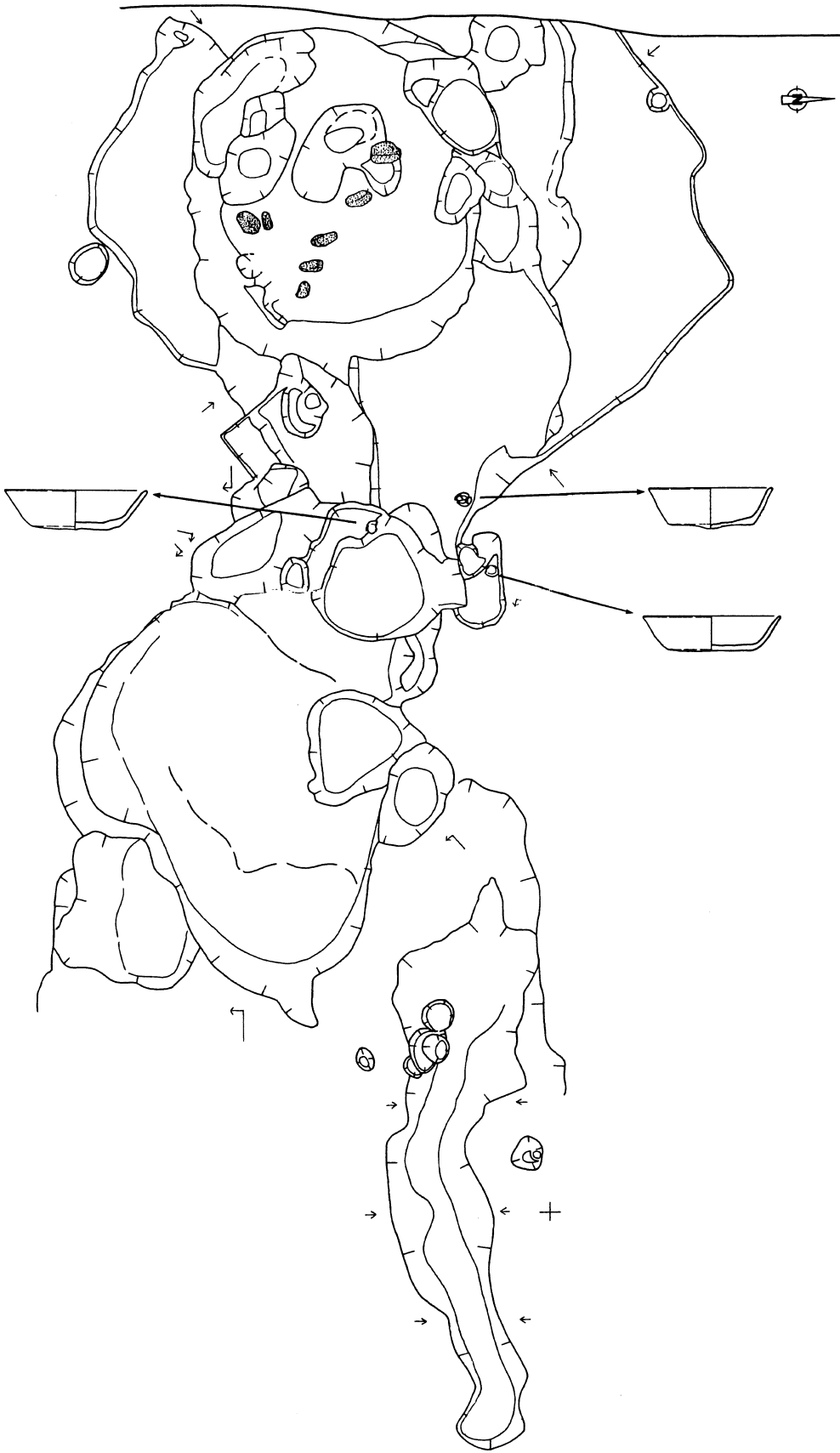
土坑群東に位置する不定形の浅い掘り込みである。東側は削平を受けており、西側はSK6・



第42図 二目川遺跡Ⅱ区SX4出土遺物実測図



第43図 二目川遺跡Ⅱ区S X 4 出土遺物実測図



第44図 二目川遺跡Ⅱ区北側土坑群遺物出土状況

SK7に、北側はSD4により切られており本来のプランは不明である。

出土遺物（第42図～第43図）

088・089は須恵器胴部片である。088は内面に同心円の当て具痕が、外面には格子目状のタタキ後カキ目仕上げである。089は内面に放射状の当て具痕、外面には平行タタキ痕が残る。090は貼り付け高台を有する坏であるが、高台はすでに剥離している。坏部の法量は復元口径20.4cm、復元底径13.2cm、器高は6.0cmを計る。底部はヘラ切り離し後ヘラ磨き、体部は回転横ナデ後ヘラ磨きである。橙色を呈し胎土には長石、角閃石、石英、赤色粒、白色粒を含む。091は須恵器の坏蓋である。復元口径は12.8cmで、器面調整はローリングが激しく不明である。明緑灰色を呈す。092は鉢型土器である。口縁部は「く」の字状に大きく外反し、端部は尖り気味に仕上がる。器面調整は内・外面共に回転横ナデである。復元口径は30.2cmで、橙色を呈し胎土には長石、角閃石、石英、赤色粒、白色粒を含む。093は甕型土器である。092と同様に口縁部は「く」の字状に大きく外反するが端部は面取りされている。復元口径は29.6cmで器面調整は内外共に回転横ナデであるが、口縁部外面下位には板状工具により意識的に凸凹を残す。黄橙色を呈し胎土には長石、角閃石、石英、赤色粒、白色粒を含む。094も甕型土器で093と同様に口縁部は「く」の字状に大きく外反し、下位には沈線を巡らせている。ローリングが激しく器面調整は不明であるが、石英や4mm大の結晶片岩、6mm大の小礫など砂礫を多く含むことから「企救型煮沸具」の系譜を引く甕であろう。復元口径は19.4cmで、橙色を呈す。95～98は甕型土器の口縁部である。いずれも口縁部は「く」の字状に大きく外反している。097・098は外面にハケ目が施されていることから「企救型煮沸具」の系譜を引く甕の口縁部であろう。096の外面は板状工具により回転横ナデが施されカキメ状に仕上がっている。いずれも橙色を呈し胎土には長石、角閃石、石英、赤色粒、白色粒を含むが、097・098には石英が多く含まれている。099は甗である。底部端に返りが認められること、把手の上端部が胴部に貼りついている形状などから「豊後大分型甗」と呼称されているものであろう。法量はいずれも反転復元であるが口径31.0cm、底径21.6cm、器高30.0cm。器面調整は内・外面共にハケ目調整後横・斜め方向のナデ仕上げである。浅黄橙色を呈し胎土には長石、角閃石、石英、赤色粒、白色粒や砂粒、6mm大の小礫を含む。100～104破片のため器種等は不明であるが移動式竈の一部か。いずれも粗いナデ仕上げである。100は炊き口か。内面には同心円状の当て具痕が、外面には剥離痕が認められる。底部が剥離したのか。101・104は底か。端部には接合する際の縦・横方向の切り込みが残る。接合をより強力にするための工夫であろう。102・103の端部にはU字状の溝が認められる。103の内面には同心円状の当て具痕が残る。いずれも黄橙色を呈し胎土には長石、角閃石、石英、赤色粒、白色粒や砂粒、小礫を含む。

ウ、溝状遺構（第29・45図）

SD1については最近まで使用されていた溝であることから説明を加えない。

SD2（第45図）

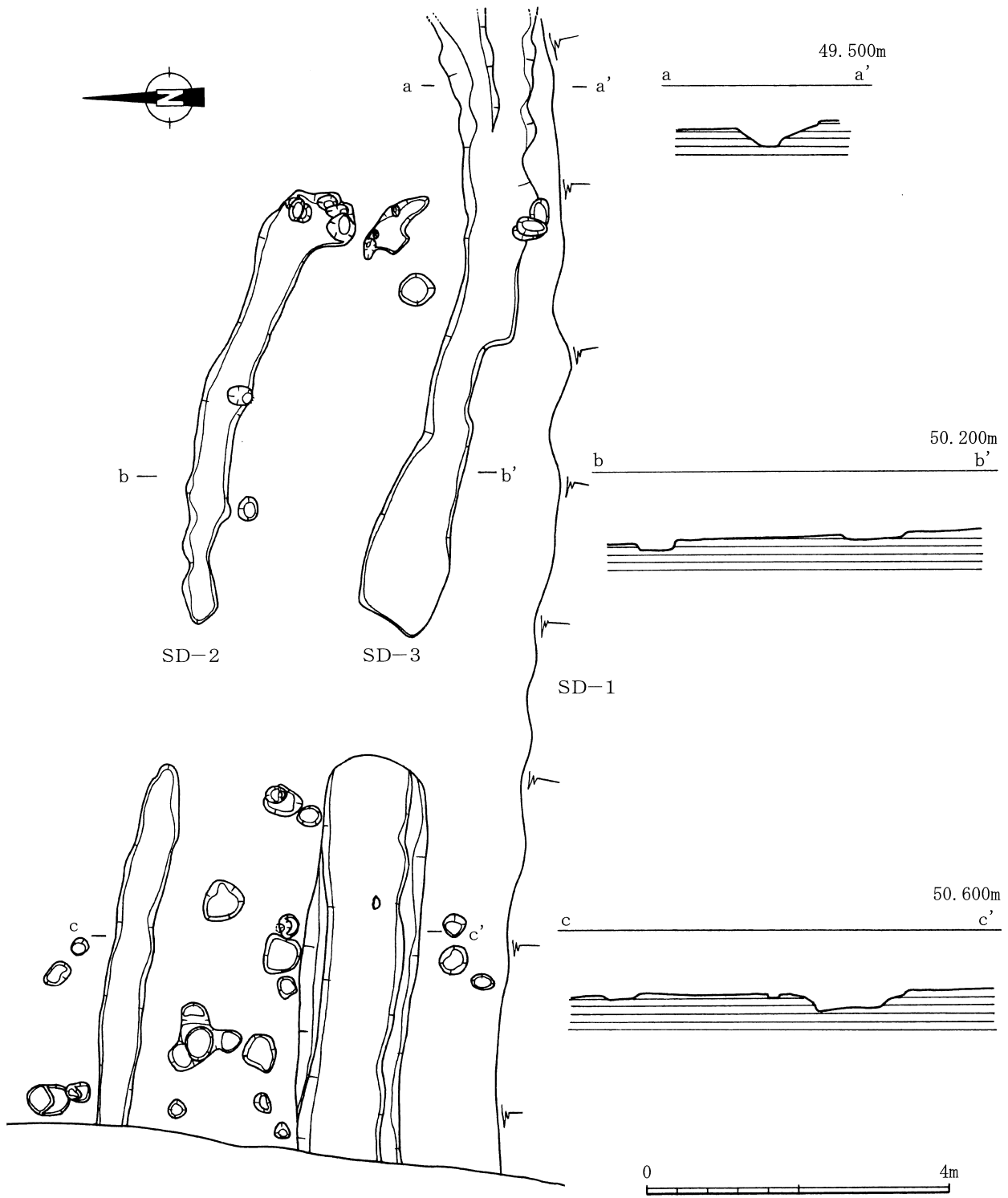
3A・3B区の西端から東方向やや南東よりに設けられている。中央部及び東端は削平のため遺構を確認できなかった。全長は10.26m、最大幅0.58m、最小幅0.18m、最大深11cm、最小深2cmを計る。立ち上がりは明瞭で溝内からはピット状の掘り込みを7基確認した。

SD3（第45図）

4A・4B・4C区にSD2と並行するように設けられている。中央部及び東端は削平のため遺構を確認できなかった。全長は13.28m、最大幅0.52m、最小幅0.14m、最大深29cm、最小深2cmを計る。不明瞭であるが立ち上がりに段差があるのは溝を掘り直した跡である。溝内からはピット状の掘り込みを3基確認した。

SD4（第29図）

北側中央土坑群から東方向に伸びる溝状遺構であるが、立ち上がりが不明瞭であることから人為的に掘られた溝というよりも自然流路の可能性が高い。全長は5.6m、最大幅1.34m、最大幅42cm、最大深13cm、最小深4cmを計る。溝内からはピット状の掘り込みを4基確認した。

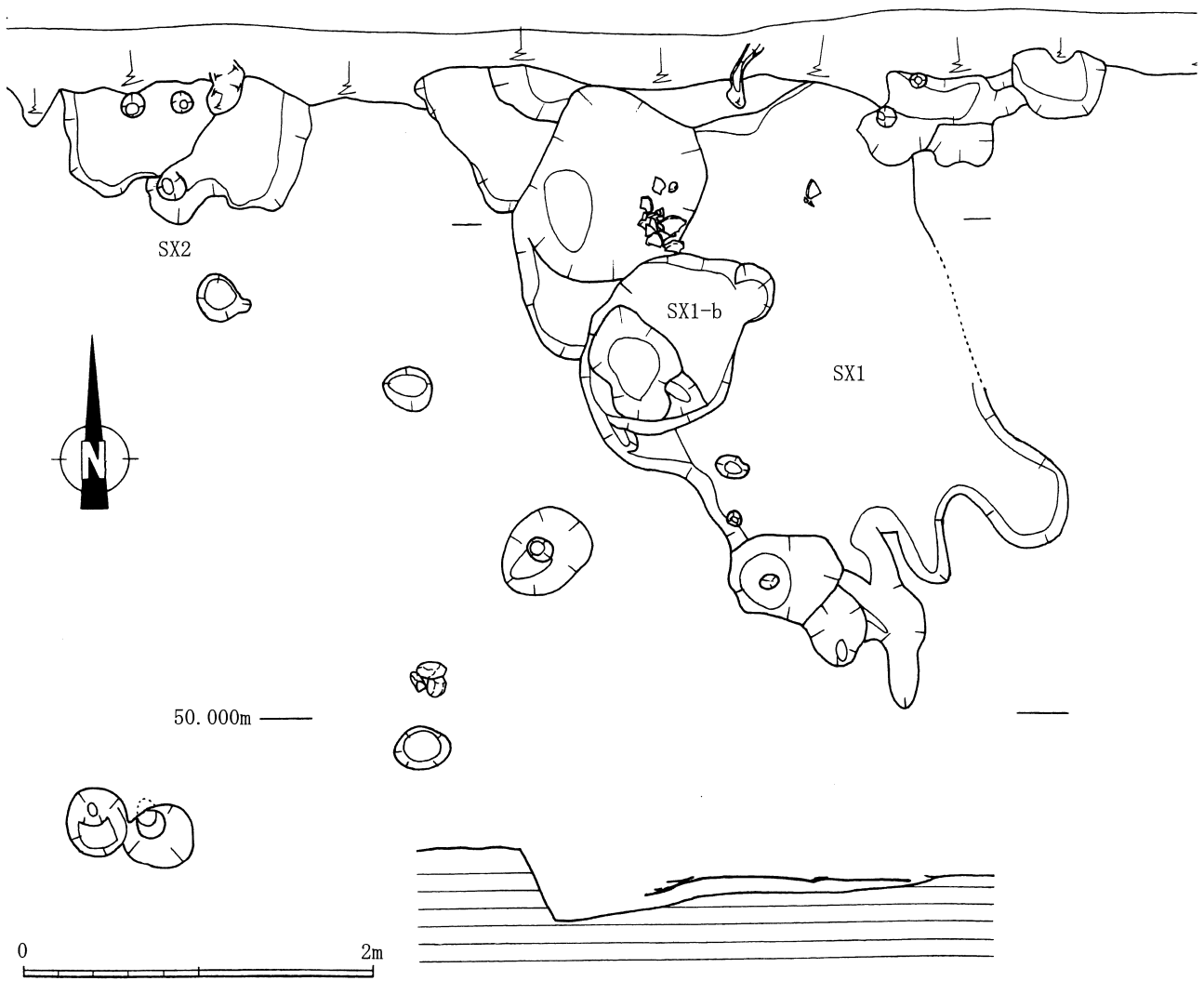


第45図 二目川遺跡Ⅱ区溝状遺構実測図

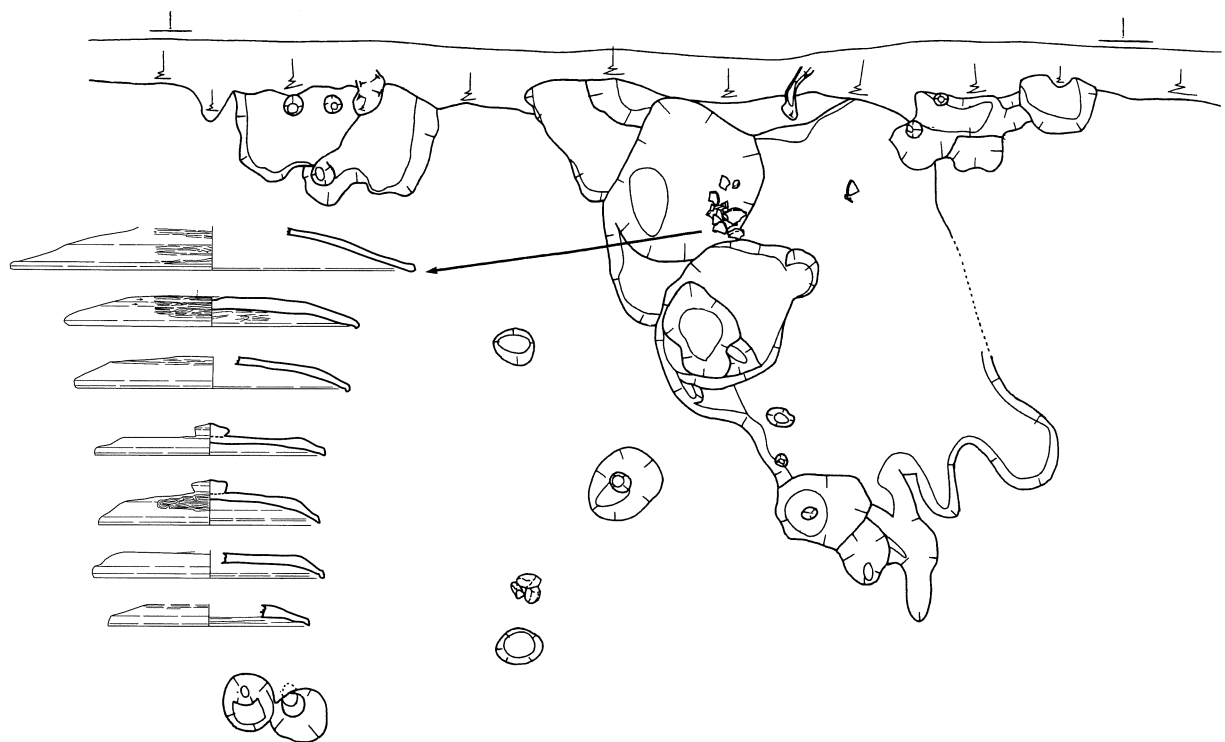
エ、その他の遺構（第46図～第55図）

SX1（第46図）

4B・5B区で検出した平面プランが不定形の遺構である。北側はSD1により切られており、長さは不明である。



第46図 SX1、SX2遺構実測図

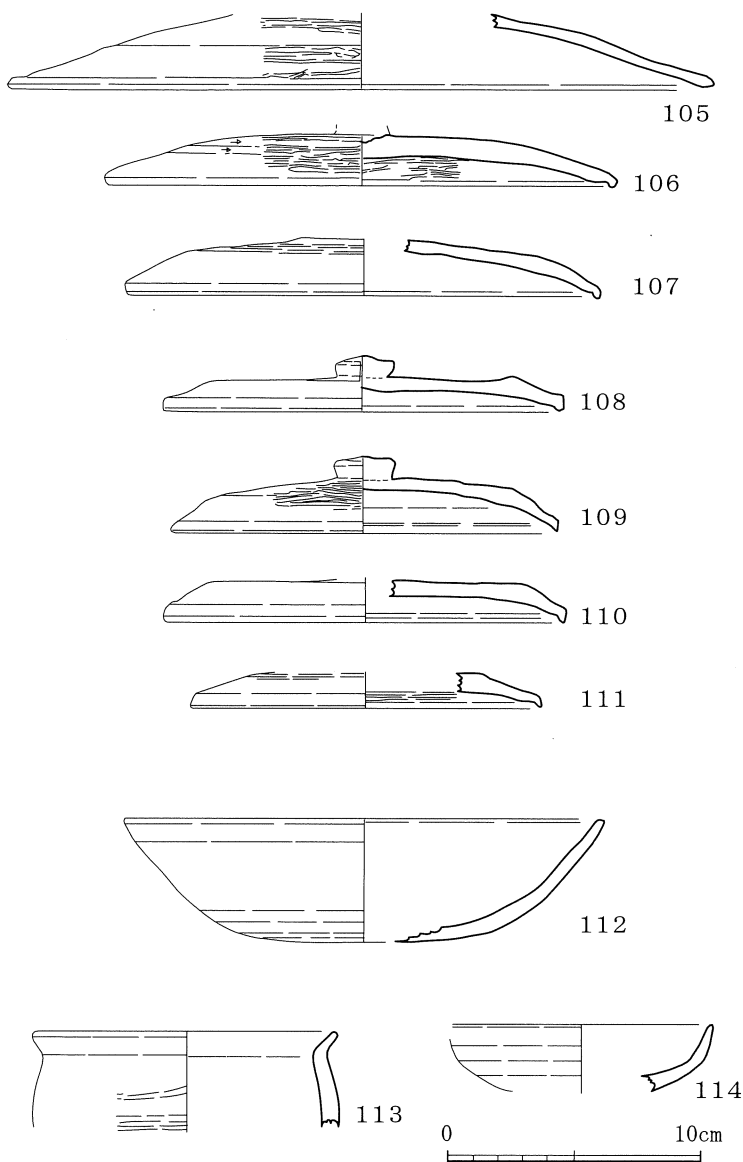


第47図 SX1、SX2遺物出土状況

検出面には焼土が広がっていたが、床面は焼けておらず東から西へ緩やかに傾斜し一段落ち込んでいる。最大幅230cm、深さは床面まで7cm、底面まで42cmを計る。床面には西側にテラスを設けた128cm、最大幅 94cm、テラス面まで29cm深さ41cmの平面プランが不定形の掘り込み(SX1-b)と長さ66cm、幅 48cm、深さ54cmの掘り込みがあるが、これらは焼土面の上から掘り込まれていることからSX1伴うものではない。

出土遺物 (第48図)

105~111は土師質土器の坏蓋である。108・109については宝珠型をつまみが残るが、他は欠損しているためつまみの有無及び形状は不明である。いずれも見受け部の返りは消滅しており 106 から111は口縁端部の形状は鳥の嘴状を呈しているが、105は先端部が丸く仕上げられている。法量および器面調整であるが105は天井部ヘラ切り離し、体部は回転横ナデ後天井部外面を回転ヘラ削りにより成形しヘラ磨きを施している。復元口径は28.0cm。106も105と同様回転横ナデ後天井部外面を回転ヘラ削りにより成形しているが体部外面だけではなく内面にもヘラ磨きを施している。復元口径は20.2cm。107も回転横ナデ後、天井部外面を回転ヘラ削りにより成形しているが



第48図 二目川遺跡Ⅱ区SX1出土遺物実測図

体部内・外面共に磨きが施されていない。復元口径は19.0cm。108は口径15.9cm、器高2.2cm、つまみ径 2.4cmを計り、天井部はヘラ切り離し後ヘラ磨きが、体部は回転横ナデで仕上げられている。109は口径15.3cm、器高2.9cm、つまみ径2.4cmを計る。天井部はヘラ切り離し後ヘラ磨きが、体部は内面が回転横ナデ、外面は回転横ナデ後ヘラ磨きが施されている。110は天井部がヘラ切り離し、体部は回転横ナデで、天井部及び体部の内・外面にはヘラ磨きが施される。復元口径は16.0cm。111も天井部がヘラ切り離し、体部は回転横ナデで、天井部及び体部の内・外面にはヘラ磨きが施される。復元口径は13.8cm。いずれも淡茶褐色を呈しており、105~109には内・外面に黒斑が認められる。胎土には長石、角閃石、石英、赤色粒、白色粒を含むが砂流は少なく精製された粘土を使用している。112は土師質土器の坏である復元口径19.0cm、復元底径8.4cm器高は4.2cmを計る。体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部は小さく外反しているが端部は丸い。底部はヘラ切り離しで、その後底部外面を回転ヘラ削りにより成形している。体部内面下位には指ナデが認められる。橙色を呈しており胎土には長石、角閃石、石英、赤色粒、白色粒を含む。113は甕型土器で復元口径は11.6cm。口縁部が「く」の字状に大きく外反し尖り気味に仕上がる。器面調整は内・外面体部が回転横ナデ後外面にはヘラ磨きが施されている。黄橙色を呈し

ており胎土には長石、角閃石、石英、赤色粒、白色粒を含む。114は小皿で復元口径10.4cmを計る。ローリングが激しく器面調整は不明であるが、体部下位はヘラ削りにより成形か。橙色を呈しており胎土には長石、石英、白色粒を含む。

SX2 (第46図)

4 B区で検出した平面プランが不定形の遺構である。北側はSD1により切られており、長さは不明である。幅138cm、深さ 約11cmを計る。床面は中央から西に向けてやや傾斜しているがほぼ平坦であり、2cm程度の小穴3個がある。遺物は出土していない。

SX 3 (第49図)

5 A区谷状地形の斜面にかかる位置で検出した平面プランは不定形の遺構で、焼土層の上に黄褐色粘土がのっている。焼土の範囲は長さ56cm、幅38cm、厚さ6cmを計る。

出土遺物 (第50図)

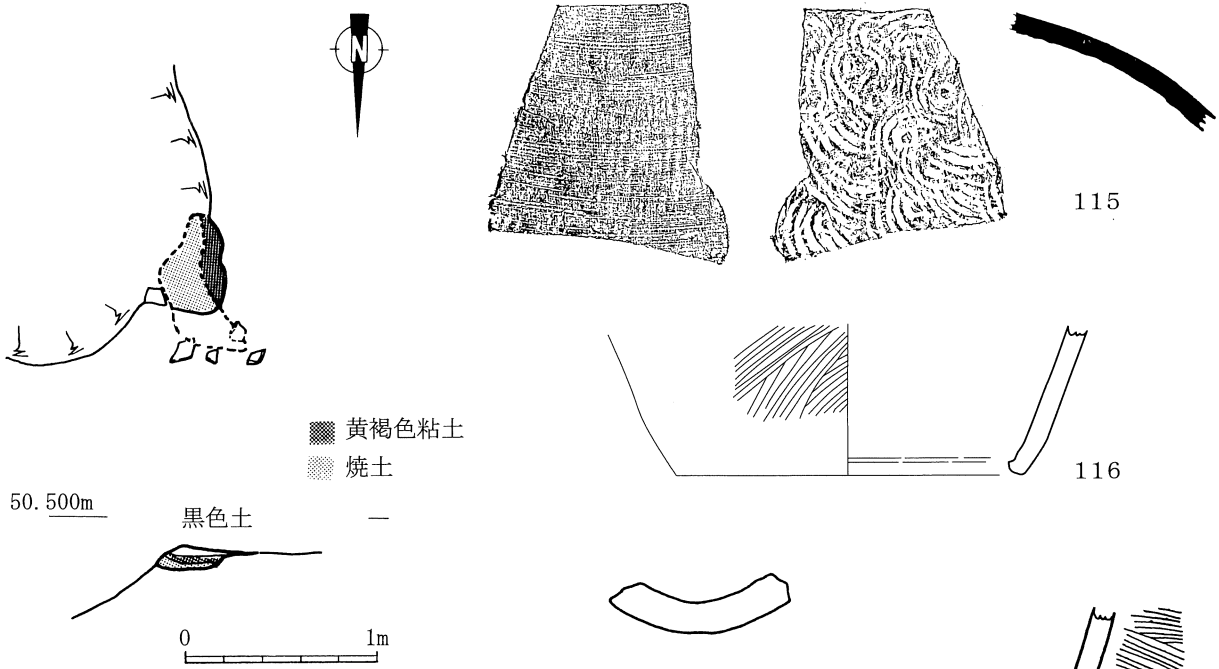
115は須恵器の胴部片である。内面には同心円の当て具痕が残り、外面は平行タタキの後カキ目仕上げである。116・117は甑の底部で、基底部内面には返りが残る。いずれの内面にも同心円状の当て具痕がわずかに残り外面はハケ目調整である。外面のタタキ痕をハケ目で消したのであろう。116の復元底径は13.8cm。115は赤褐色、116は橙色を呈し胎土には長石、角閃石、石英、赤色粒、白色粒を含む。118は瓦か。内面は横・縦方向の強いナデで布目痕は認められない。外面は粗いナデ調整である。黄橙色を呈し胎土には長石、角閃石、2mm大の石英、赤色粒、白色粒や砂粒、4mm大の小礫を含む。

SX 5 (第51図)

3C区で検出した平面プランが不定形の遺構である。遺構面を検出した際は竪穴住居が重複しているようであったが、遺構を掘り下げていくといくつもの掘り込みが重複していた。遺構の東側は昭和井路建設の際の攪乱を受けており、また調査中に水が湧き出したため完掘できず長さ・幅・深さ及び床面については不明である。遺構を検出した際、中央より南側に焼土面が広がっており、その中央には方形状の掘り込みがあった(SX6)。焼土を伴う何らかの施設と考えられる。

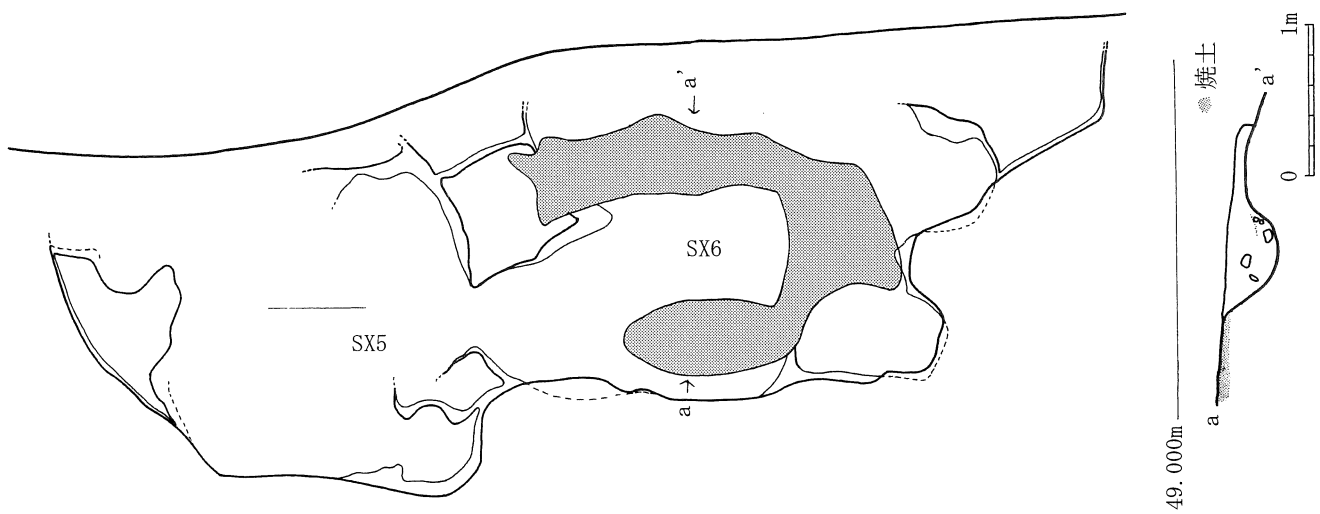
出土遺物 (第52図～第53図)

119は須恵器の胴部片である。内面には放射状の当て具痕が残り、外面は格子目状タタキ後カキ目仕上げである。暗青灰色を呈している。120は須恵器の坏蓋である。つまみ部は宝珠型で径は2.2cmを計る。天井部はヘラ切り離しであるが体部の調整はローリングが激しく不明である。青灰白色を呈す。121～125は土師質土器の坏である。121・122の体部は直線的に立ち上がり口縁端部は尖り気味に仕上げている。121の復元口径は14.0cm、復元底径9.6cm、器高3.9cm。122の復元口径14.8cm、復元底径10.8cm、器高4.0cm。123～125の体部は直線的に立ち上がるが口縁端部はやや外反し尖り気味におさまる。123の復元口径13.2cm、復元底径7.0cm、器高3.5cm。124の復元口径13.0cm。125は復元口径12.8cm、復元底径10.2cm、器高4.5+cm。はいずれも低部はヘラ切り離しで体部は回転横ナデであるが、125の底部には手持ちヘラ削りが施されている。121～124は黄橙色を、125は茶褐色を呈し、胎土には長石、角閃石、石英、赤色粒、白色粒を含む。126は低平な貼り付け高台を有する土師質土器の坏である。ローリングが激しく器面調整は不明である。高台は底部端に貼り付けられており復元底径は8.0cm。橙色を呈し胎土には長石、石英、赤色粒、白色粒を含む。127～132は土師質土器の坏蓋である。いずれも身受け部の返りは消滅しており127・128口縁端部は鳥の嘴状を、129～132は尖り気味に仕上がる。128・130は宝珠型つまみが、129にはつまみを貼り付ける際の渦巻状の切り込みが残る。器面調整はいずれも天井部はヘラ切り離し、体部の内・外面は回転横ナデであるが127・130は体部の内・外面に丁寧な回転ヘラ磨きが施され、132の体部内面には一部回転ヘラ磨きが、129には回転ヘラ削りが施されている。127の復元口径は26.6cm。128の復元口径は14.0cm。129の復元口径は22.6cm。130の復元口径は19.8cm。131の口径は19.8cm、器高は3.3cm、つまみ径2.4cmを計る。132の復元口径は19.0cm。128は黄橙色を、127・129～132は明赤褐色を呈しており胎土には長石、角閃石、石英、赤色粒、白色粒や砂粒を含むが、130には金雲母が含まれる。133は甑の胴部である。

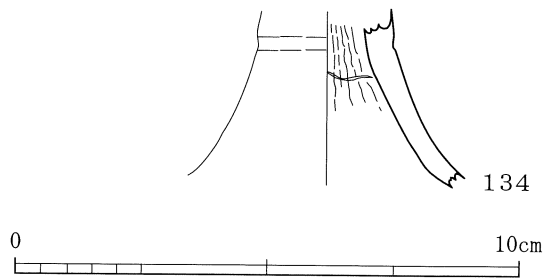
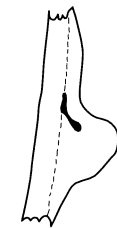
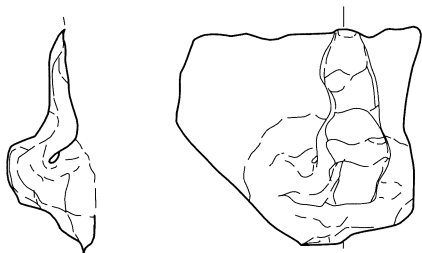
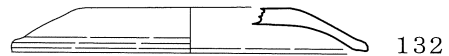
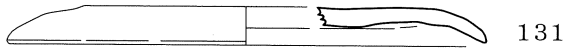
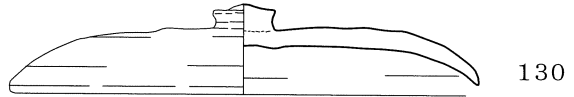
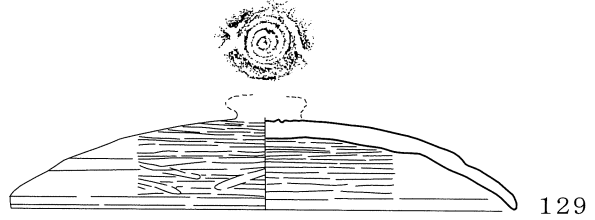
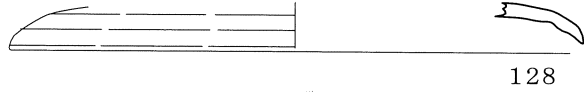
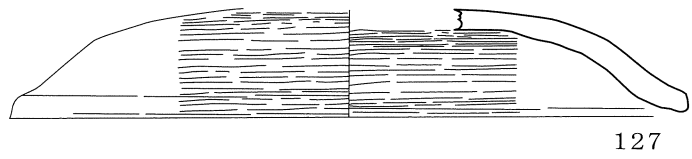
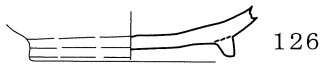
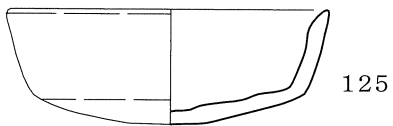
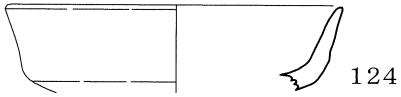
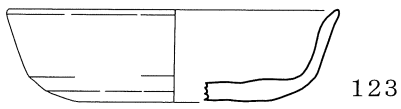
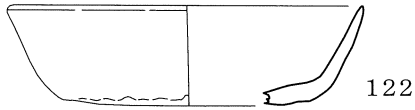
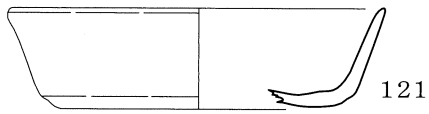
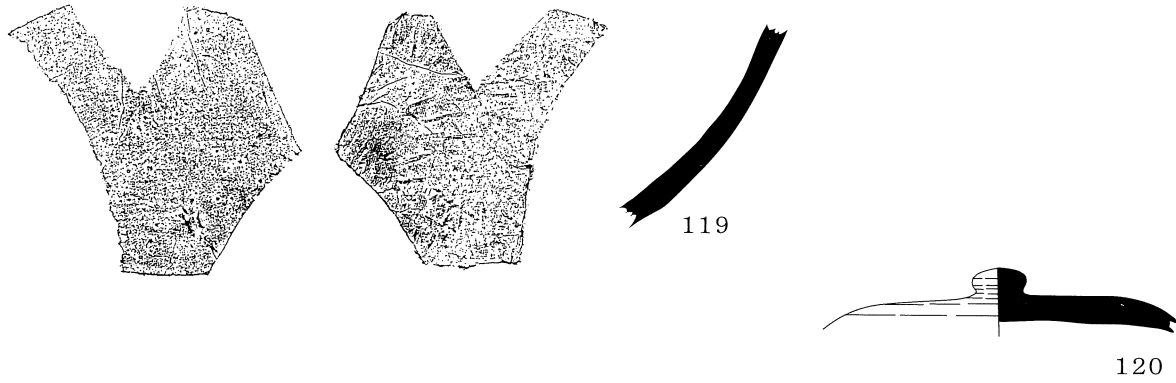


第49図 SX 3 実測図

第50図 二目川遺跡Ⅱ区 SX 3 出土遺物実測図

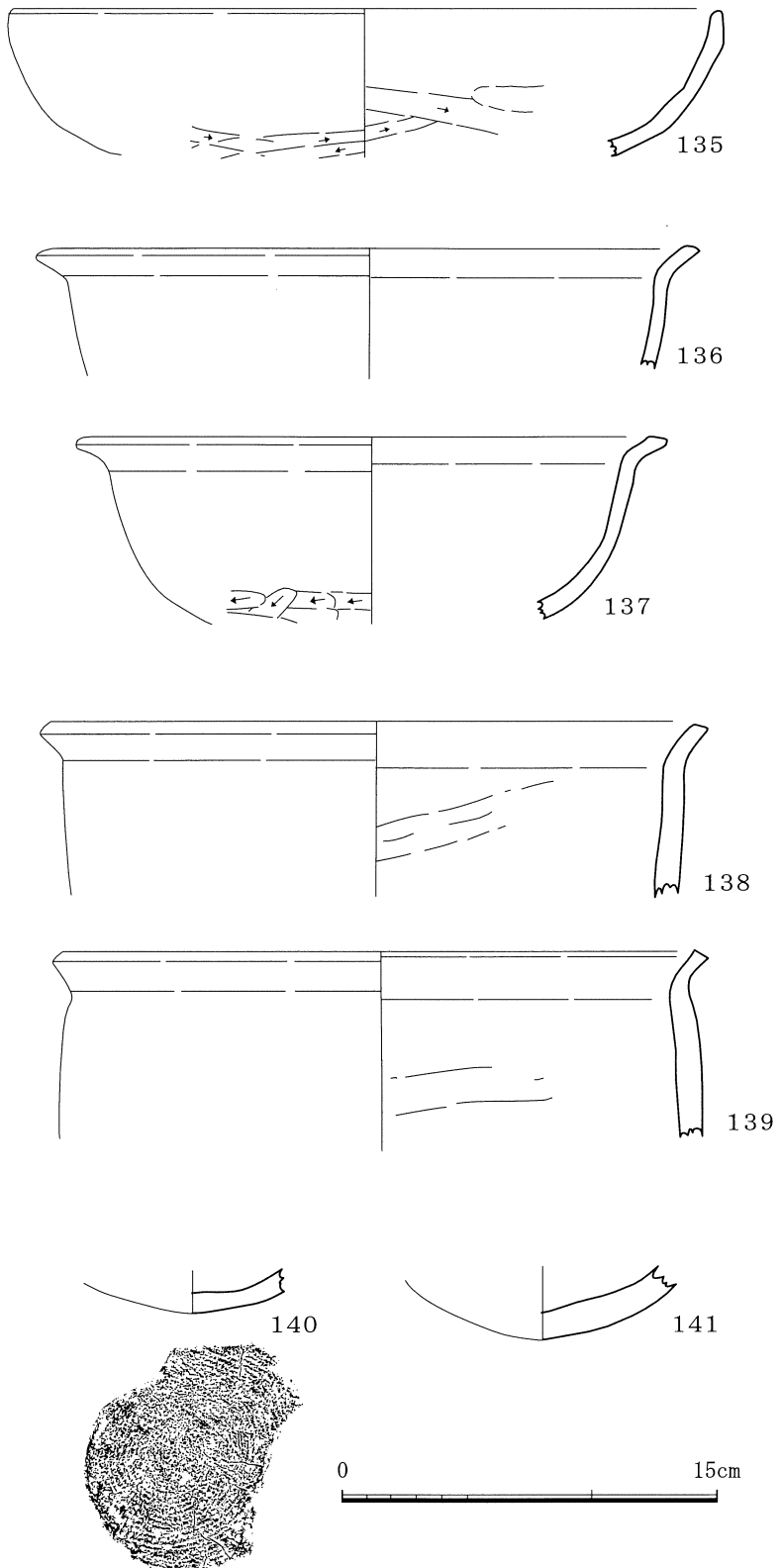


第51図 SX 5、SX 6 遺構実測図



第52図 二目川遺跡Ⅱ区S X 5 出土遺物実測図(1)

胴部内面は横方向のナデ、外面はハケ目が残る。把手部はナデであるが把手の形状からいわゆる「豊後大分型甑」と呼称されるものである。134は高坏の脚である。外面は回転横ナデ後沈線を巡らせている。内面にはしぼり痕が残る。橙色を呈し胎土には長石、角閃石、石英、赤色粒、白色粒や砂粒を含む。135～137は鉢型土器である。136・137は口縁部が「く」の字状に大きく外反する。器面調整はいずれも工具を使用した回転横ナデであるが135の内・外面や137の外面には横・斜め方向のヘラ削りが施されている。135の復元口径は18.4cm、褐色を呈し胎土には長石、角閃石、石英、赤色粒、白色粒や砂粒を多く含む。136の復元口径は25.4cmで明黄褐色を呈し胎土には長石、角閃石、5mm大の石英、赤色粒、白色粒や5mm大の小礫を含む。137の復元口径は24.0cmで暗褐色を呈し胎土には長石、角閃石、石英、赤色粒、白色粒や砂粒を含む。138・139は甕型土器である。いずれも口縁部が「く」の字状に大きく外反し、器面調整は内・外面ともに板状工具による回転横ナデ、口縁部は横ナデである。138の復元口径は24.8cmで明黄褐色を呈し胎土には長石、角閃石、石英、赤色粒、白色粒や砂粒を含む。139の復元口径は25.4cmでぶい黄橙色を呈し胎土には長石、角閃石、石英、赤色粒、白色粒や砂粒を含む。140・141は甕型土器の底部である。141はローリングが激しく器面調整は不明であるが、140の外面には回転台を使用しカキ目仕上げである。140は橙色を呈し長石、角閃石、3～5mm大を含む石英、赤色粒、白色粒や砂粒を含む。141も橙色を呈し長石、角閃石、石英、赤色粒、白色粒や砂粒を含む。



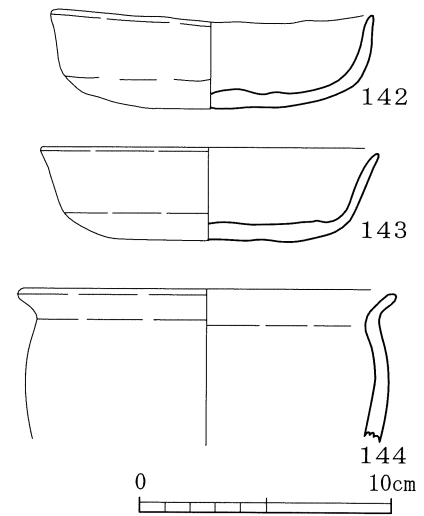
第53図 二目川遺跡Ⅱ区S X 5出土遺物実測図(2)

SX 6 (第51図)

SX 5の中央より南側に広がる焼土面で検出した平面プランが不定形の遺構である。深さは最深部で28cm、長さ131cm、最大幅66cmを計る。焼土を伴う何らかの施設と考えられる。

出土遺物（第54図）

142・143 は土師質土器の坏である。142 の体部は内湾気味に立ち上がりながら口縁端部でやや外反する。底部の調整は剥離が激しく不明であるが体部は回転横ナデである。器形のゆがみが大きく口径は14.2cm～13.0cm、底径 12.2cm～11.8cm、器高 3.8cmを計る。茶褐色を呈し長石、角閃石、多量の石英や砂粒を含む。143 の体部は直線的に立ち上がるが口縁端部ではやや外反する。底部はヘラ切り離しで手持ちヘラ削りの痕が残る。体部は回転横ナデで復元口径 13.6cm、復元底径 9.2cm、器高は 3.6cmを計る。橙色を呈しており長石、角閃石、石英、赤色粒、を多く含む。144 は長胴を有する甕型土器である。口縁部は「く」の字状に大きく外反する。器面調整はローリングが激しく不明であるが口径 14.6cm、胴部最大径 14.4cmを計る。茶褐色を呈し長石、角閃石、石英、赤色粒、白色粒や砂粒、3～5mm大の小礫を含む。



第54図 二目川遺跡Ⅱ区SX6出土遺物実測図



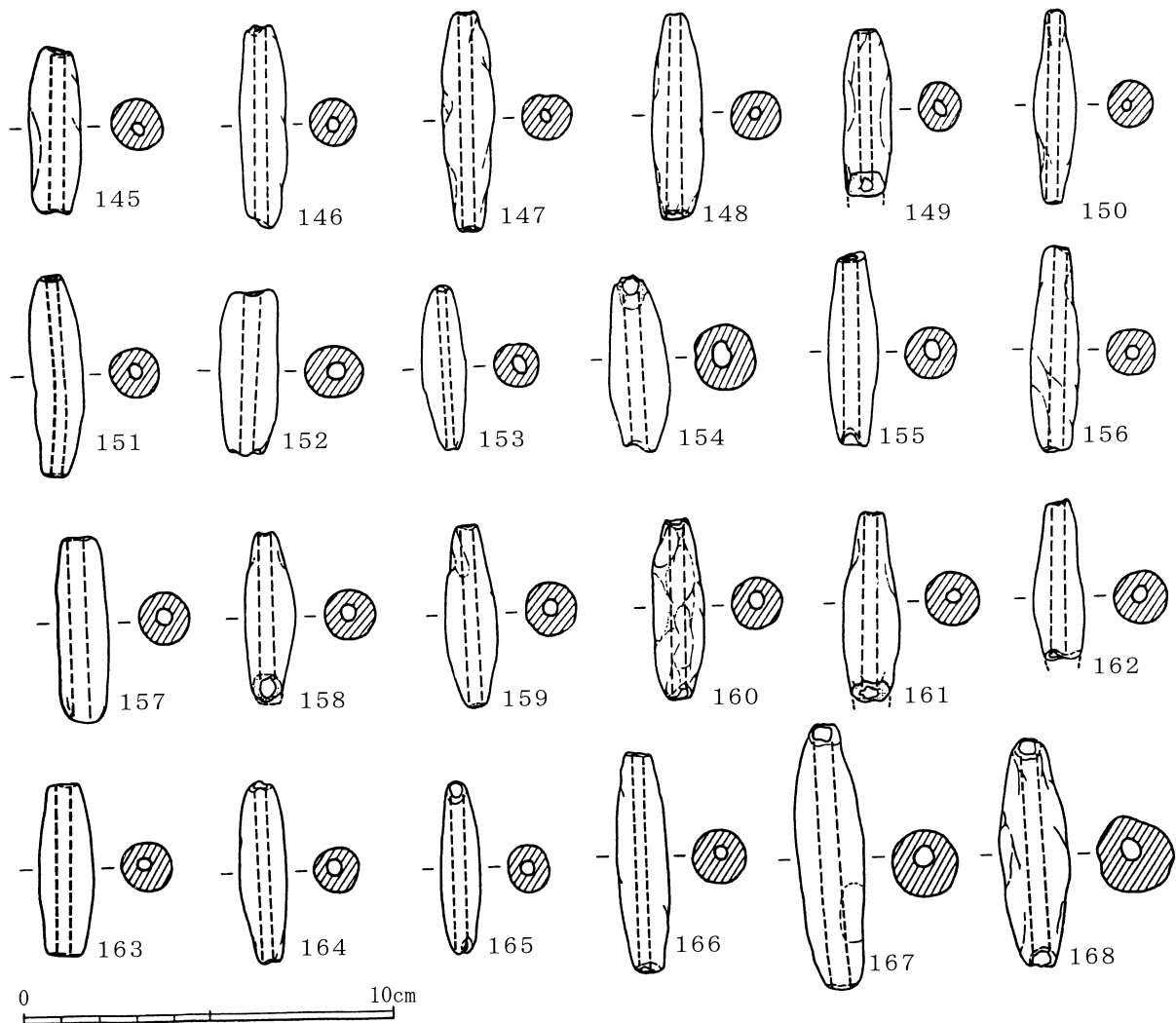
二目川遺跡より東方を望む

オ、各遺構より出土した
土錘（第55図、第1表）

各遺構より出土した土錘についてはここで一括掲載する。形態的には細身のものが多く、重量はほぼ10g前後であるが、165は5.8gと軽く、167・168は20gを超える。いずれも手づくね成形で調整はナデである。淡褐色を呈し長石、角閃石、石英を含むが小石英が多い。

図版番号	調査区	器種	最大長(cm)	孔径(cm)	最大径(cm)	重量(g)	備考
145	SH2A	管状土錘	4.5	0.4	1.4	8	
146	SH2A	管状土錘	5.4	0.4	1.3	7.8	
147	SH2	管状土錘	5.9	0.3	1.4	11	
148	SH5	管状土錘	5.5	0.3	1.4	10.8	
149	SH2B	管状土錘	4.6+ α	0.4	1.3	8.2	下部欠損
150	SH2B	管状土錘	5.2	0.3	1.2	6.9	
151	SH3	管状土錘	5.4	0.3	1.3	10.3	
152	SH4	管状土錘	4.4	0.4	1.6	10.1	
153	SH4	管状土錘	4.4	0.4	1.2	6.1	
154	SH5	管状土錘	4.7+ α	0.5	1.7	11.9	上部欠損
155	SH6	管状土錘	5.2	0.4	1.4	8.6	
156	SH2	管状土錘	5.5	0.4	1.4	8.8	
157	SH2	管状土錘	5	0.5	1.4	10.4	
158	SH2B	管状土錘	4.6+ α	0.4	1.4	7.9	下部欠損
159	SH2B	管状土錘	4.9	0.4	1.4	9.2	
160	SH2	管状土錘	4.9	0.5	1.4	8.6	
161	SH2	管状土錘	5.1+ α	0.4	1.6	11.1	下部欠損
162	SH2	管状土錘	4.3+ α	0.4	1.4	8.1	下部欠損
163	SH2	管状土錘	4.7	0.4	1.4	8.9	
164	SH2	管状土錘	4.9	0.4	1.3	7.3	
165	SH2	管状土錘	4.6	0.4	1.1	5.8	
166	SH2	管状土錘	5.9	0.3	1.4	12.1	
167	SH5	管状土錘	7.2	0.55	1.8	22.1	
168	SH2	管状土錘	6.2	0.5	2	22.4	

第1表 二目川遺跡Ⅱ区各遺構出土土錘計測表（1）



第55図 二目川遺跡Ⅱ区各遺構出土土錘実測図

カ、包含層出土土器（第56図～第66図）

二目川遺跡B地区では遺構上面の包含層から多量の遺物が出土した。出土した遺物の大半が小破片のためすべてを掲載することはできないので残存率が8分の1以上もしくは反転復元できるものを中心に紹介していく。

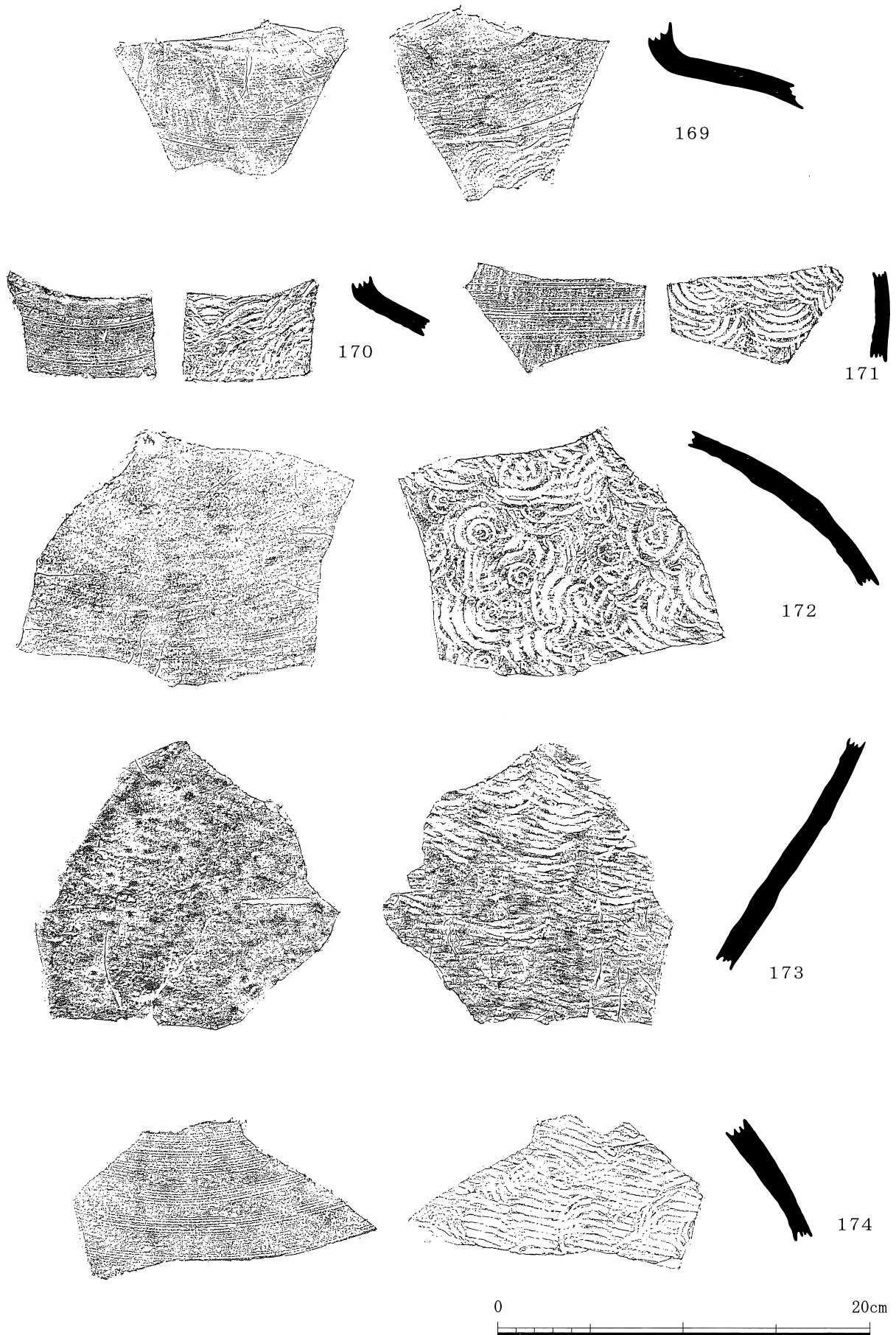
須恵器（第56図～第58図）

169は壺の肩部である。頸部付近は回転横ナデ仕上げ、肩部内面には同心円状の当て具痕が残り、外面は平行タタキ後カキ目仕上げである。170も壺の肩部で169と同じく頸部付近は回転横ナデ仕上げで肩部内面には同心円状の当て具痕が残るが、外面は格子目状のタタキ後カキ目仕上げである。いずれも青灰色を呈す。171～181は胴部片である。いずれも内面には同心円状の当て具痕が残り、170・175・177の外面は平行タタキ後カキ目仕上げ、その他は格子目状のタタキ後カキ目仕上げである。173・175・178・179・180・181には自然釉が付着しており、いずれの須恵器片も内面は青灰色、外面は暗青灰色を呈している。182は円面硯片である。外堤下位に凸帯を貼り付けており、圈台に長方形の透かしを入れる。小破片のため陸部は不明である。これは圈足硯と呼称されるもので8世紀末～9初頭頃に位置付けられている（註5）。外面は青灰色、内面は明褐灰色呈している。183は須恵器片であるが外面に窯壁が付着している。青灰色を呈し、内面には同心円の当て具痕が残る。184は長頸壺の首か。内・外面共に回転横ナデ調整で、外面には2条の沈線が巡る。内面には絞り痕が残ることから高坏の脚部の可能性もある。青灰色であるが一部明褐灰色を呈している。185は低平な貼り付け高台を有する坏である。底部はヘラ切り離し、内面は不定方向ナデ調整である。復元底径は8.2cmで青灰色を呈している。186は壺の把手か。青灰色を呈している。187は宝珠型のつまみ部でつまみ径は1.8cmを計る。灰白色を呈す。188～196は口縁部片である。188は坏蓋である。内・外面共に回転横ナデ調整で青灰色を呈す。189は鉢か。回転横ナデ調整で口縁端部は横ナデ、明褐灰色を呈す。190・192・193は甕、191・194は壺である。いずれも青灰色を呈し体部は内・外面共に回転横ナデ、口縁端部は横ナデである。195坏か。底部の調整は不明であるが体部は回転横ナデ、口縁端部は横ナデである。青灰色を呈す。196は椀であろう。調整は回転横ナデであるが内面に不定方向のナデが施されている。やはり青灰色を呈している。

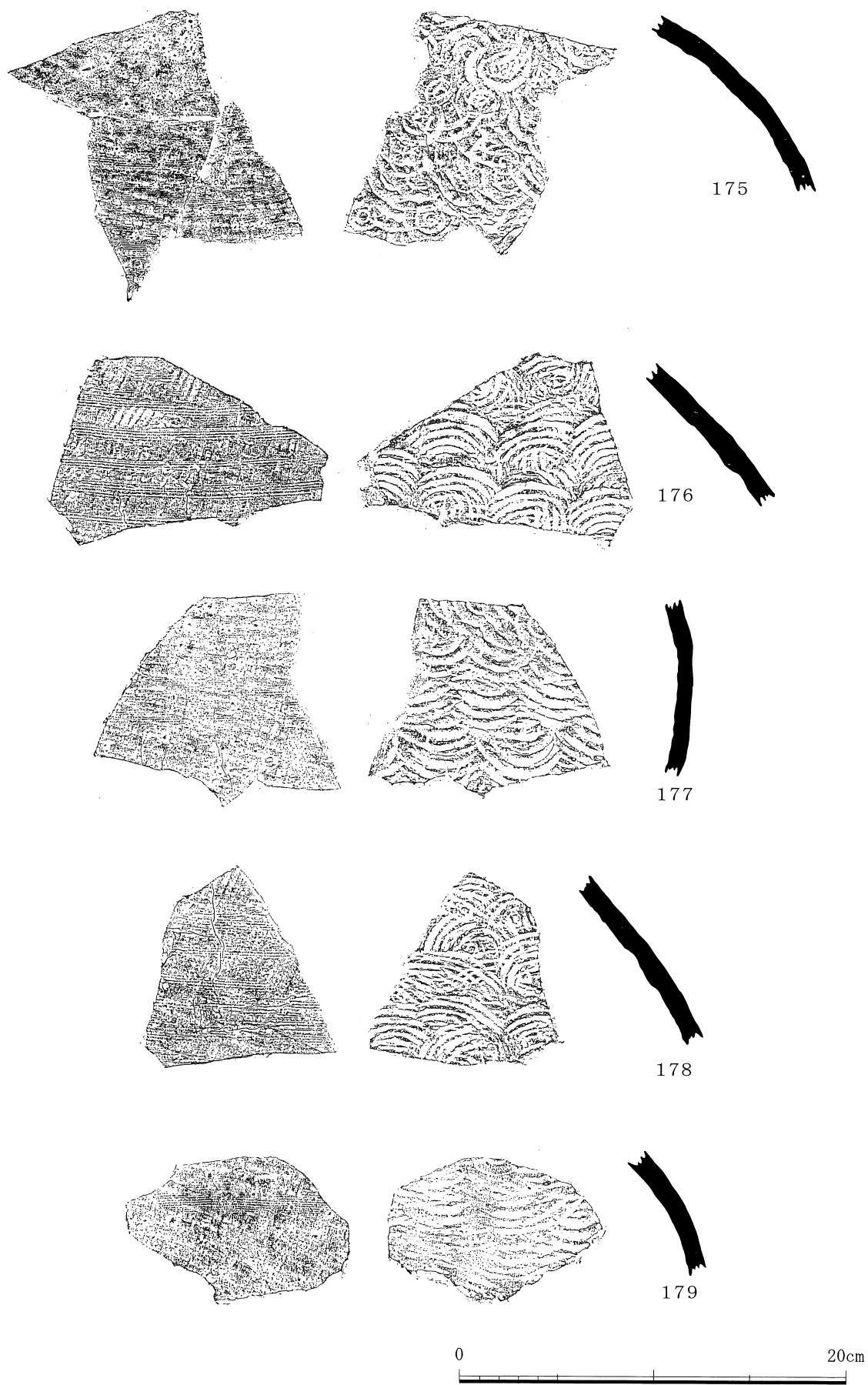
土師質土器（第59図～第61図）

・坏類（第59図）

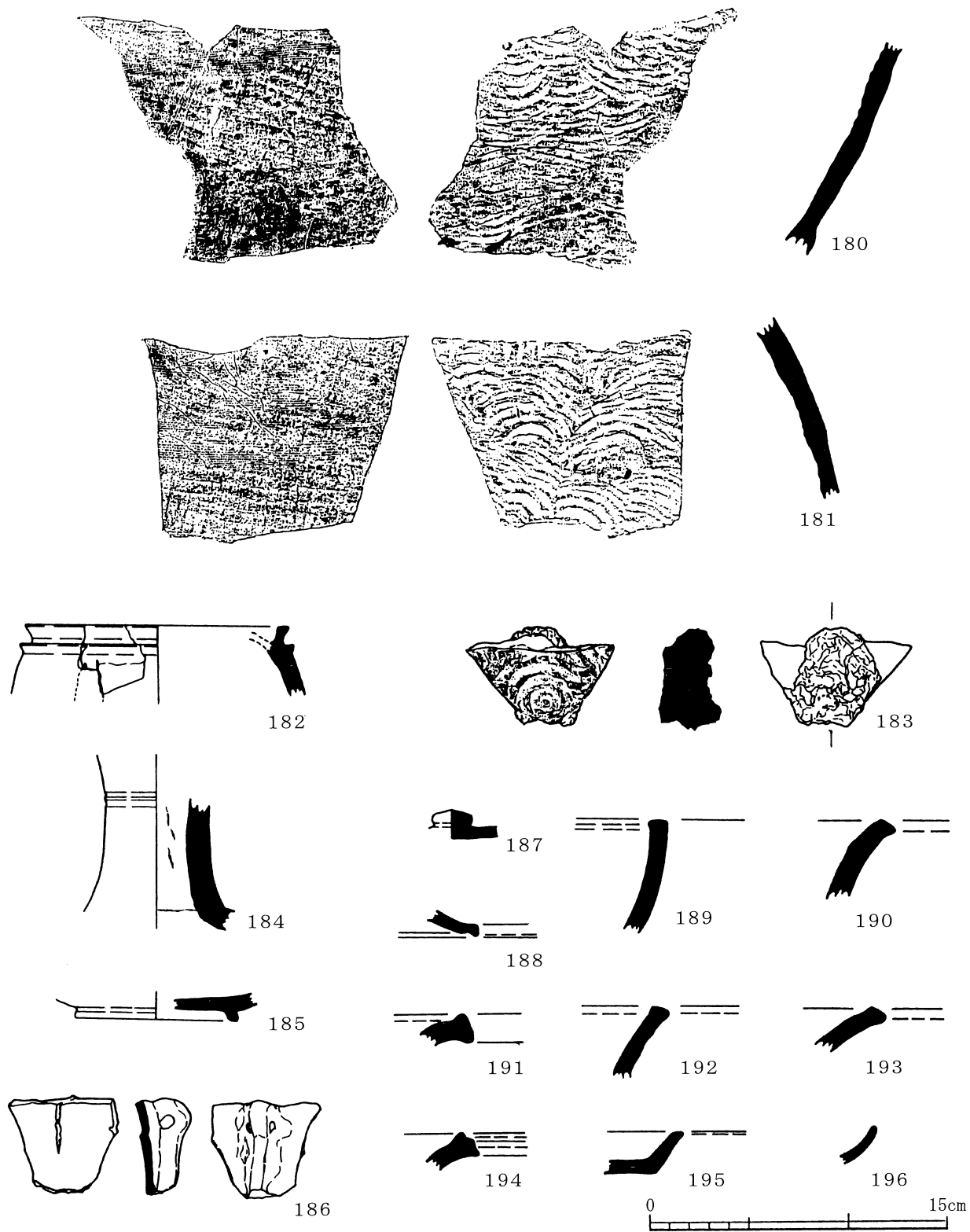
197は体部がやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部は小さく外反し尖り気味に仕上げられており、底部はヘラ切り離し後ヘラ磨き、体部は底部外面を回転ヘラ削りにより成形し、内・外面にヘラ磨きを施す。所謂「坏d」と呼称されているものに近い。復元口径は14.2cm、復元底径6.0cm、器高は4.6cmを計る。橙色を呈しており、胎土には長石、角閃石、石英、赤色粒、白色粒や5mm大の小礫を含む。198の体部はやや外湾気味に立ち上がりながら端部は尖り気味に仕上がる。復元口径は14.8cm、復元底径12.8cm、器高は3.8cmを計る。橙色を呈しており、胎土には長石、角閃石、2mm大の石英、赤色粒、白色粒を含む。199の体部は直線的に立ちあがり端部もそのまま尖り気味に仕上がる。復元口径は13.6cm、復元底径9.6cm、器高は3.8cmを計る。器面調整はローリングが激しく不明である。橙色を呈しており、胎土には長石、角閃石、2mm大の石英、赤色粒、白色粒を含む。200～202も坏であるが197～199に比べると器高が低い。体部は直線的に立ちあがり端部もそのまま尖り気味に仕上がるが、200に比べると201・202は体部の開きがやや大きい。200の底部はヘラ切り離し、体部は回転横ナデであるが、201・202はローリングが激しく器面調整は不明である。それぞれの法量は200が復元口径は15.4cm、復元底径10.4cm、器高は3.3cm、201は復元口径が12.8cm、復元底径9.6cm、器高は4.8cm、202は復元口径が11.6cm、復元底径8.6cm、器高は2.7cmを計る。いずれも橙色を呈し胎土には長石、角閃石、石英、赤色粒、白色粒を含む。203～205は小皿である。203の体部は直線的に立ち上がり口縁端部は尖り気味に仕上がる。ローリングが激しく器面調整は不明である。復元口径は13.1cm、復元底径10.0cm、器高は1.9cmを計る。橙色を呈し胎土には長石、角閃石、3mm大の石英、赤色粒、白色粒を含む。204・205は体部がやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部は小さく外反し尖り気味に仕上げられており、体部は回転横ナデ後、内・外面にヘラ磨きを施す。204の復元口径は14.4cmで橙色を、205の復元口径は11.6cmで明赤褐色を呈す。いずれも胎土には長石、角閃石、2mm大の石英、赤色粒、白色粒を含



第56図 二目川遺跡Ⅱ区包含層出土遺物実測図(1)

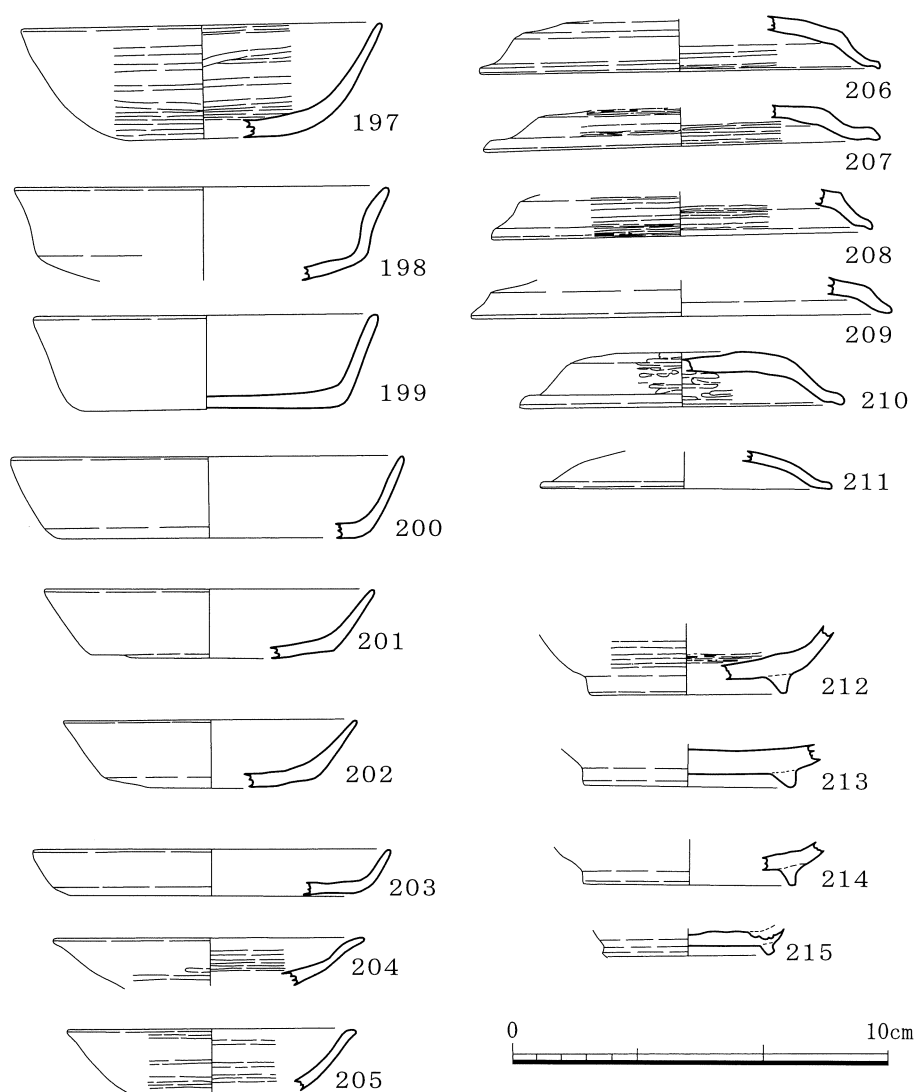


第57图 二目川遺跡Ⅱ区包含層出土遺物実測図(2)



第58図 二目川遺跡Ⅱ区包含層出土遺物実測図(3)

む。206～211は坏蓋である。いずれも身受け部の返りが消滅しており209を除くと口縁端部は鳥の嘴状を呈している。209・211はローリングが激しく器面調整は不明であるが、206・207・208・210は天井部がヘラキリ離し、体部は内・外面共に回転横ナデ後ヘラ磨きが施されており、210は特に丁寧な磨きが施されている。それぞれの復元口径は206が15.8cm、207が15.6cm、208が15.2cm、209が16.6cm、210が13.0cm、211が11.6cmである。206は黄橙色、207～209・211が橙色、210が暗赤色を呈し、いずれも胎土に長石、角閃石、石英、赤色粒、白色粒を含む。212～215は低平な貼り付け高台を有する坏である。212は底

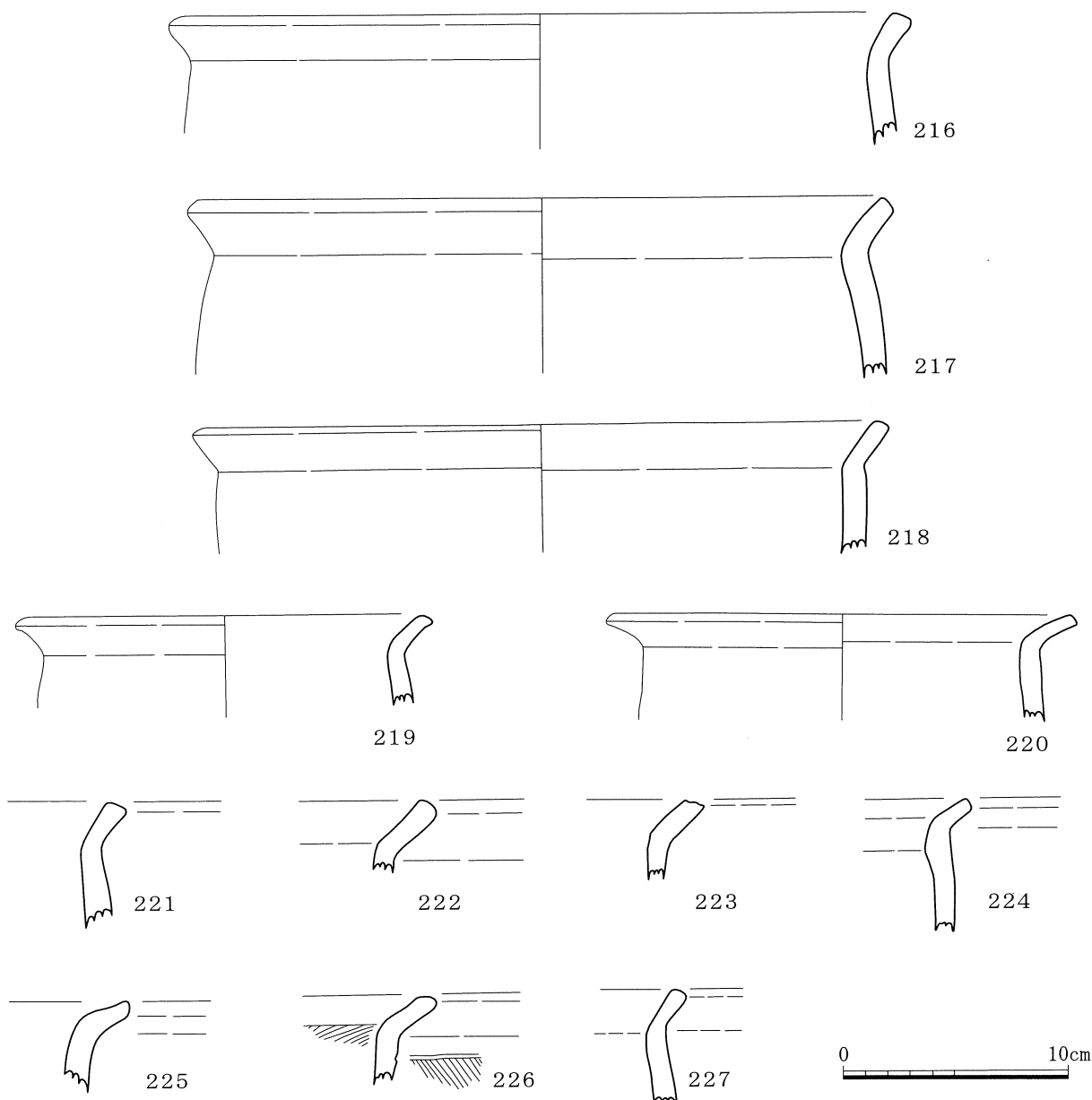


第59図 二目川遺跡Ⅱ区包含層出土遺物実測図(4)

部ラ切り離し後ヘラ磨きが、体部内・外面共に回転横ナデ後ヘラ磨きが施されている。復元底径は7.4cmで橙色を呈し胎土に長石、角閃石、赤色粒、白色粒を含む。213はローリングが激しいため器面調整は不明である。復元口径は8.4cm、橙色を呈し胎土に長石、角閃石、石英、赤色粒、白色粒を含む。214の内面は回転横ナデである。復元底径8.4cm。橙色を呈し胎土に長石、角閃石、3mm大の石英、赤色粒、白色粒を含む。215の底部はヘラ切り離し、体部は回転横ナデである。高台の踏ん張りがしっかりしており、また明褐灰色を呈していることから焼成のよくない須恵器の可能性はある。復元底径は6.4cmで精製された胎土を使用している。

・甕類 (第60図)

216～227は甕型土器である。いずれも口縁部は「く」の字状に大きく外反している。216～218の器面調整は内面が工具による強い回転横ナデ、外面は板状工具による回転ナデのためカキ目状に仕上がりに、口縁端部は横ナデである。216は復元口径31.4cmで浅黄橙色を、217は復元口径29.2cmで黄橙色、218は復元口径29.8cmで浅黄橙色を呈し、いずれも、胎土に長石、角閃石、石英、赤色粒、白色粒および砂粒を含む。219・220も甕型土器である。219の復元口径は16.6cmで器面調整は内面が工具による回転横ナデ、外面は板状工具による回転ナデのためカキ目状に仕上がりに口縁端部は面取りしている。浅黄橙色を呈し、胎土に長石、角閃石、3mm大の石英、赤色粒、白色粒および砂粒を含む。220の復元口径は20.4cm、器面調整は内・外面共に回転横ナデである。橙色を呈し、胎土に長石、角閃石、石英、赤色粒、白色粒、砂粒および3mm大の小礫を含む。221～227は甕型土器の口縁部であ



第60図 二目川遺跡Ⅱ区包含層出土遺物実測図（5）

る。226は外面に粗いハケ目が残り胴部に沈線を巡らせていること、また石英を多量に含むことから「企救型煮沸具」と呼称されているものである。橙色を呈す。222・223 も多量に石英を含むことから「企救型煮沸具」か。221・224・225・227の器面調整は内・外面共に回転横ナデで、口縁端部は面取りされている。いずれも浅橙色を呈し、胎土に長石、角閃石、石英、赤色粒、白色粒、砂粒および小礫を含む。

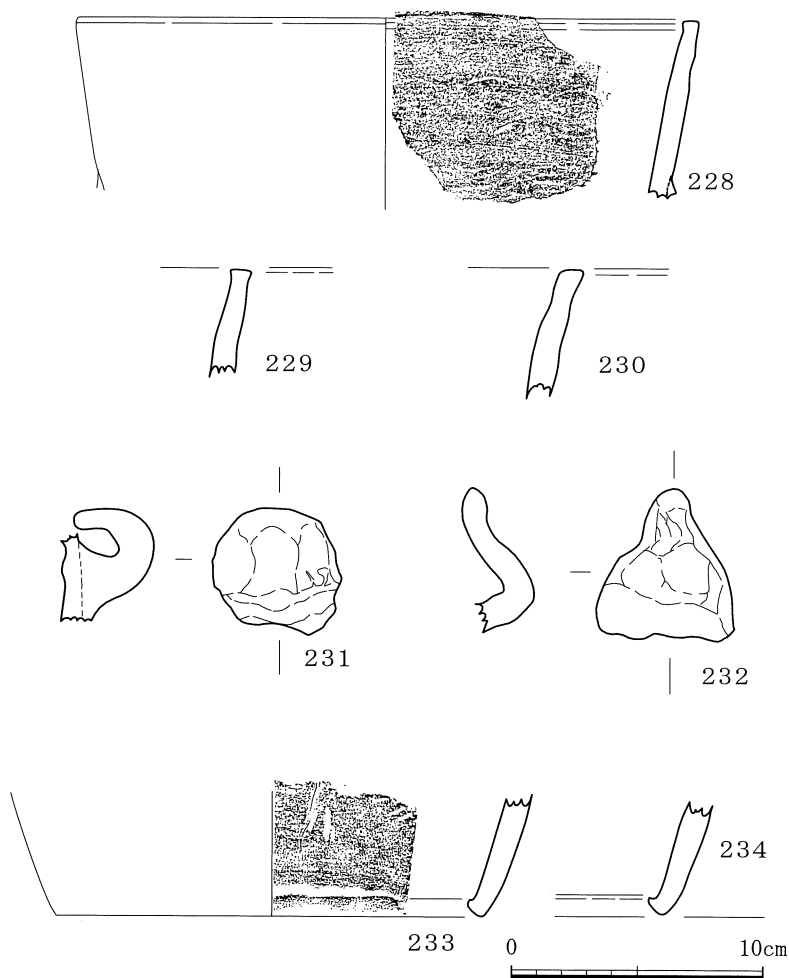
甑（第61図）

228～230 は口縁部である。228 の器面調整は内・外面共に横方向のナデ調整であるが、内面には同心円上の当て具痕が残る。復元口径は25.0cmで、口縁端部は面取りされており外面には把手の一部が残る。229・230はいずれも内・外面共に横方向のナデ調整で、端部は面取りされている。228 は橙色を229・230 は黄橙色を呈し、いずれも胎土に長石、角閃石、石英、赤色粒、白色粒および砂粒を含むが石英が多い。231・232は把手である。黄橙色を呈し、胎土に長石、角閃石、石英、赤色粒、白色粒および砂粒を含む。いずれも形状から「豊後大分型甑」と呼称されているものである。233・234は底部である。いずれも基本的には横方向のナデ調整であるが233の内面には当て具痕（平行状か）が残る。器底部内面に明瞭な返りがつけられることから「豊後大分型甑」の底部

である。233 の復元底径は17.0 cmで、黄橙色を呈し胎土に長石、角閃石、石英、赤色粒、白色粒、砂粒および5mm大の小礫を含む。234の内面は黄橙色であるが外面は赤橙色を呈しており胎土に長石、角閃石、2mm大の石英、赤色粒、白色粒、および砂粒を含む。

製塩土器 (第62図)

235～237 は固形塩生産用の焼塩土器の口縁部である。一部ローリングが激しく器面調整が不明な部分のあるものの外面には成形の際の指頭圧痕が、内面には布目痕が残ることから型作りによって製作されたことがわかる。全体の形状は不明であるがこれらの特徴から円筒形を呈する肉厚丸底のいわゆる「六連式土器」と称されるものであろう。235・236 の端部は尖り気味に、237の端部は平坦に仕上げられている。235・236は茶褐色、237 は灰黄色を呈し胎土に長石、石英、赤色粒、白色粒や砂粒を

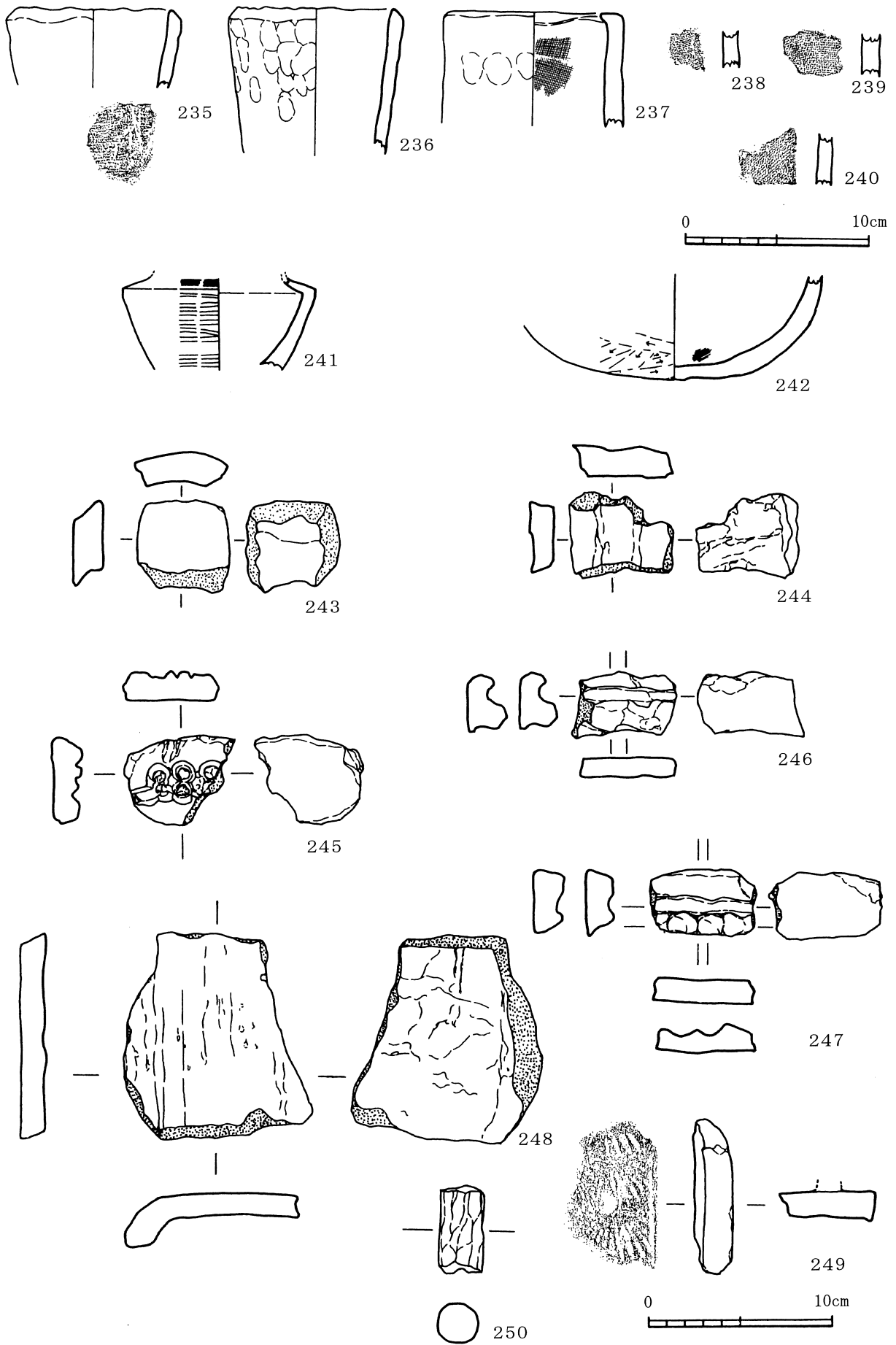


第61図 二目川遺跡Ⅱ区包含層出土遺物実測図(6)

含むが、砂粒が多く胎土のきめは粗い。238～240 はいずれも胴部片で内面に布目痕が残る。238・240 は灰黄色、239 は茶褐色を呈しいずれも茶褐色を呈しており胎土に長石、石英、赤色粒、白色粒や砂粒を含む。

その他の土器 (第62図)

241は小壺の胴部か。やや開きながら立ち上がる胴部は、肩部で最大径を計り大きく内傾しながら口縁部へと続く。内・外面ともに回転横ナデがあるが外面にはヘラ磨きが施される。肩部径は 10.4cmで、胎土に長石、角閃石、石英、赤色粒、白色粒、砂粒および4mm大の小礫を含む。242 は丸底の甕の底部であろう。内面はハケ目調整後荒いナデが、外面もナデ調整であるが底部付近には縦・横方向の削り痕が残る。浅黄橙色を呈し胎土に長石、角閃石、2mm大や6mm大の石英、赤色粒、白色粒、砂粒および2～3mm大の小礫を含む。243～250は器種及び器形不明の土器破片である。243・244は瓦か。243は内・外面共に荒いナデ仕上げである。244 の外面は剥離しており内面には布目痕が残る。243 は橙色を、244 黄橙色を呈し胎土に長石、角閃石、2～3mm大の石英、赤色粒、白色粒や砂粒を含む。245 は内面が粗いナデ調整、外面は荒いナデ調整後管状工具による連続珠文が施される。黄橙色を呈し胎土に長石、角閃石、石英、赤色粒、白色粒や砂粒を含む。246～249 は移動式竈の破片か。器面調整はナデ調整を主とし仕上げは粗い。246・247には凹線上の窪みや指頭圧痕が残る。いずれにもい黄橙色を呈しており胎土に長石、角閃石、石英、赤色粒、白色粒や砂粒を含む。248は竈の底部か。内面は荒いナデ、外面はヘラ削りで成型している。橙色を呈し胎土に長石、角閃石、2～3mm大の石英、赤色粒、白色粒や砂粒を含む。249は竈の炊き口か。内面には車輪状の当て具痕が、外面には庇の剥離痕残る。黄橙色を呈し胎土に長石、角閃石、石英、赤色粒、白色粒や砂粒を含む。250は何かの脚部であろう。円筒形であるが両端はすでに欠損しているた

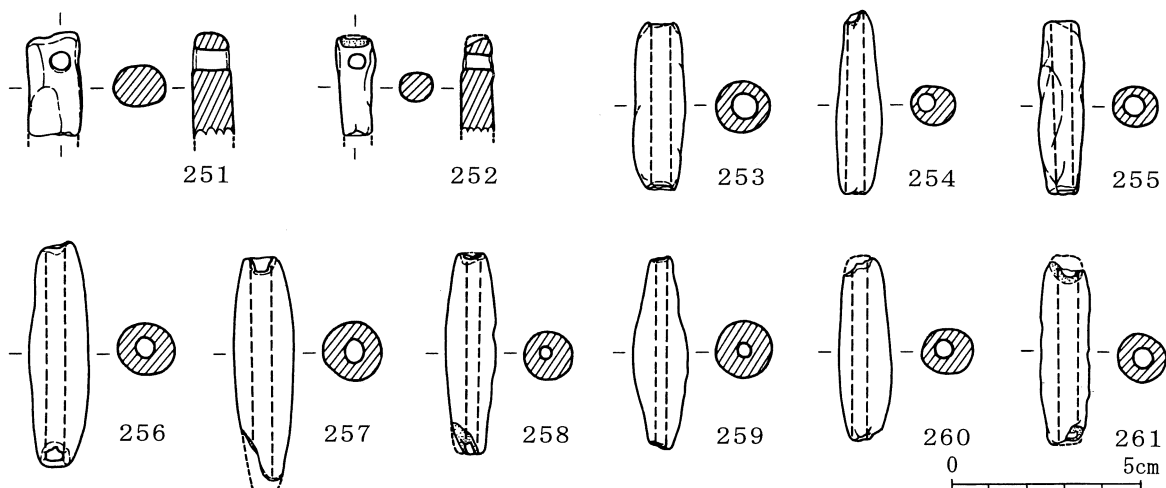


第62图 二目川遺跡Ⅱ区包含層出土遺物実測图(7)

め全体の器形は不明である。ナデ成型で淡橙色を呈し胎土に長石、角閃石、石英、赤色粒、白色粒を含む。

土錘 (第63図 第2表)

251・252 は有孔土錘である。下部が欠損しており正確な法量は不明である。253～261 は管状土錘で形態的には細身のものが多く、重量はほぼ10g前後である。遺構出土の土錘と同じく手づくね成形で調整はナデである。淡褐色系統の色調を呈し長石、角閃石、石英を含むが小石英が多い。



第63図 二目川遺跡Ⅱ区包含層出土土錘実測図(8)

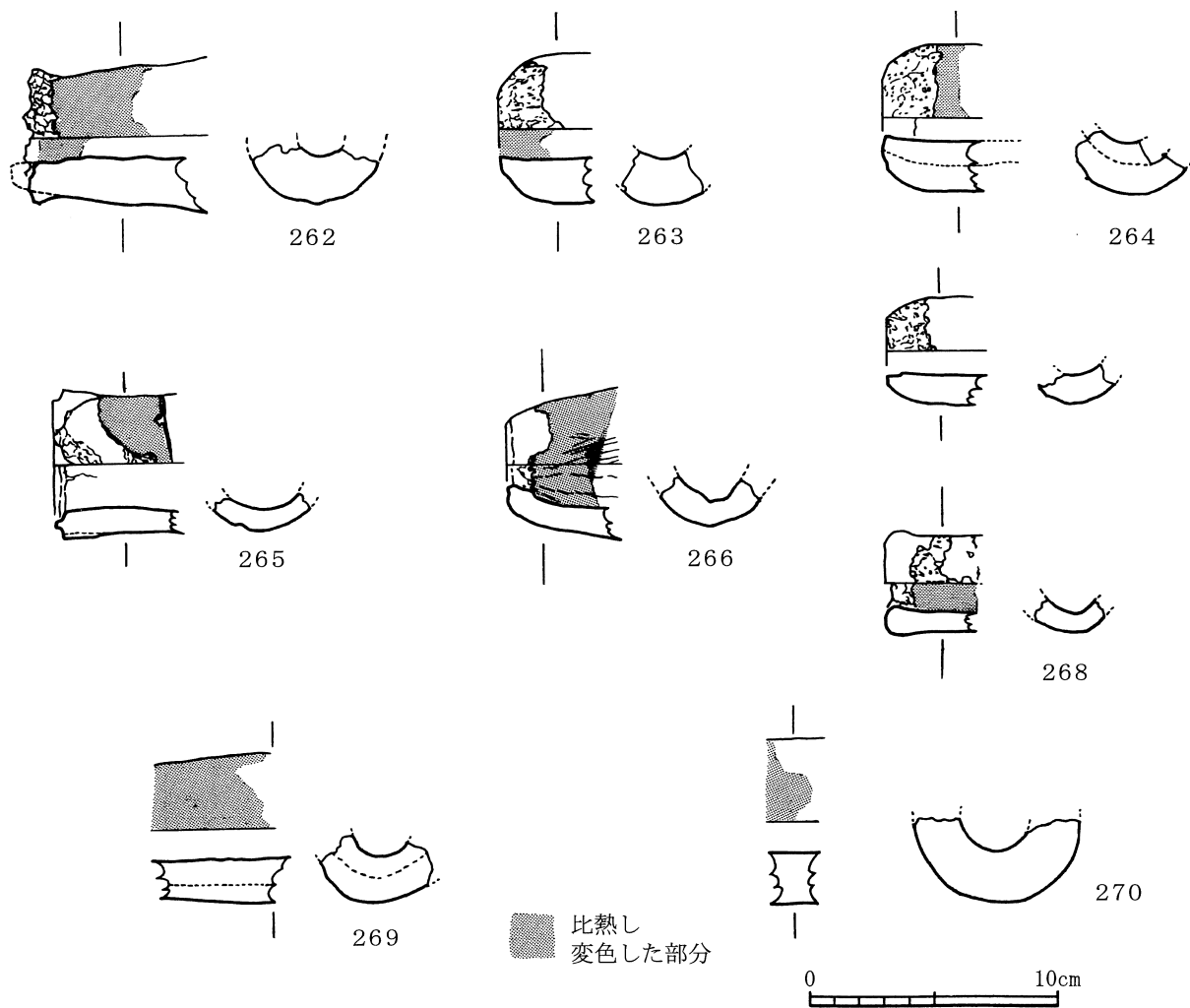
図版番号	調査区	器種	最大長(cm)	孔径(cm)	最大径(cm)	重量(g)	備考
251	1C	有孔土錘	2.8+α	0.5	1.4	5.8	下部欠損
252	1C	有孔土錘	2.6+α	0.5	1.1	2.6	下部欠損
253	1B	管状土錘	4.4	0.4	1.4	7.6	
254	2B	管状土錘	4.8	0.5	1.2	6.3	
255	6A	管状土錘	4.6	0.5	1.2	6.7	
256	2C	管状土錘	6	0.5	1.6	14.4	
257	2C	管状土錘	4.9	0.5	1.6	13.8	
258	3C	管状土錘	5.3	0.3	1.3	9.5	
259	5C	管状土錘	5.6	0.3	1.5	9.3	
260	2B	管状土錘	4.9+α	0.4	1.4	8	上部欠損
261	4B	管状土錘	4.9	0.5	1.3	8.3	

第2表 二目川遺跡Ⅱ区各遺構出土土錘計測表(2)

鍛冶関連遺物

鞆の羽口 (第64図)

262～268は先端部である。全体的に先端がややすぼまり気味で、調整は主に指による押さえ、ナデであるが、266の外表面はハケ目調整である。比較的平滑に仕上げられており、外表面には鉄分の付着や二次焼成による黒変が認められる。262～264の胴部の器壁は265～268のそれと比較すると分厚いが、262～264については、羽口を製作する際にまず精製された胎土で通風孔を形成し、次にきめの粗い胎土でそれを覆うように外面を形成する、いわゆる胴部が二重構造になっているため、これは耐熱性を高めるための構造であろう。262は茶褐色を呈し復元外径・復元内径は6.2cm・2.0cm、263は黄褐色で復元外径・復元内径は6.0cm・2.4cm、264は黄褐色復元外径・復元内径は5.8cm・1.8cm、265は茶褐色で復元外径・復元内径は5.6cm・4.0cm、266は明褐色で復元外径・復元内径は6.0cm・3.6cm、267は茶褐色で復元外径・復元内径は4.0cm・2.4cmである。268は鉄分の付着及び二次焼成による黒変のため色は不明であるが復元外径・復元内径は4.0cm・2.4cmを計る。269・270は胴部片で先端部と同様に二次焼成による黒変が認められる。調整も主に指による押さえ、ナデで比較的平滑に仕上げられる。いずれも黄褐色を呈し復元外径・復元内径は269が6.0cm・2.4cm、270が6.6cm・2.5cmである。これらの羽口は胎土に長石、角閃石、石英、赤色粒、白色粒や砂粒を含むが特に白色粒を多く含む。



第64図 二目川遺跡Ⅱ区包含層出土遺物実測図(9)

椀型滓(第65図)

271~279は椀型滓である。これらは、ボール状をなす鍛冶炉底で生じた滓で、多くの場合炉底に接した面とそうでない面が明確で、前者は炉底に接した面とそうではない面が明確で、前者は271、272、276、279のように炉底の形状を写したようにボール状になり、276のように時として炉壁粘土が付着する場合がある。271は椀型滓が二段になっているが、これは特別な形状ではなく何らかの理由で炉底に滓が残っており、その上に新たな滓が形成されたものである。

鉄製品(第65図)

280~290は鉄製品である。いずれも両端若しくは一方が欠損しており腐食が激しいため器種の判別が難しい。283や287のように器種が判別できるものも含まれている。

砥石(第66図)

291~296は長方形の砥石である。271~275は砥面が片面で、296は両面である。砥面はともに平滑に摩滅しているが296の砥面は片面がやや凹状を呈している。291~295については遺構から出土しているものもあり8世紀後半~9世紀前半のものとは比定出来るが276については時期が不明である。

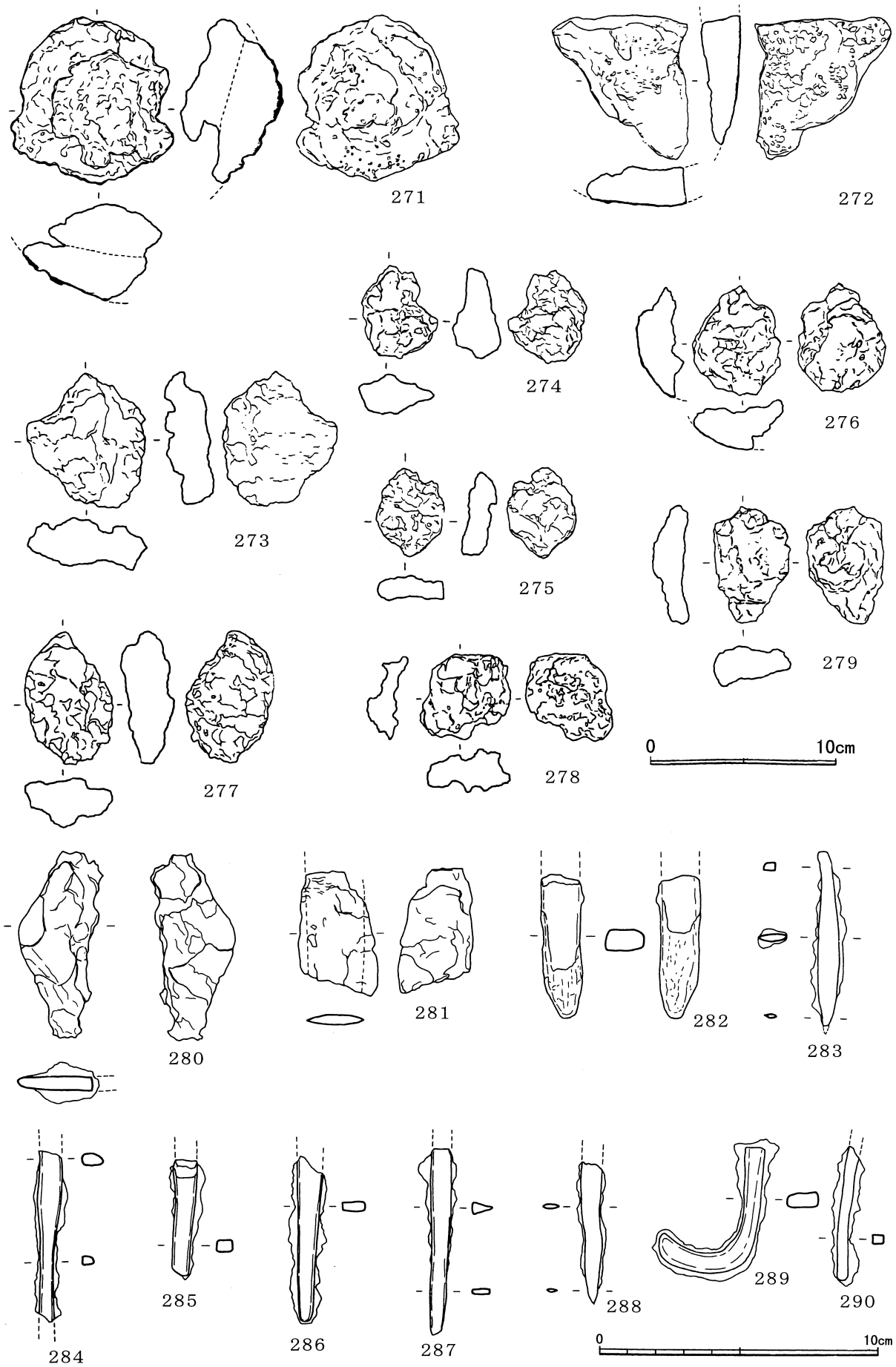
註 1 小田和利「製塩土器からみた律令集落の様相」『研究論集』九州歴史資料館 1996

2 坪根伸也『羽田遺跡』大分市営羽田住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 大分市教育委員会 1995

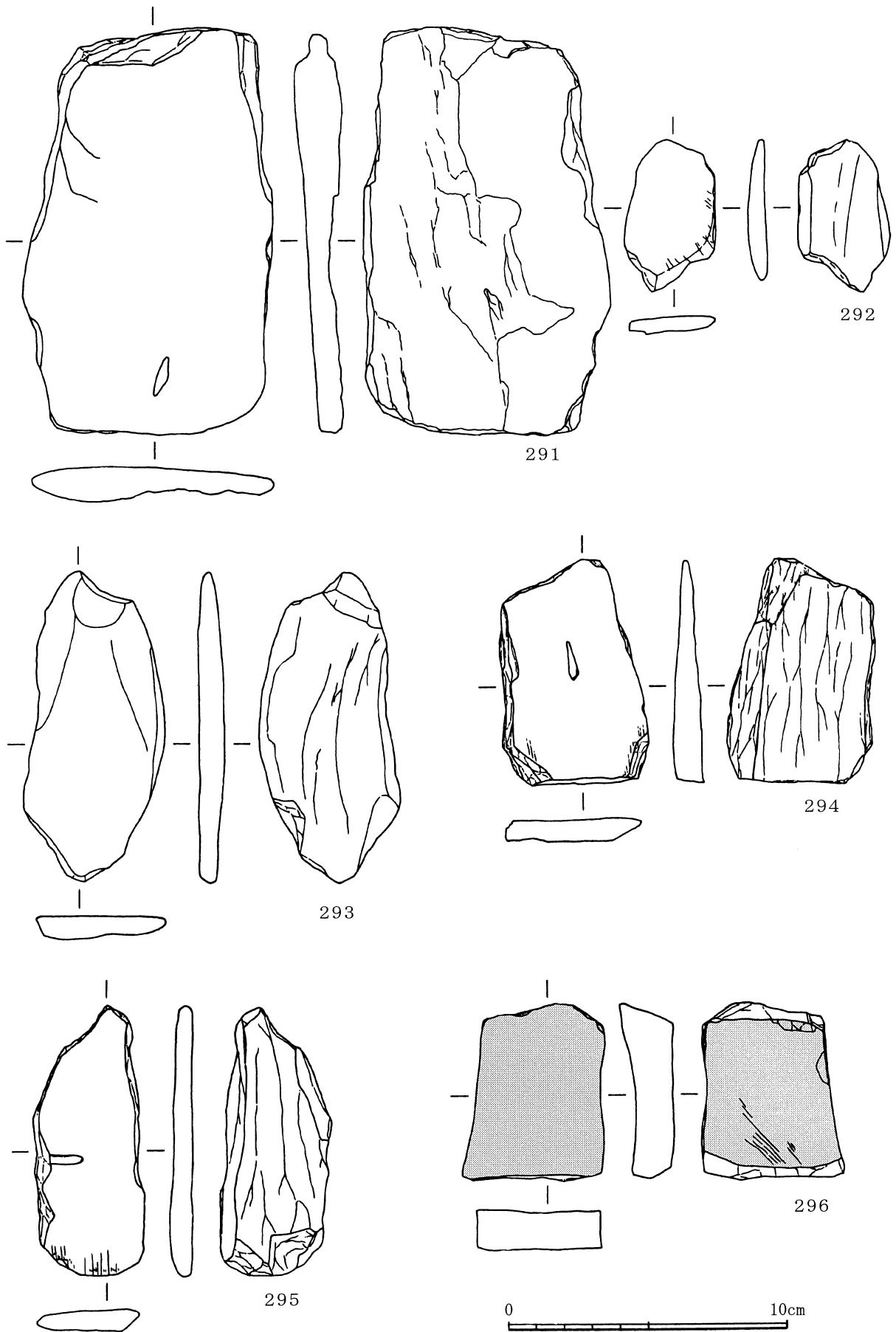
3 註2に同じ

4 /

5 横田賢次郎「福岡県内出土の硯について—分類と編年に関する試案—」『研究論集』九州歴史資料館 1983



第65图 二目川遺跡Ⅱ区包含層出土遺物実測図 (10)



第66図 二目川遺跡Ⅱ区包含層出土遺物実測図(11)

3、まとめ

二目川遺跡Ⅱ区の発掘成果としては溝状遺構、土坑群、掘立柱建物跡、ピットなどの各遺構や、各遺構及び包含層から多量に出土した古代の土器片を中心とする遺物である。今回の調査では遺跡の一部を調査したに過ぎないためその性格を明らかにすることは困難であるが、遺構や出土した土器に検討を加えながら可能な限り遺跡の性格に迫ってみたい。

(1) 遺構について

今回の発掘調査の結果、本遺跡で検出した遺構は調査区北側で検出した2条の溝状遺構、土坑群、掘立柱建物跡、ピット群、遺跡の中央東側で検出した重複する土坑群、調査区南側で検出した用途不明の土坑3基及びピット群である。掘立柱建物跡や溝状遺構を除くと重複した不定形の土坑が多く機能・用途については不明である。またピット群については建物としてのまとまりがなく樹痕の可能性もあり、本遺跡に直接関わるものではないと判断した。機能・用途不明の土坑群のなかにはSX1やSX6のように焼土を含むものも存在する。これらの土坑からはその性格を示すような遺物は検出しなかったものの、本遺跡から韃の羽口や鉄滓などが多数出土していることから、鍛冶炉や製鉄炉は検出していないものの、製鉄・鍛冶関連の遺構の可能性が考えられる。福岡県志摩町の八熊遺跡では韃の羽口とともに製鉄関連遺構として本遺跡で検出したような複数の重複した土坑群が報告されている(註1)。溝状遺構についてはSD2・SD3ともに平行するように掘られていることから、SD2・SD3の間が波板状の凸凹道は検出なかったものの道路として使用された可能性がある。

(2) 遺物について

本遺跡では包含層や各遺構から多量の遺物が出土した。各遺構出土の遺物はその出土状況からプライマリーな状態とは考えにくく、遺構に直接に伴うものではなく、遺構内に廃棄されたもの、もしくは周囲から流れ込んだものと判断し、ここでは包含層出土の遺物と一緒に取り扱うことにした。

出土遺物の大半は古代の遺物で土師質土器が中心である。須恵器は壺、甕、高坏などが出土しているが個体として識別できるものは少なく全体の13%に満たない。土師質土器をみると器種に偏りはなくバラエティーに富んでおり、蓋、皿、甑、甕、鉢など通常の集落遺跡で見られるような日常什器の他に坏「d」タイプや磨きが施された坏蓋などの都城系土器なども出土している。その他の遺物としては、土製品や韃の羽口、鉄滓類、移動式竈、製塩土器、円面硯や緑釉陶器などの特殊品が注目される。

さて、これらの遺物の時期であるが比較的時期の比定しやすい土器を中心に考えてみることにする。まず須恵器は、甕の器面調整を観察すると内面には同心円の当て具痕、外面は格子戸目上のタタキ後カキ目仕上げのものが大半を占めており、少数ではあるが内面に放射状の当て具痕、外面が平行タタキ痕の残るものもあることから、出土した須恵器はいずれも8世紀後半～9世紀前半に位置付けても良いと考える。次に土師器であるが、坏については低平な高台付のもの、いわゆる在地系の「坏a」タイプのものと同宰府系の坏「d」タイプの3種類が見られ、高台坏については高台が底部端に貼り付けているものが大半を占めている。また口径も13cmを超えるものが主体を占めること、坏「d」の器面調整を観察すると内・外面共に回転台を利用したヘラミガキを施すが、このヘラ磨きには通常にみられるミガキと器表面のミガキ間に粗面を残すものがみられること、これらの坏類の中には天長9年(832)年銘の墨書土器を搬出した国分寺西北調査区SK4土坑出土の土器群(註2)と類似した内容を有しているものもあることから8世紀後半～9世紀前半に位置付けても良いと考える。坏蓋はボタン状もしくは宝珠状の扁平なつまみが付き、口唇身受け部の返りは消滅しており、端部は丸くおさめるものと緩やかな下方に屈曲する、いわゆる「鳥の嘴状」を呈しているものがみられることから8世紀後半～9世紀初頭と考えるとよいであろう。皿は坏と同じくいずれも内・外面共に回転台を利用したヘラミガキを施すが、このヘラ磨きには通常にみられるミガキと器表面のミガキ間に粗面を残すものがみられることから8世紀後半～9世紀前半のものとする。甕については「企救型煮沸具」の系譜を引く甕と所謂「豊後大分型甕」とよばれる叩き痕を残すものやカキ目仕上げのもの、それに横方向のナデ調整の4種類に区別することができる。鉢についてもカキ目仕上げのものと横方向のナデ調整のもの2種類に分けられる。工具を使用しカキ目状に外面の器面調整をした土師質

土器の甕や鉢は本遺跡から出土した土器の中でもっとも特徴的な土器で、これらの土器は8世紀中ごろを初現とする内面にタタキ痕を有する「豊後大分型甕」（註3）と同様、明らかに須恵器の製作技法を真似たものであり須恵器の工人が製作した可能性が考えられ、松岡古窯群との関係が注目される。いずれにしてもこれらの甕や鉢は他の器種同様概ね8世紀後半～9世紀前半に位置付けてもよいであろう。甕についてはいずれも所謂「豊後大分型甕」とよばれる特徴的な形状を成す把手を有し基底部に返りをもつ甕である。器面調整は内面に叩き痕が残るものと基本的には横方向のナデ調整で叩き痕の形跡は認められないものとに区別される。以上土器について検討を加えてみたが、いずれの土器も8世紀後半～9世紀前半の範疇に収まることから、時期不明の土製品や特殊品などの遺物についても同様の時期と考えてよいであろう。

最後に、製塩土器について少し触れておきたい。本文の説明の中でも触れたが、本遺跡で出土した製塩土器は固形塩生産用の焼塩土器で円筒形を呈する肉厚丸底のいわゆる「六連式土器」と称されるものに類似している。この「六連式土器」と称される製塩土器は従来玄海灘から響灘及び周防灘にかけての海岸部と北部九州地域及び中国地方の内陸部に分布していると考えられており、海岸線から30kmほど奥まった内陸部の遺跡からも出土することから、それ自体が運搬容器とされている（註4）もので、県内では久末京徳遺跡で同様のものが出土している。しかしながら本遺跡出土の製塩土器の胎土を観察すると砂粒の他に石英や結晶片岩の含まれているものが多く、胎土でみる限り他地域からの搬入品というよりも在地、特に結晶片岩地帯を有する大野川以東の海岸部で製塩された可能性が強いと考える。現時点ではこの時期の製塩遺跡は県内ではまだ調査されていないため結論を出すには至らないが、今後の調査により「塩の道」が明らかになるであろう。

（3）まとめ

以上、二目川遺跡Ⅱ区で検出した遺構や遺物について検討を加えてきたが、その結果検出した遺構については出土した土器の様相からほぼ8世紀末～9世紀前半のものであると考えてよく、したがってこの遺跡は8世紀末～9世紀前半というきわめて限られた時期に存在し、少なくとも9世紀後半には廃絶・埋没したことが明らかとなった。また出土した遺物の中には、遺物の項で触れたように坏、蓋、皿、甕、鉢などの日常什器の他に鞆の羽口や鉄滓類、坏「d」タイプや磨きが施された坏蓋などの都城系土器や移動式竈、製塩土器、円面硯や緑釉陶器などの特殊品が含まれており、このことがこの遺跡の大きな特徴といえよう。では、きわめて限られた時期に存在し、特殊品を有する二目川遺跡とははどのような性格の遺跡だったのだろうか。

まず、本遺跡から出土した特殊遺物であるが、従来は官衙的遺物とされ、官衙に関連する遺跡から出土するとされてきた（註5）。しかしいわゆる律令期の集落遺跡や官衙遺跡の発掘が急増する中で官衙遺跡出土の遺物内容に匹敵する特殊品を有する集落遺跡が増えてきており、これらの集落は豊富な特殊品を有することから高い生産性を有する一般集落よりは高いランクに位置付けられること（註6）、また、律令期の集落遺跡の中で鍛冶炉・鑄造遺構を有し金属生産に関わる集落遺跡は製塩土器・施釉陶器・越州窯系青磁などの特殊品を有する例が多々見られることなどが指摘されている（註7）。本遺跡をみると、大型の掘建柱建物を有しており、また、特殊品、鞆の羽口や鉄滓もかなり出土していることから、先の指摘でいくと、本遺跡は官衙関連かそれに順ずる遺跡で、特に金属生産に関わる生産遺跡の可能性が考えられる。しかし、二目川遺跡Ⅱ区の全貌が明らかになっていない現段階では、同時期の大型の倉や並倉を有する大分市地藏原遺跡（註8）や宇佐市尾畑遺跡（註9）、官衙的な建物郡の配置の安岐町久末京得遺跡（註10）との比較検討ができないため、官衙的な遺跡か否か断定できない。しかしながら特殊品を有すということは群の役人、里（郷）長などの縦系列に組み込まれていた人物の存在が必要であり、そういった意味では二目川遺跡Ⅱ区は少なくとも律令体制における地域支配の最前線に位置する在地首長クラスに関わる、一般集落よりは上位に位置付けられる生産性を持った遺跡と言っても過言ではないであろう。

ところで、この二目川遺跡Ⅱ区の位置する鶴崎台地上には地藏原遺跡をはじめ古代の道路状遺構を検出した猪野新土井遺跡や土師器窯跡を検出したことから様々な土師器類を製作した一大工房跡であると考えられている井ノ久保遺跡（註11）など古代の遺跡の存在が知られている。本遺跡が位置する二目川地区から横尾地区にかけても祭祀遺跡である一方平Ⅲ遺跡、牧ノ内Ⅰ遺跡、牧ノ内Ⅱ遺跡（註12）、蜜柑園造成の際にすでに破壊されてい

たが、集落的遺物と変わらぬ出土遺物から何らかの役割を持った集落が展開していたと考えられている牧ノ内遺跡、論出遺跡、九池遺跡（註13）や前述の井ノ久保遺跡などが点在している。平成11年度に大分市教委は須恵器窯跡である松岡古窯群を調査しているが（註14）、この遺跡も横尾地区の南に位置しており、これらの遺跡はいずれもほぼ8世紀後半～9世紀前半というきわめて限られた時期の遺跡である。この8世紀後半～9世紀前半という時代については『類聚三代格』所収の延喜15（796）年太政官符に天平18（746）年太政官官符など一連の官符の記事があるが、それによると「このころ官人・百姓・商旅の徒が、豊前国草野津や豊後国坂門津・国崎津などから調綿などの官物を直接難波港など運びながら一方ではしいままに私物の交易を行っていた」とある（註15）。また、大宰府はその禁庄を政府に求めたが「なお奸徒多し」というありさまだったという（註16）。さらに政府は延暦15（796）にはこうした行為を容認するに至った（註17）という。まさに律令体制の矛盾と動揺が深刻するなかで地方支配の最前線に位置する在地首長層と大宰府体制との確執が深まった時代であった。そのような情勢の中、前述の地蔵原遺跡は、郡衙あるいは郡衙に準ずる規模を有していることから、官符に語られた「官人・百姓・商旅の徒」の動きにかかわる拠点集落・施設であった可能性が指摘されている（註18）。地蔵原遺跡が拠点集落・施設であるとすれば二目川遺跡Ⅱ区をはじめ横尾地区周辺に展開する遺跡群は地蔵原遺跡の後背地にあたることから、国衙及び郡衙との関係を問うよりもまずは地蔵原遺跡を中心とした在地首長層の地域の支配体制の中でその位置付けを考えていく必要があるのではないだろうか。また高い生産性を有する遺跡が集中していることから、この地域に何らかの重要な役割を担った集団が存在していた可能性も考えられる。「私物の交易」に関わったのであろうか。いずれにしても今後は、この鶴崎台地上に展開する遺跡群や台地上で確認・推定されている古代の「道」（註19）、「郷」の問題などを総合的に判断していくことが、律令体制における地域支配の様相や鶴崎台地上の歴史の解明につながっていくものとする。今後の調査及び研究に期待するところである。

- 註 1 井上裕弘『八熊製鉄遺跡 大牟田遺跡』志摩町文化財調査報告書第2集 志摩町教育委員会 1982
 2 坪根伸也『国指定遺跡 豊後国分寺跡』豊後国分寺北西地区発掘調査報告書 大分市教育委員会 1993
 3 坪根伸也『羽田遺跡』大分市営羽田住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 大分市教育委員会 1995
 4 小田和利「製塩土器からみた律令集落の様相」『研究論集』九州歴史資料館 1996
 5 註4に同じ
 6 ♪
 7 ♪
 8 真野和夫「地蔵原遺跡」『大分県史古代篇Ⅱ』1984
 9 渋谷忠章、小林昭彦『宇佐バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ』大分県教育委員会1989
 10 後藤一重『久末京徳遺跡』安岐町教育委員会1991
 11 塔鼻光司「井ノ久保遺跡」『大分県埋蔵文化財年報』大分県教育委員会 1996
 12 「一方平Ⅲ遺跡」「牧ノ内Ⅰ遺跡」「牧ノ内Ⅱ遺跡」『スポーツ公園内遺跡群発掘調査報告書』大分県教育委員会1999
 13 「牧ノ内遺跡」「論出遺跡」「九池遺跡」「スポーツ公園内遺跡群発掘調査報告書』大分県教育委員会1999
 14 『大分市埋蔵文化財調査概報』大分市教育委員会
 15 豊田寛三 他『大分県の歴史』山川出版社1997
 16 註15に同じ
 17 ♪
 18 ♪
 19 田中裕介「大分平野の古代道路遺構と海部路の復元」『大分県地方史』第173号 他

付 篇

二目川遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査

(株)九州テクノリサーチ・TACセンター
大澤正己・鈴木瑞穂

1 いきさつ

平成11年に発掘調査が実施され、Ⅱ区からは8世紀後半から9世紀初頭に比定される溝状遺構3条、竪穴住居跡1基、掘立柱建物跡1棟、土坑12基などが検出された。それに伴い羽口、椀形鍛冶滓等の鍛冶関連遺物が出土したため、当遺跡での生産の実態を検討する目的から金属学的調査を行う運びとなった。

2 調査方法

2-1 供試材

Table.1に示す。鍛冶関連遺物計9点の調査を行なった。

2-2 調査項目

(1) 肉眼観察

遺物の肉眼観察所見。これらの所見をもとに分析試料採取位置を決定する。

(2) 顕微鏡組織

切り出した試料をバークライト樹脂に埋込み、エメリー研磨紙の#150、#240、#320、#600、#1000と順を追って研磨し、最後は被研磨面をダイヤモンド粒子の3 μ と1 μ で仕上げ、光学顕微鏡観察を行った。なお、金属鉄の炭化物は5%ナイトル（硝酸アルコール液）で、腐食（Etching）している。

(3) ビッカース断面硬度

鉄滓の鉱物組成と、金属鉄の組織同定を目的として、ビッカース断面硬度計（Vickers Hardness Tester）を用いて硬さの測定を行った。試験は鏡面研磨した試料に136°の頂角をもったダイヤモンドを押し込み、その時に生じた窪みの面積をもって、その荷重を除した商を硬度値としている。試料は顕微鏡用を併用した。

(4) CMA（Computer Aided X-Ray Micro Analyzer）調査

EPMA（Electron Probe Micro Analyzer）にコンピューターを内蔵させた新鋭分析機器である。旧式装置は別名X線マイクロアナライザーとも呼ばれる。分析の原理は、真空中で試料面（顕微鏡試料併用）に電子線を照射し、発生する特性X線を分光後に画像化し、定性的な結果を得る。更に標準試料とX線強度との対比から元素定量値をコンピューター処理してデータ解析を行う方法である。化学分析を行えない微量試料や鉱物組織の微小域の組織同定が可能である。

(5) 化学組成分析

供試材の分析は次の方法で実施した。

全鉄分（Total Fe）、金属鉄（Metallic Fe）、酸化第一鉄（FeO）：容量法。

炭素（C）、硫黄（S）、：燃焼容量法、燃焼赤外吸収法

二酸化硅素（SiO₂）、酸化アルミニウム（Al₂O₃）、酸化カルシウム（CaO）、酸化マグネシウム（MgO）、酸化カリウム（K₂O）、酸化ナトリウム（Na₂O）、酸化マンガン（MnO）、二酸化チタン（TiO₂）、酸化クロム（Cr₂O₃）、五酸化燐（P₂O₅）、バナジウム（V）、銅（Cu）、：ICP（Inductively Coupled Plasma Emis

sion Spectrometer) 法 : 誘導結合プラズマ発光分光分析。

(6) 耐火度

耐火度の加熱に耐える温度とは、溶融現象が進行の途上で軟化変形を起こす状態の温度で表示することを定め、これを耐火度と呼んでいる。試験には三角コーン、つまりゼーゲルコーンが溶倒する温度と比較する方法を用いている。

3 調査結果

SIT-1 椀形鍛冶滓

- ① 肉眼観察：完形の二段椀形鍛冶滓である。上段側がやや小型で、上面表層は羽口先端溶融物である暗黒色ガラス質滓が部分的に認められる。上下面ともに長さ1cm程の木炭痕が密に認められ、下面には一部淡褐色の鍛冶炉床粘土が付着している。
- ② 顕微鏡組織：Photo.1に示す。①～⑦に滓の鉱物相を示す。鉱物組成は白色粒状結晶ヴスタイト (Wustite : FeO)、淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライト (Fayalite : $2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$)、暗黒色ガラス質滓が晶出する。なおヴスタイト粒内には微小析出物が認められる。⑧⑨は滓中のごく小さな鉄部である。錆化鉄となっているが、かすかにフェライト基地に少量のパーライトが析出する。亜共析組織の痕跡である。0.2%前後の炭素含有量が想定される。鉄滓は鉄素材の繰返し折り曲げ鍛接の高温作業で排出された鍛錬鍛冶滓の晶癖である。また、鉄粒は処理鉄の一部が落下したものと推定される。
- ③ ビッカース断面硬度：Photo.1①に白色粒状結晶の硬度測定の前痕を示す。硬度値は451Hvであった。ヴスタイトの文献硬度値450～500 Hvの範囲内であり(注1)、ヴスタイトに同定される。
- ④ 化学組成分析：Table.2に示す。全鉄分 (Total Fe) 43.46%に対して、金属鉄 (Metallic Fe) 0.04%、酸化第1鉄 (FeO) 35.08%、酸化第2鉄 (Fe_2O_3) 22.95%の割合であった。ガラス質成分 ($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$) 36.41%で、このうち塩基性成分 ($\text{CaO} + \text{MgO}$) は高めの3.87%を含む。砂鉄特有成分の二酸化チタン (TiO_2) 0.48%、バナジウム (V) 0.01%、酸化マンガン (MnO) 0.13%、銅 (Cu) 0.008%であった。脈石成分 (TiO_2 、V、 MnO) の低減した値を示し、鍛錬鍛冶滓に分類される。鉄素材は砂鉄系であろう。

SIT-2 椀形鍛冶滓

- ① 肉眼観察：偏平な椀形鍛冶滓片である。側面2面は破面。上面表層には部分的に暗黒色ガラス質滓が付着する。また、滓の地の色調は黒灰色であるが、部分的に紫紅色を呈しており、酸化状態にあったことが窺える。下面は一面に長さ1cm程の木炭痕が密に認められる。
- ② 顕微鏡組織：Photo.2に示す。①は滓中の鉄部で、錆化しているがフェライト基地に少量のパーライト析出の痕跡を残す。組織痕跡からは含有炭素量0.15%程度の極軟鋼であったと推定される。②～⑨は滓部の鉱物相で、淡褐色針状結晶はヘーシナイト (Hercynite : $\text{FeO}\cdot\text{Al}_2\text{O}_3$)、白色不定形結晶はマグネタイト (Magnetite : Fe_3O_4)、白色粒状結晶はヴスタイト (Wustite : FeO)、淡灰色木ずれ状結晶はファイヤライト (Fayalite : $2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$) なので、これらが基地の暗黒色ガラス質滓中に晶出する。⑥⑦のヴスタイト粒内にもヘーシナイトの析出が認められる。これも鍛錬鍛冶滓の晶癖である。局所的なヘーシナイトの晶出は高温操業による可能性が考えられる。
- ③ ビッカース断面硬度：Photo.2⑧⑨に硬度測定の前痕を示す。⑧は白色不定形結晶で、硬度値は637Hvであった。マグネタイトの文献硬度値500～600 Hvの上限を上回る数値となったが、測定時の亀裂などによる影響が考えられる。マグネタイトといえよう。⑨は白色粒状結晶で硬度値は461Hvであった。ヴスタイトに同定される。
- ④ 化学組成分析：Table.2に示す。鉄分高く、脈石成分の低い成分系であった。全鉄分 (Total Fe) 52.68%

に対して、金属鉄 (Metallic Fe) 0.09%、酸化第1鉄 (FeO) 49.55%、酸化第2鉄 (Fe₂O₃) 20.12% の割合であった。ガラス質成分 (SiO₂+ Al₂O₃+ CaO + MgO + K₂O + Na₂O) は26.77% で、このうちに塩基性成分 (CaO + MgO) は高めの3.47% を含む。砂鉄特有成分の二酸化チタン (TiO₂) 0.43%、バナジウム (V) 0.01% で、また酸化マンガン (MnO) 0.11%、銅は0.026% とやや高値であるが砂鉄系鉄素材の上限であろう。脈石成分が低値で、鍛錬鍛冶滓に分類される。なお、銅 (Cu) は鉄へ移行する元素であって、酸化鉄へ含有されているのであろうか。

SIT-3 梘形鍛冶滓

- ① 肉眼観察：小型ではほぼ完形の梘形鍛冶滓である。上下面とも細かい木炭痕が密に認められる。上下面ともに径1~2mmの気孔が散在し、ややガスが抜けきっていない軽い質感の梘形滓である。
- ② 顕微鏡組織：Photo.3①~⑤に示す。鉱物組成は白色粒状結晶ヴスタイト (Wustite : FeO) と淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライト (Fayalite : 2FeO·SiO₂) が基地の暗黒色ガラス質滓中に晶出する。ヴスタイト粒内には微小析出物が認められる。ヘーシナイト (Hercynite : FeO·Al₂O₃) であろう。④は梘形滓底部でファイヤライト (Fayalite : 2FeO·SiO₂) 主体の鉱物相である。これも鍛錬鍛冶滓の晶癖である。
- ③ ビッカース断面硬度：Photo.3⑤に白色粒状結晶の硬度測定の前痕を示す。硬度値は523Hvであった。ヴスタイトの文献硬度値の上限を僅かに上回る値であるが、測定時の亀裂による影響が考えられる。ヴスタイトといえよう。
- ④ 化学組成分析：Table.2に示す。全鉄分 (Total Fe) 45.54% に対して、金属鉄 (Metallic Fe) 0.03%、酸化第1鉄 (FeO) 51.01%、酸化第2鉄 (Fe₂O₃) 8.38% の割合であった。ガラス質成分 (SiO₂+ Al₂O₃+ CaO + MgO + K₂O + Na₂O) 37.51% で、このうちに塩基性成分 (CaO + MgO) 3.92% を含む。砂鉄特有成分の二酸化チタン (TiO₂) 0.59%、バナジウム (V) 0.01%、また酸化マンガン (MnO) 0.11%、銅 (Cu) 0.005% であった。脈石成分が低値で、鍛錬鍛冶滓に分類される。

SIT-4 梘形鍛冶滓

- ① 肉眼観察：小型ではほぼ完形の梘形鍛冶滓である。上面には細かい木炭痕による凹凸が認められる。下面には広い範囲で淡褐色の鍛冶炉床粘土が付着している。また、錆化による茶褐色の変色部分が端部に数箇所認められる。
- ② 顕微鏡組織：Photo.3⑥~⑧に示す。鉱物組成は白色粒状結晶ヴスタイト (Wustite : FeO) が基地の暗黒色ガラス質滓中に、凝集気味に晶出する。鍛錬鍛冶滓の晶癖である。
- ③ ビッカース断面硬度：Photo.3⑥に白色粒状結晶の硬度測定の前痕を示す。硬度値は410Hvであった。ヴスタイトの文献硬度値の下限をやや下回る値となったが、測定時の亀裂や、風化の影響が考えられる。ヴスタイトといえよう。

SIT-5 含鉄梘形鍛冶滓

- ① 肉眼観察：小型ではほぼ完形の梘形鍛冶滓である。滓の地は光沢のある黒灰色。上面は平坦気味で、下面には細かい木炭痕が散在する。滓表面には錆化による放射割れが認められる。金属探知器のL (●) : 弱で反応があり、まとまった含鉄部を有する。
- ② 顕微鏡組織：Photo.4に示す。①は表皮の滓部で白色粒状結晶ヴスタイト (Wustite : FeO) が基地の暗黒色ガラス質滓中に晶出する。鍛冶系の鉄塊といえる。生成された鉄塊が成分調整の精錬鍛冶を経ているのであろう。②~⑨は金属鉄を5%ナイトルで腐食 (Etching) して現れた組織である。②③はほぼ全面パーライトの共析組織 (C : 0.77%) であった。④~⑦はパーライト素地に針状セメントライトが晶出する過共析組織 (C : 0.77%以上) であった。高炭素鋼の処理である。

- ③ ビッカース断面硬度：Photo.4⑧⑨に金属鉄組織の硬度測定の前痕を示す。⑧はパーライト部分で硬度値は299Hv、⑨はパーライト素地に針状セメンタイトが晶出する部分で295 Hvであった。組織に対応した値である。

SIT-6 含鉄椀形鍛冶滓

- ① 肉眼観察：小型ではほぼ完形の椀形鍛冶滓である。上面は平坦気味で、下面側は緩やかに彎曲する。付着酸化土砂のため地の観察が困難であるが、表面は黒灰色の滓で、裏面端部に銹化による放射割れが認められる。金属探知器のL (●) で反応があり、まとまった含鉄部を有すると考えられる。
- ② 顕微鏡組織：Photo.5に示す。①②は表皮の滓部で白色粒状結晶ヴスタイト (Wustite : FeO) と、淡灰色盤状結晶ファイヤライト (Fayalite : 2FeO·SiO₂) が基地の暗黒色ガラス質滓中に晶出する。なお、ヴスタイト粒内には微小析出物 (ヘーシナイト) が認められる。精錬鍛冶を経てきた鉄塊の晶癖である。③～⑧は鉄部を5%ナイトルで腐食して現れた組織である。パーライト基地に針状フェライトが析出する亜共析組織から、ほぼ全面パーライトの共析組織まで認められる。高炭素鋼が得られている。
- ③ ビッカース断面硬度：Photo.5⑦⑧に金属鉄組織の硬度測定の前痕を示す。⑦はパーライト基地に針状フェライトが析出する個所で、硬度値は129Hvであった。⑧は全面パーライト組織の個所で、硬度値は250Hvであった。それぞれ組織に見合った値といえる。

SIT-7 鉄片

- ① 肉眼観察：3mm程度の薄板状の鉄片である。銹化による剥落が進んでいる。層状の剥離をおこしているものが認められ、鍛造品と考えられる。金属探知器でM (◎) : 中の反応がある小片を供試材として用いる。
- ② 顕微鏡組織：Photo.6に示す。①は鍛打により展伸した形状の非金属介在物である。ウルボスピネルであるが詳細な鉱物相についてはCMA調査の項で述べる。②～⑨は金属鉄を5%ナイトルで腐食して現れた組織を示す。数条の鍛接線が認められ、折り返し曲げ鍛接が施されたものと推定される。組織はフェライト素地にパーライトが析出する亜共析組織で、③④をみると表層片側が上方へ向って漸次高炭素域となる。鍛打成形後材質強化を目論んで浸炭処理が行われた痕跡である。
- ③ ビッカース断面硬度：Photo.6⑦⑧に金属鉄組織の硬度測定の前痕を示す。⑦は表層側の浸炭組織で硬度値は312Hv、⑧はフェライトに少量のパーライトを析出する亜共析組織で、硬度値は229Hvであった。硬度値は炭素含有量に比例して硬化している。当鉄片は工具の類の破片であろう。
- ④ CMA調査：Photo.8に鉄中非金属介在物の特性X線像と定量分析値を示す。COMP (反射電子像) 中に6の番号をつけた茶褐色多角形結晶は鉄 (Fe)、チタン (Ti)、白色輝点が集中し、定量分析値は60.6% FeO - 31.5% TiO₂ - 1.5% V₂O₃であった。ウルボスピネル (Ulvo spinel : 2FeO·TiO₂) に同定される。また、7の番号をつけた淡灰色結晶の定量分析値は49.7% FeO - 34.5% SiO₂ - 16.4% MgOであった。ファイヤライト・マグネシアン (Fayalite, Magnesian : (Fe, Mg) 2SiO₄) に同定される。

鉄中非金属介在物から砂鉄特有成分のチタン (Ti) 系の結晶が確認されたことから、当試料は砂鉄を原料とする鉄素材を用いた鍛造品であることが明らかになった。椀形鍛冶滓と有機的な繋がりをもつ鉄片とみてよからう。

SIT-8 鉄片

- ① 肉眼観察：平面は円形で約4mm厚みの板状の鉄片である。銹化による剥落が進んでいる。放射状の亀裂が認められ、鑄造品の破片である可能性が高い。金属探知器のL (●) : 弱で反応があり、金属鉄の遺存は良好である。
- ② 顕微鏡組織：Photo.7①～⑤に示す。①は鉄中非金属介在物である。硫化物組成であり後のCMA調査の

項で詳述する。②～⑤金属鉄を5%ナイトルで腐食して現れた組織を示す。銑鉄であり、白色板状はセメンタイトで地はオーステナイトから変化したパーライト、蜂の巣状を呈する部分はセメンタイトとオーステナイトの共晶のレデブライトである。これに塊状黒鉛の析出が認められるところから斑銑鉄組織といえる。

- ③ ビッカース断面硬度：Photo.7③～⑤に金属鉄組織の硬度測定の影響を示す。③は塊状黒鉛の析出個所で、硬度値は軟質の145Hvであった。④は板状セメンタイト部分で硬質の914Hv、⑤はレデブライト部分で硬度値は中間的の618Hvであった。それぞれ組織に見合った値である。
- ④ CMA調査：Photo.9に鉄中非金属介在物の特性X線像と定量分析値を示す。COMP（反射電子像）に4の番号をつけた微小黄褐色異物は鉄（Fe）、マンガン（Mn）、硫黄（S）に白色輝点が集中し、定量分析値は47.1% FeO - 30.9% MnO - 34.9% Sであった。硫化鉄（FeS）及び硫化マンガン（MnS）の混合組成といえる。5の番号をつけた個所では鉄（Fe）、燐（P）に白色輝点が集中し、定量分析値は137.2% FeO - 5.0% P₂O₅であった。酸化物定量のため鉄（Fe）は100%を越える値となっているが、Fe - Fe₃C - Fe₃P 三元系共晶のステダイト（Steadite）に同定される。銑鉄特有の介在物である。

SIT-9 羽口

- ① 肉眼観察：鍛冶羽口の体部破片である。胎土の地は橙色で、外面側は被熱により淡黄褐色に変色している。胎土は緻密な粘土質で、砂粒・長石粒・雲母などが少量認められる。
- ② 顕微鏡組織：Photo.7⑥～⑧に示す。羽口胎土部分で、外層部は僅かに熱影響を受ける。鱗片状の粘土鉱物（Cerisite）中に角張った形状の砂粒が多数混和されている。また、僅かにみられる白色粒子は混入砂鉄粒子である。
- ③ 化学組成分析：Table.2に示す。強熱減量（Ig loss）9.04%とあまり熱影響を受けていない個所での分析である。鉄分（Fe₂O₃）1.63%と低く軟化性には良好であるが、酸化アルミニウム（Al₂O₃）18.70%と低めで耐火性にはやや不利である。また、塩基性成分（CaO + MgO）も1.53%は高め傾向であった。砂鉄特有成分の二酸化チタン（TiO₂）1.38%、バナジウム（V）0.02%と多くて、混入砂鉄粒子の影響と考えられる。成分的には耐火性は高くは望めない。
- ④ 耐火度：胎土をゼーゲルコーンという三角錐の試験片に作り、1分間当り10℃の速度で1000℃まで温度上昇させ、その後は4℃に昇温速度をおとし、試験片が荷重なしに自重だけで軟化し崩れる温度が1380℃であった。古代の鍛冶羽口としては一般的な耐火性といえる。

3 調査結果

- 〈1〉出土椀形鍛冶滓（SIT-1~4）はいずれも鍛打工程で派生した鍛練鍛冶滓に分類される。不純物の少ない高品位の鍛冶原料鉄が搬入され、主に鉄器製作工程が行われていたと推定される。この時の鉄素材は砂鉄系とみてよからう。
- 〈2〉含鉄椀形鍛冶滓（SIT-5・6）はどちらもまとまった鉄部を有する。これらの鉄部は処理中に鍛冶炉内に落下して回収されなかった鍛冶原料鉄である可能性が高い。なお、鉄中非金属介在物など製錬時の不純物の痕跡が観察面では認められず、前述した高品位の鍛冶原料鉄の搬入との見解と符合する。
- 〈3〉鉄片（SIT-7）は折返し曲げ鍛接と浸炭処理の痕跡が認められる。また、鉄中非金属介在物中にウルボスピネル（Ulvospinel：2FeO・TiO₂）の晶出が確認され、砂鉄を原料とする鉄素材を用いていることが明らかになった。介在物の特徴は、前述してきた不純物の少ない鍛冶原料鉄を用いた鉄器製作との当遺跡の特徴とは一致している。当遺跡で製作された鍛造品である可能性が指摘できよう。また、鉄片（SIT-8）は斑銑鉄片であった。椀形鍛冶滓の脈石成分（TiO₂、V、MnO）の低い化学組成とあわせて、これらの小鉄片は鍛冶原料鉄として充当された可能性も考えられる。これも状況的には砂鉄

系の原料の可能性が考えられる。

〈4〉羽口 (SIT-9) の耐火度は1380℃であった。該期の鍛冶羽口としては充分とはいえないまでも耐火性で問題を起すものではなからう。

(注)

(1) 日刊工業新聞社『焼結鉍組織写真および識別法』 1968 ヴスタイトは450~500Hv、マグネタイト500~600 Hv、ファイヤライトは600~700Hの範囲が提示されている。

Table.1 供試材の履歴と調査項目

符号	遺跡名	遺物名称	推定年代	計測値		調査項目							備考		
				大きさ(mm)	重量(g)	メタル度	マクロ組織	顕微鏡組織	ヒッカース断面硬度	X線回折	QMA	化学分析		耐火度	加印-
SIT-1	二目川	楕形鍛冶滓(大)	9c代	85×85×45	285	なし		○				○			
SIT-2	二目川	楕形鍛冶滓(中)	9c代	57×60×20	99	なし		○				○			
SIT-3	二目川	楕形鍛冶滓(小)	9c代	55×41×15	40	なし		○				○			
SIT-4	二目川	楕形鍛冶滓(小)	9c代	55×44×17	53	H(O)		○							
SIT-5	二目川	含鉄楕形鍛冶滓	9c代	45×39×21	48	L(●)		○							
SIT-6	二目川	含鉄楕形鍛冶滓	9c代	36×28×13	34	L(●)		○							
SIT-7	二目川	鉄片	9c代	43×28×3	14	M(◎)		○				○			
SIT-8	二目川	鉄片	9c代	30×29×4	21	L(●)		○				○			
SIT-9	二目川	羽口	9c代	68×27×22	60	なし		○				○		○	

Table.2 供試材の組成

符号	遺跡名	遺物名称	組成																						
			全鉄分 (Total Fe)	金属鉄 (Metallic Fe)	酸化第1鉄 (FeO)	酸化第2鉄 (Fe ₂ O ₃)	二酸化ケイ素 (SiO ₂)	酸化アルミニウム (Al ₂ O ₃)	酸化カルシウム (CaO)	酸化マグネシウム (MgO)	酸化ナトリウム (Na ₂ O)	酸化マンガン (MnO)	二酸化チタン (TiO ₂)	酸化クロム (Cr ₂ O ₃)	硫黄 (S)	五酸化リン (P ₂ O ₅)	ハナタリウム (V)	銅 (Cu)	耐火度	遷移成分 Total Fe	遷移成分 Total Fe	TiO ₂ Total Fe	注		
SIT-1	二目川遺跡	楕形鍛冶滓	43.46	0.04	35.08	22.95	24.31	6.00	2.80	1.07	1.78	0.45	0.13	0.48	0.04	0.06	0.56	0.30	0.01	0.008	36.41	0.838	0.011		
SIT-2	二目川遺跡	楕形鍛冶滓	52.68	0.09	49.55	20.12	17.28	4.81	2.64	0.83	0.89	0.32	0.11	0.43	0.01	0.01	0.44	0.15	0.01	0.026	26.77	0.508	0.008		
SIT-3	二目川遺跡	楕形鍛冶滓	45.54	0.03	51.01	8.38	25.37	6.48	3.00	0.92	1.31	0.43	0.11	0.59	0.02	0.04	0.51	0.15	0.01	0.005	37.51	0.824	0.013		
SIT-9	二目川遺跡	羽口	1.93	0.01	1.00	1.63	62.61	18.70	1.05	0.48	1.32	1.41	0.03	1.38	0.03	0.06	0.08	#9.04	0.02	0.002	1380	85.57	44.337	0.715	

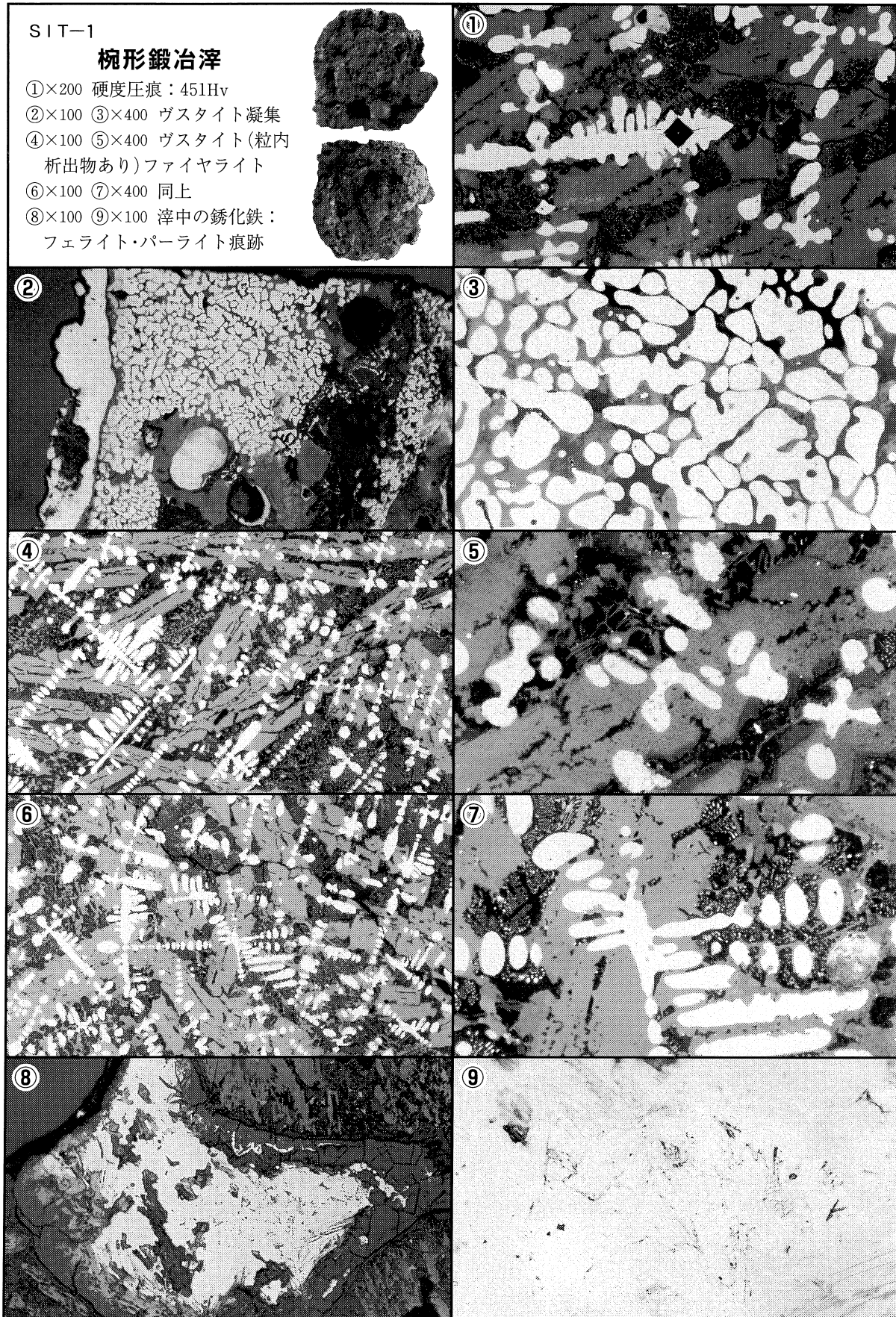


Photo.1 椀形鍛冶滓の顕微鏡組織

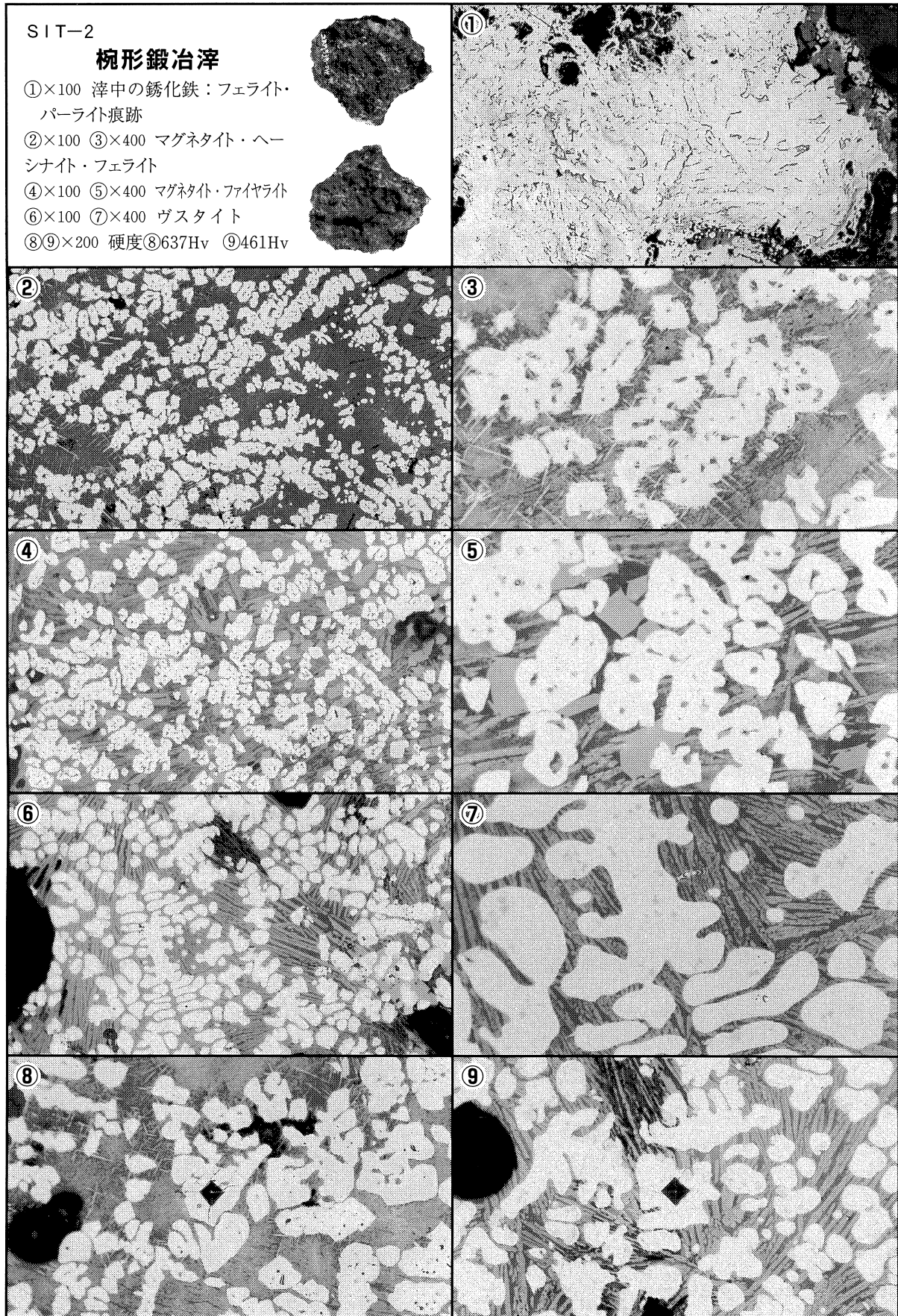


Photo.2 梘形鍛冶滓の顕微鏡組織

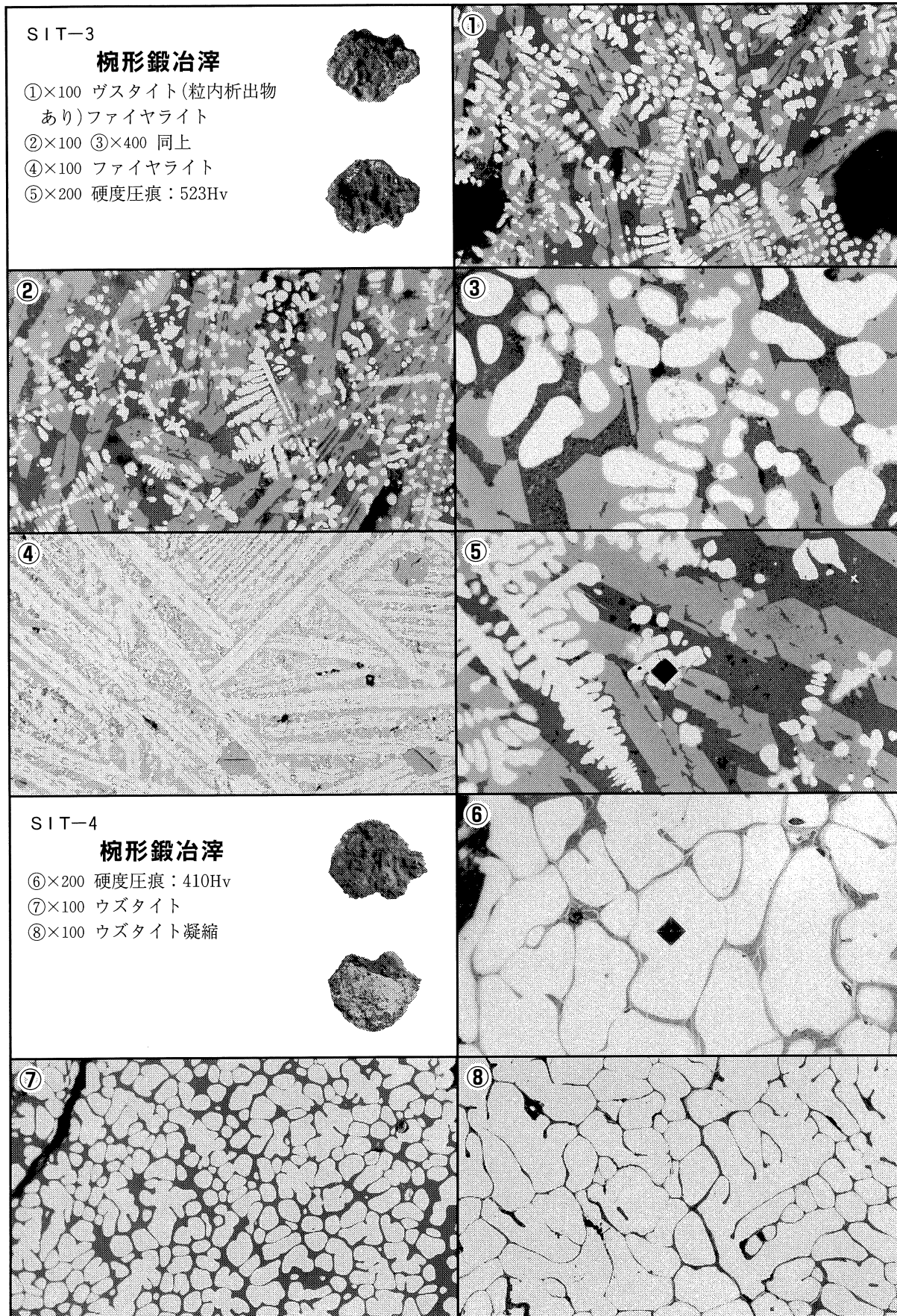


Photo.3 椀形鍛冶滓の顕微鏡組織

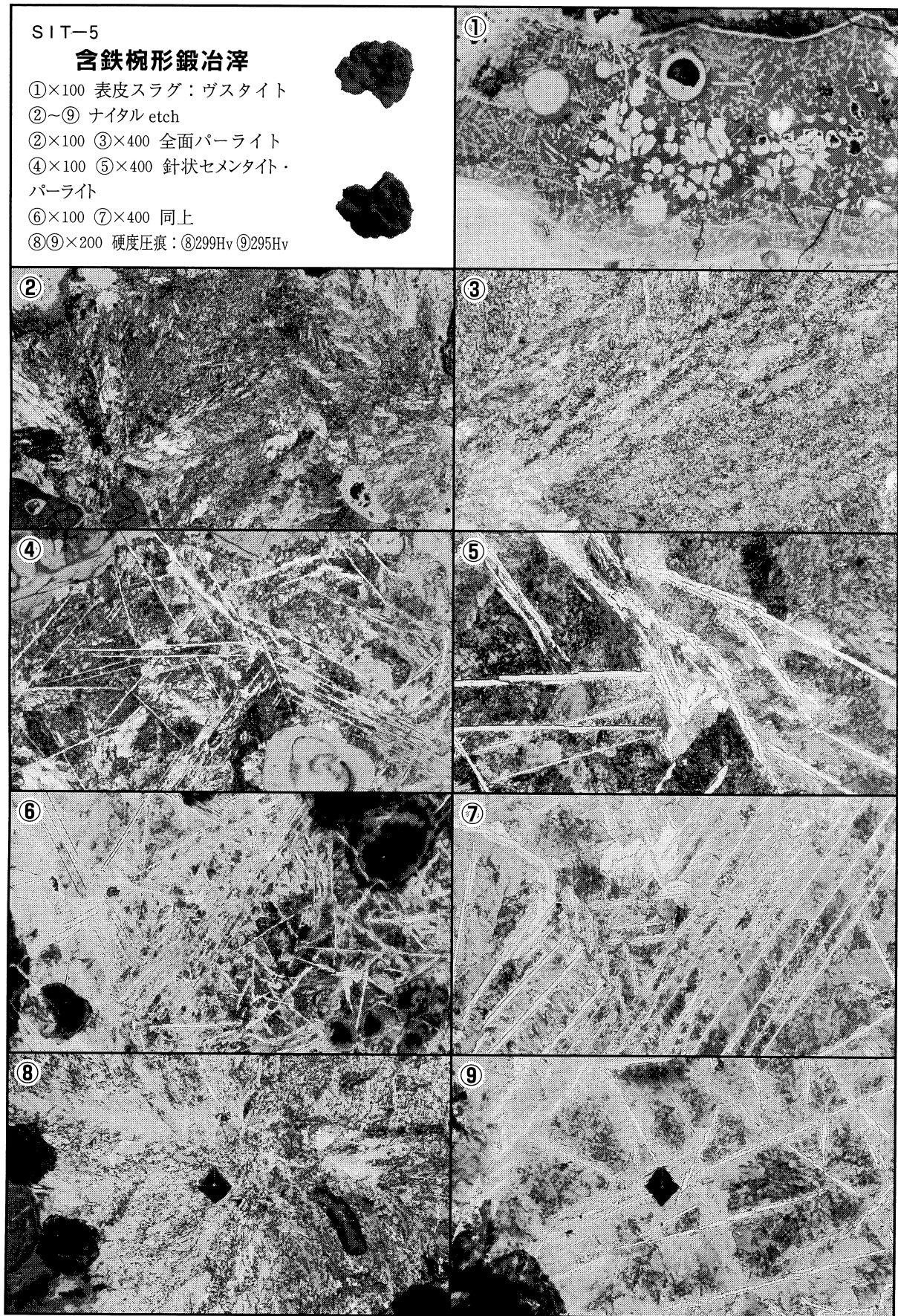


Photo.4 含鉄梔形鍛冶滓の顕微鏡組織

SIT-6

含鉄腕形鍛冶滓

- ①×100 ②×400 表皮スラグ：ヴ
スタイト(粒内析出物あり)
③~⑧ ナイタル etch
③×100 ④×400 フェライト・パーライト
⑤×100 ⑥×400 全面パーライト
⑦⑧×200 硬度圧痕：
⑦129Hv ⑧250Hv

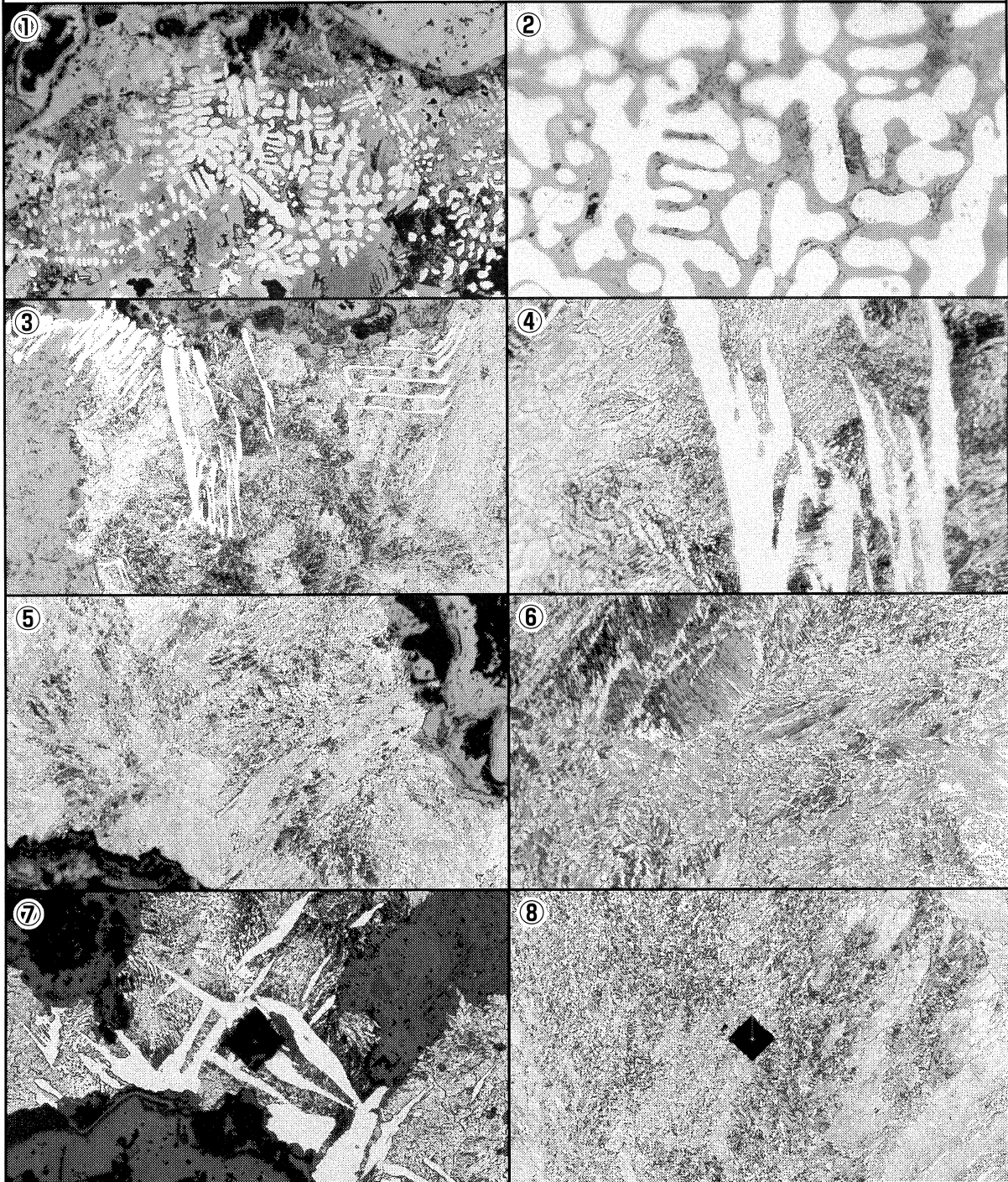


Photo.5 含鉄腕形鍛冶滓の顕微鏡組織

SIT-7

鉄片

- ①×400 鉄中非金属介在物
- ②~⑧ ナイタル etch
- ②×100 フェライト・パーライト、写真右側:侵炭組織
- ③×50 ④×100 フェライト・パーライト、
写真左側:侵炭組織
- ⑤×50 ⑥×100 フェライト・パーライト組織
- ⑦⑧×200 硬度圧痕:⑦312Hv ⑧229Hv

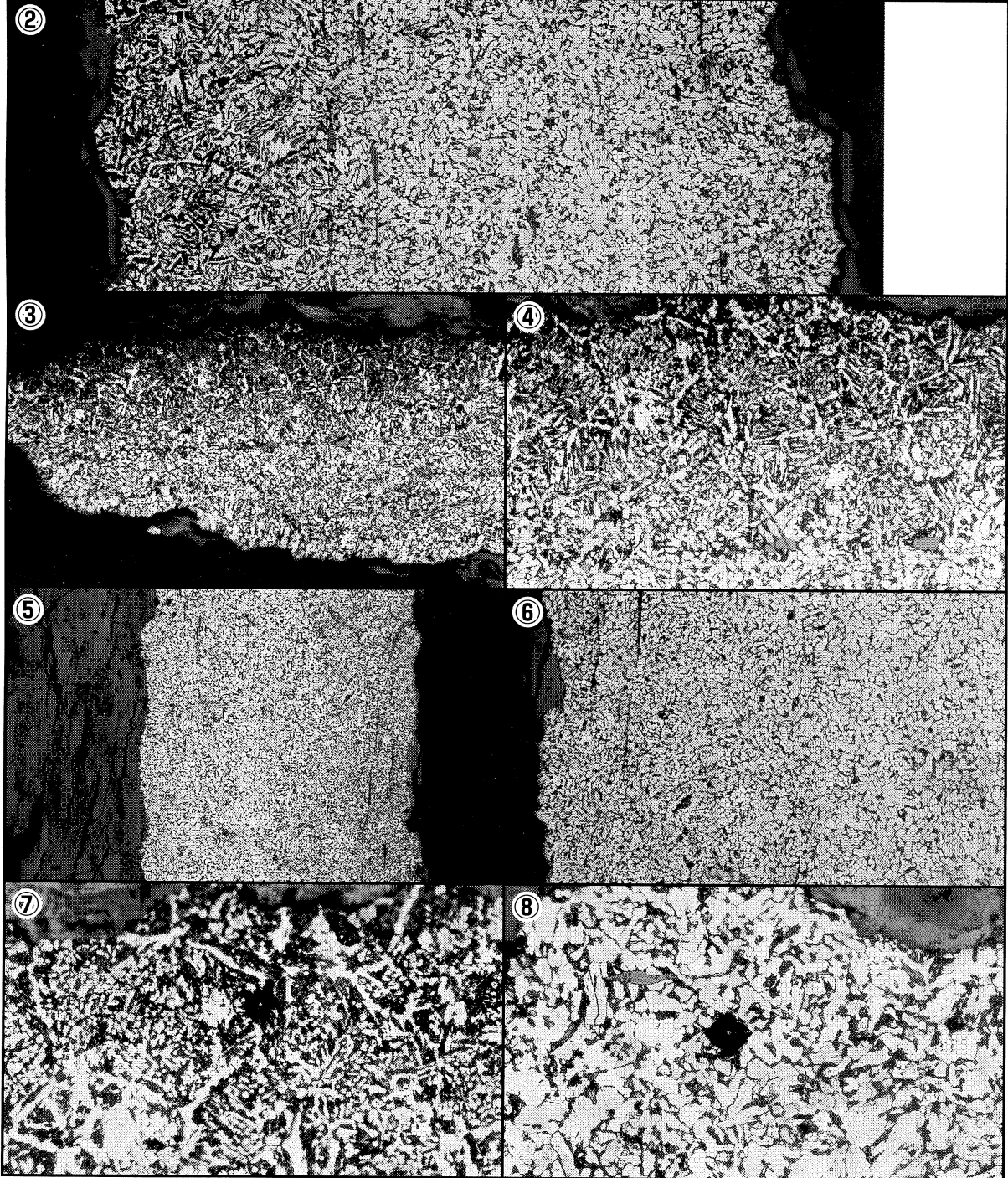


Photo.6 鉄片の顕微鏡組織

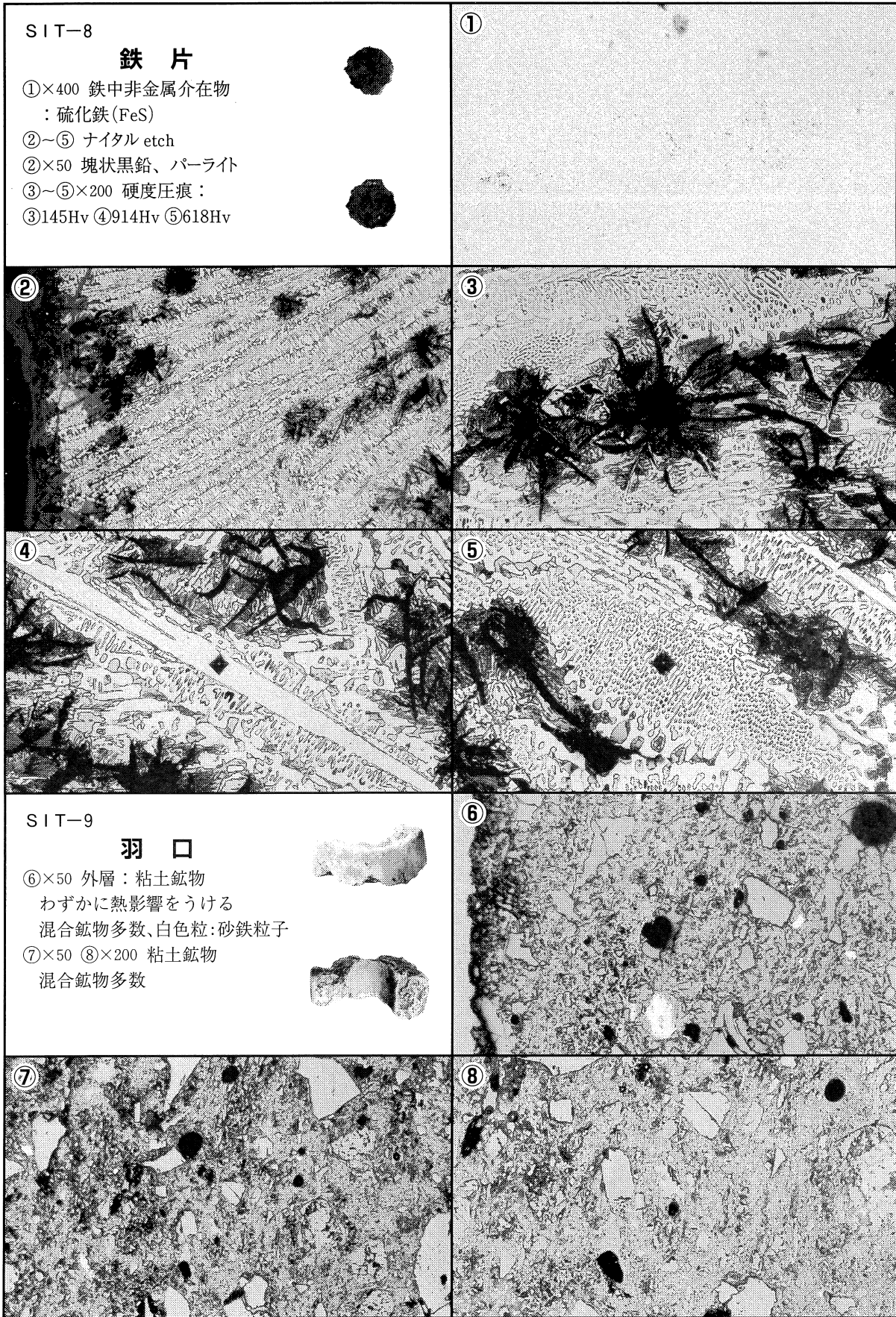
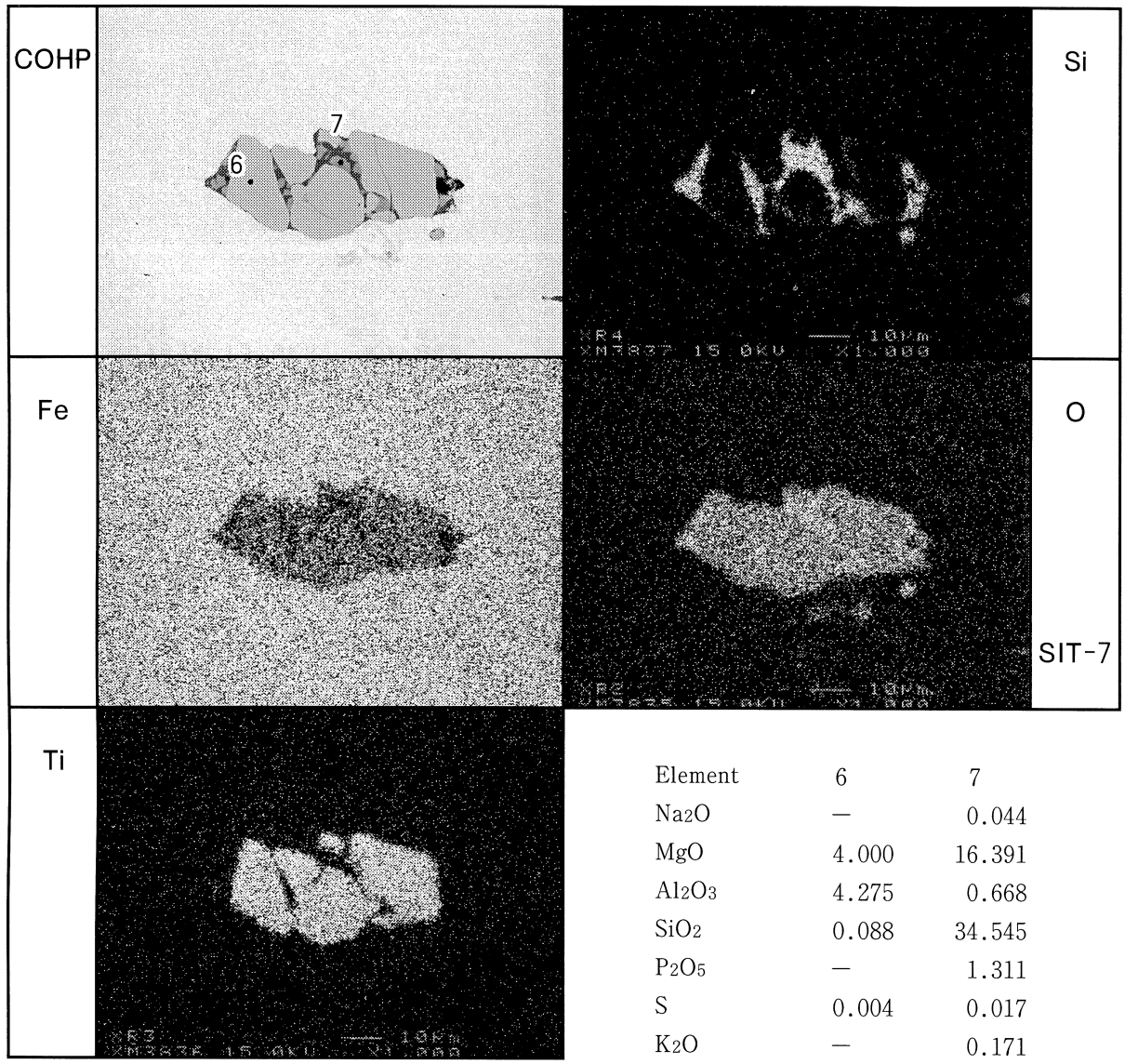


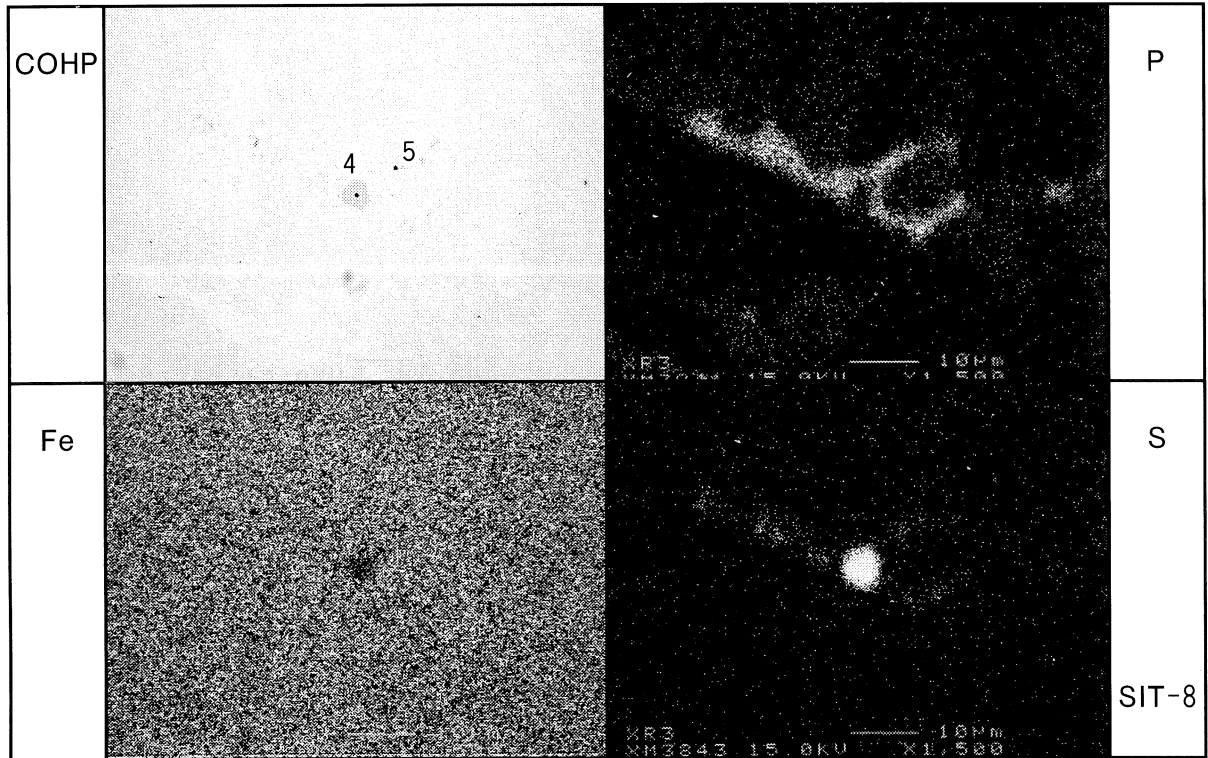
Photo.7 鉄片・羽口の顕微鏡組織



Element	6	7
Na ₂ O	—	0.044
MgO	4.000	16.391
Al ₂ O ₃	4.275	0.668
SiO ₂	0.088	34.545
P ₂ O ₅	—	1.311
S	0.004	0.017
K ₂ O	—	0.171
CaO	0.010	1.254
TiO ₂	31.504	1.353
Cr ₂ O ₃	0.019	—
MnO	0.798	1.337
FeO	60.608	49.722
ZrO ₂	—	—
V ₂ O ₃	1.456	—
Total	102.761	106.809

SIT-7

Photo.8 鉄片(SIT-7)鉄中非金属介在物の特性X線像と定量分析値



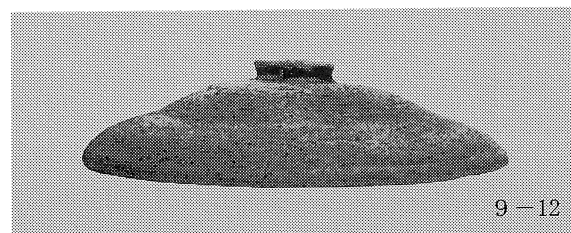
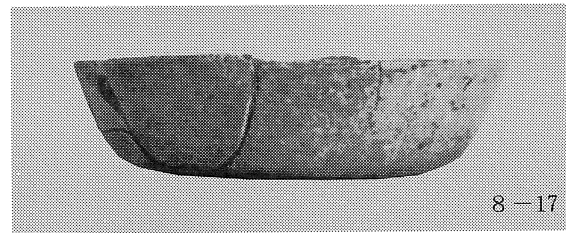
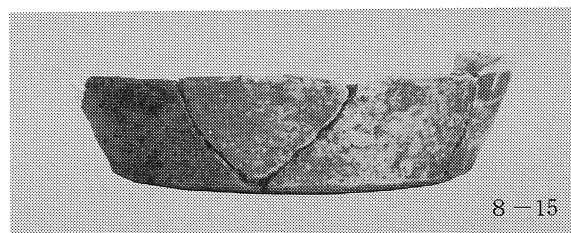
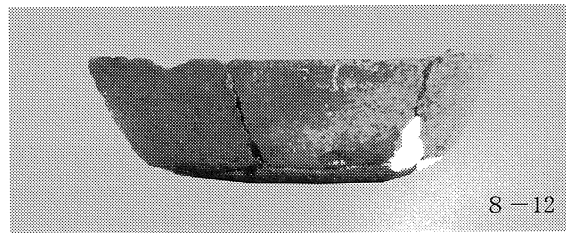
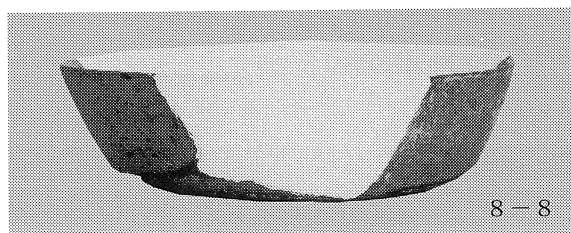
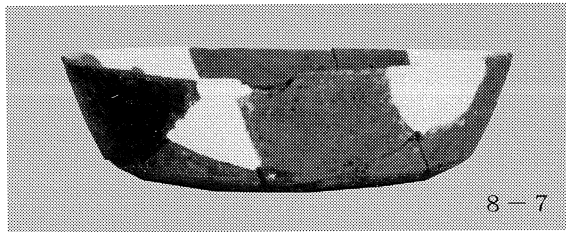
Element	4	5
Na ₂ O	0.002	—
MgO	0.028	—
Al ₂ O ₃	0.440	—
SiO ₂	2.638	0.044
P ₂ O ₅	0.031	5.010
S	34.900	0.092
K ₂ O	0.395	—
CaO	—	—
TiO ₂	0.258	—
Cr ₂ O ₃	0.0009	—
MnO	30.864	0.017
FeO	47.084	137.152
ZrO ₂	0.078	—
V ₂ O ₃	0.124	—
Total	108.142	142.292

SIT-8

Photo.9 鉄片(SIT-8)鉄中非金属介在物の特性X線像と定量分析値

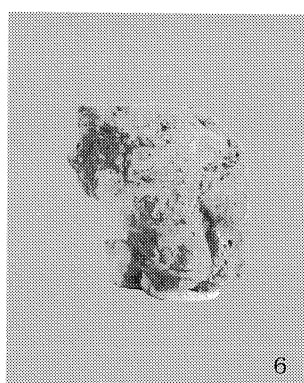
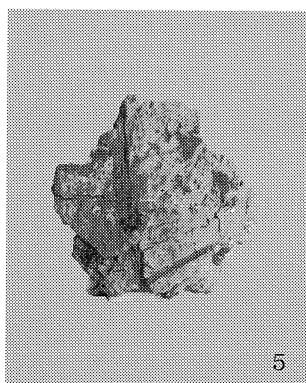
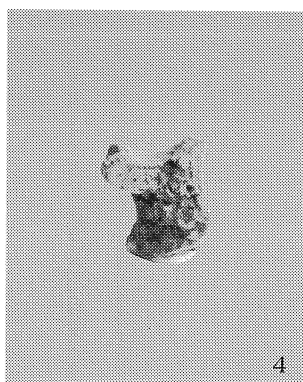
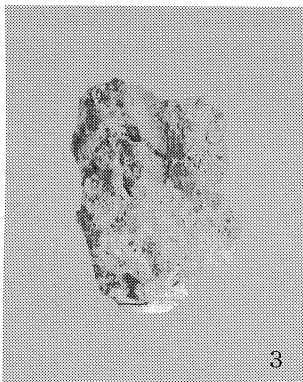
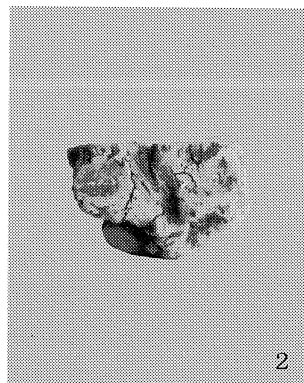
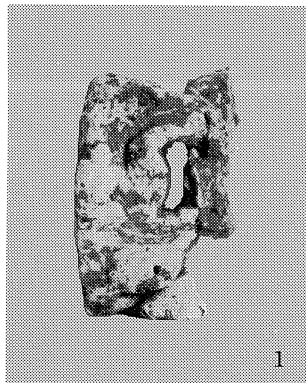
写 真 图 版

図版 1



二目川遺跡 A 地区 1 号不定形土坑出土遺物

図版 2

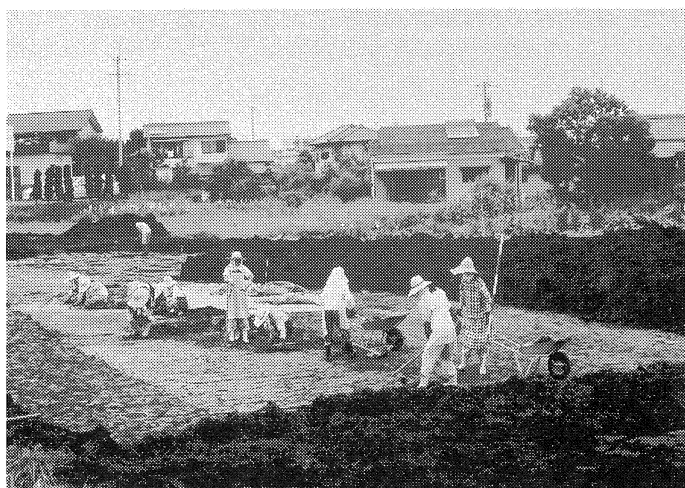


二目川遺跡B地区出土の土壁状遺物 (第16図)

図版 3



二目川遺跡Ⅰ区
作業風景 1



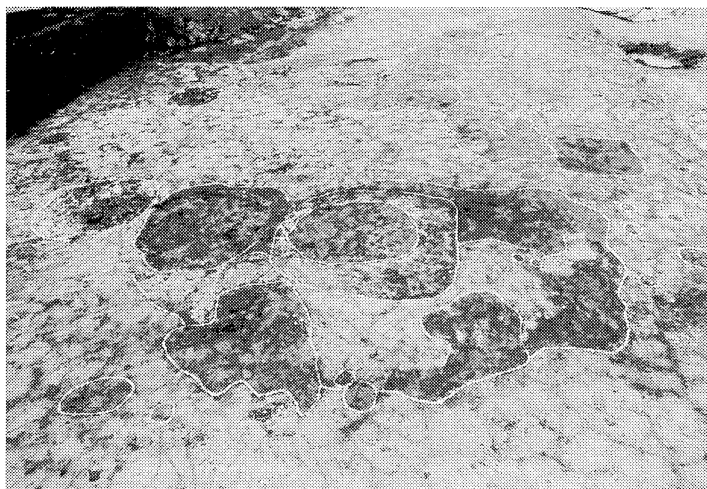
同 作業風景 2



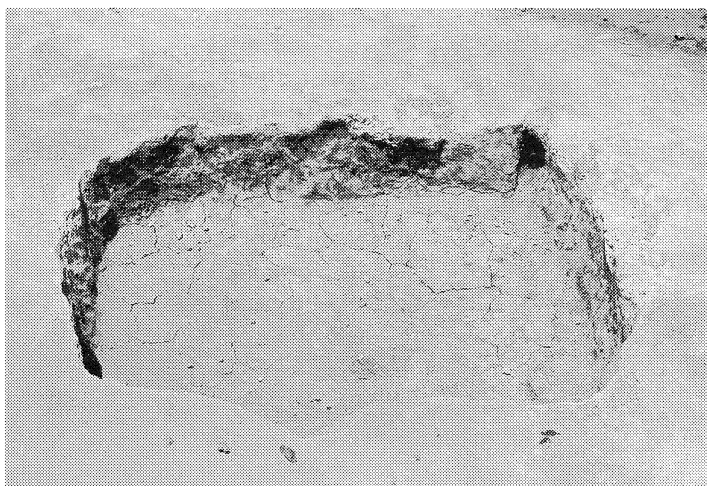
同 作業風景 3

図版 4

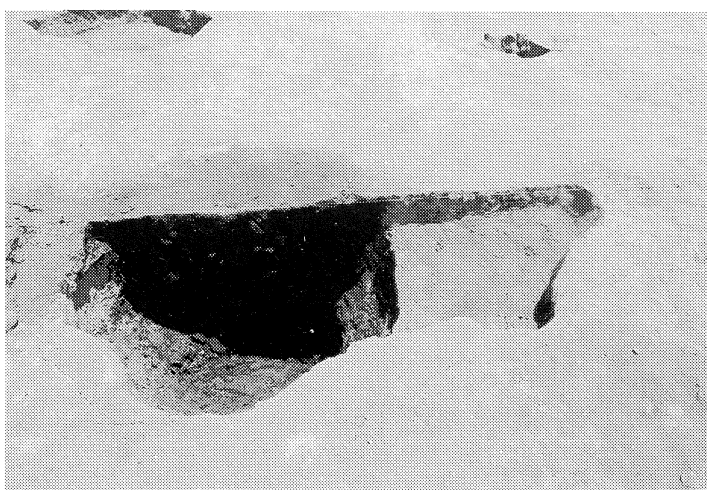
二目川遺跡 I 区
遺構検出状況



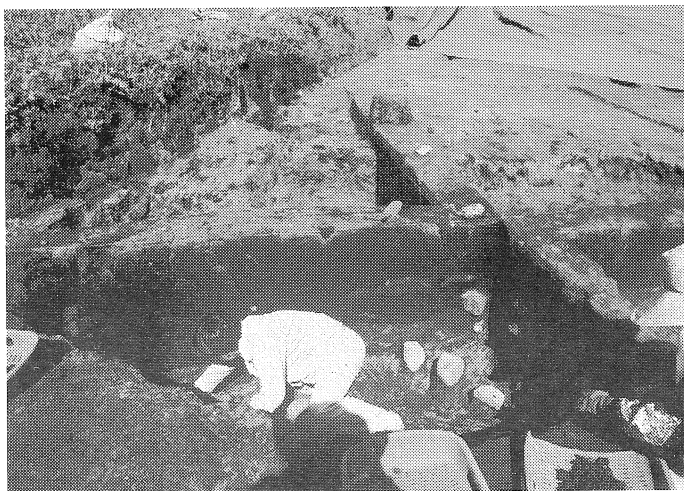
同 1号土坑



同 3号土坑



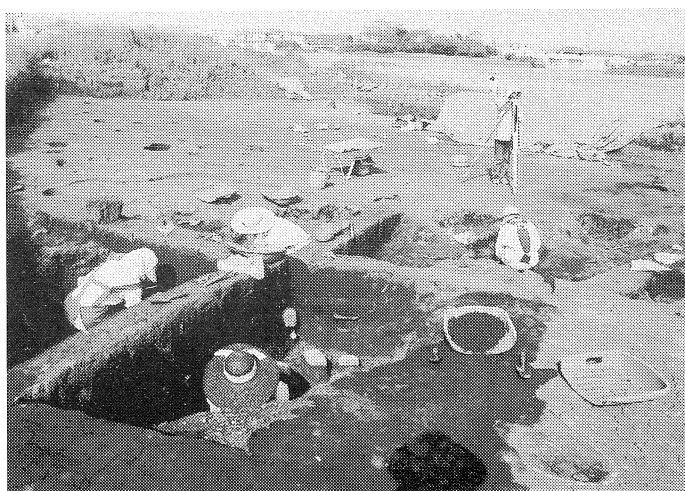
図版 5



二目川遺跡Ⅱ区
作業風景 1



同 作業風景 2



同 作業風景 3

図版 6

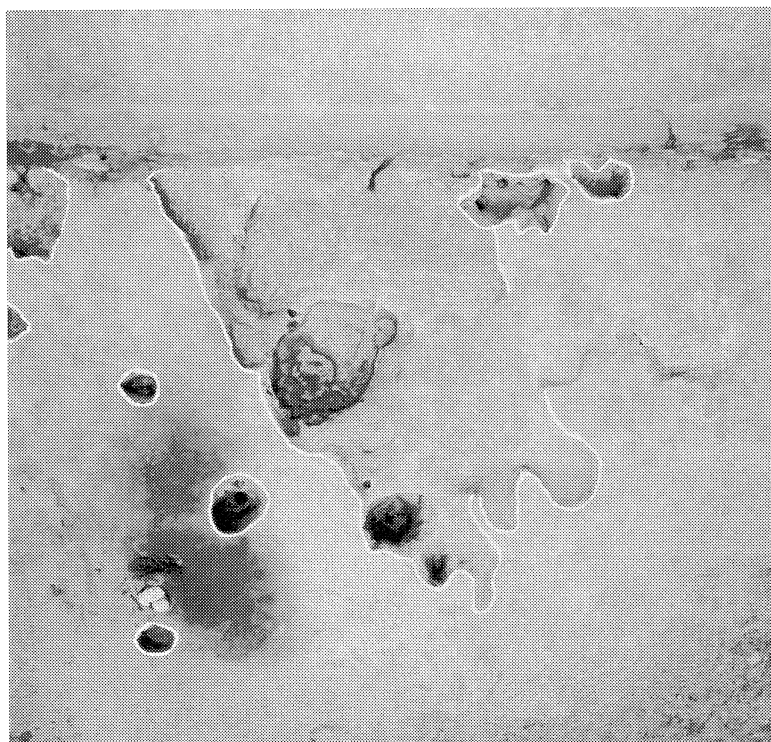
二目川遺跡Ⅱ区
1号掘建柱建物跡



同 発掘状況
(上空より)



図版 7

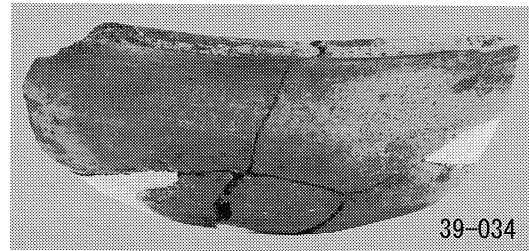
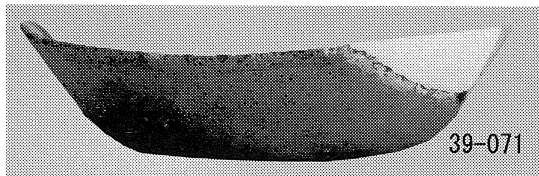
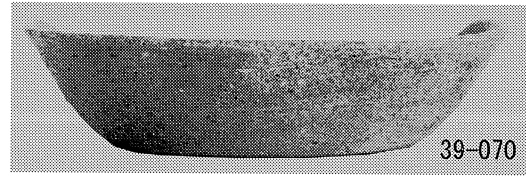


二目川遺跡Ⅱ区
SK 1・2

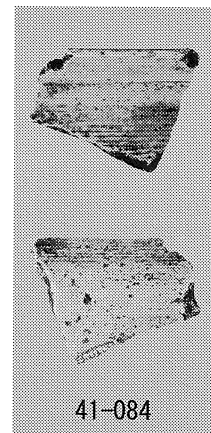
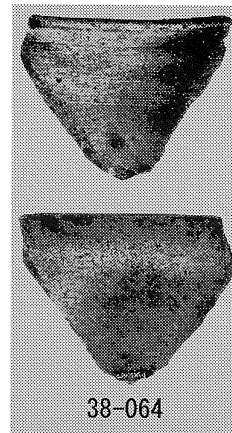
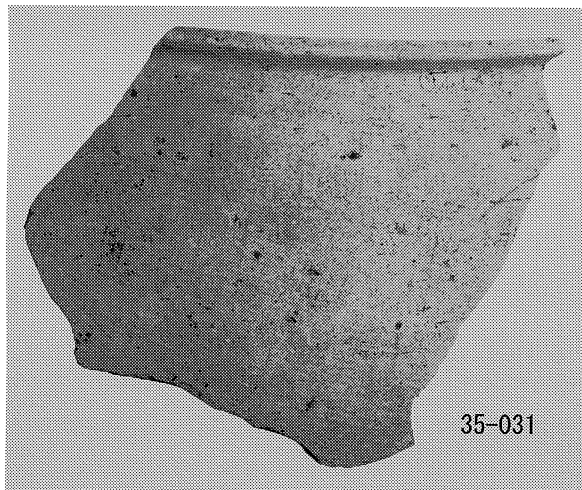


同 SK 5・6

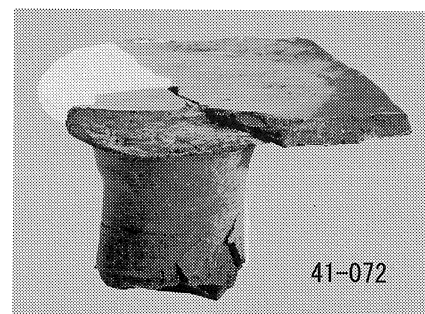
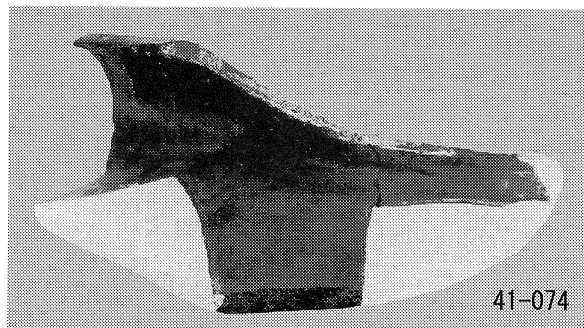
図版 8



坏 類



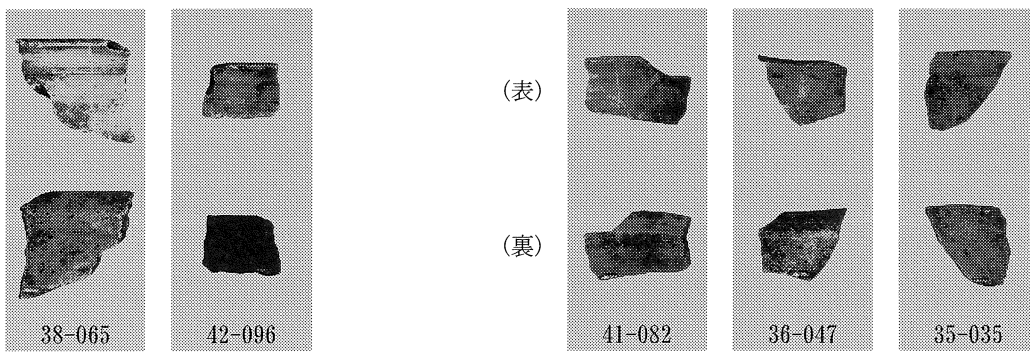
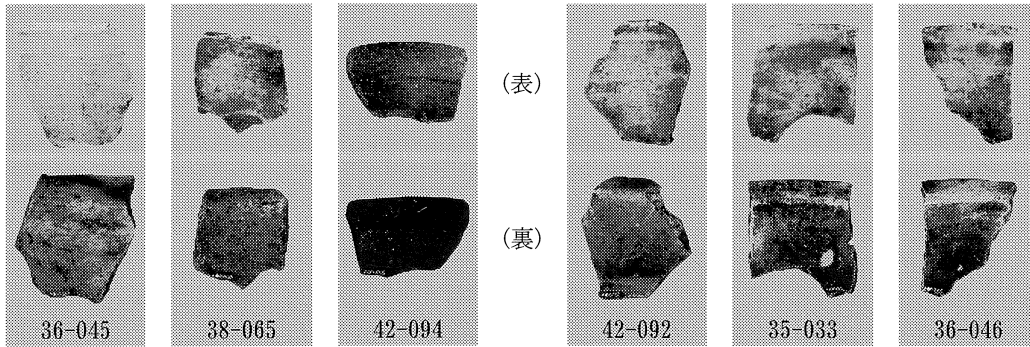
カメ・鉢類



須恵器類

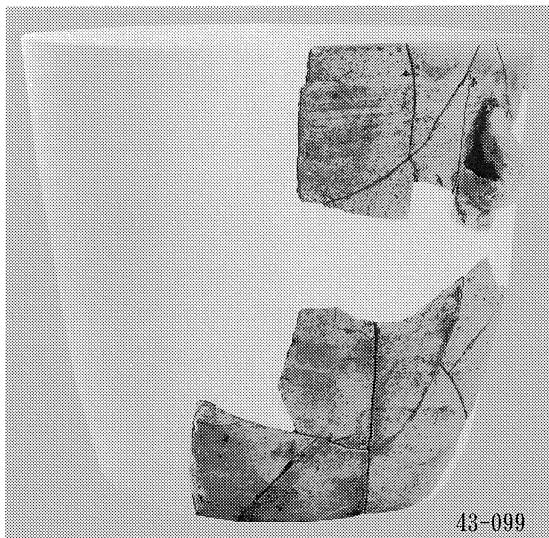
二目川遺跡Ⅱ区北側土坑出土遺物(1)

図版 9

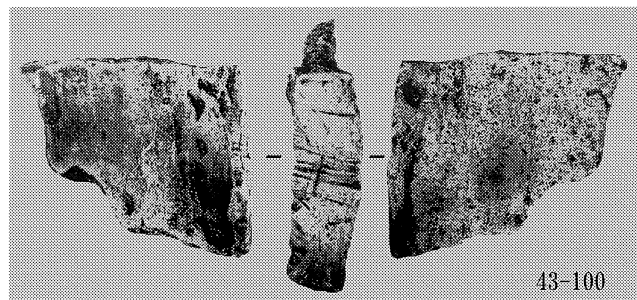
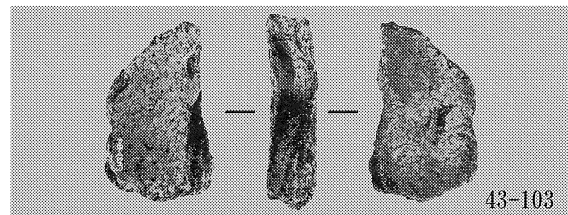
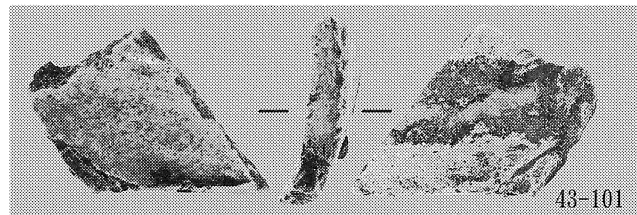


カメ類

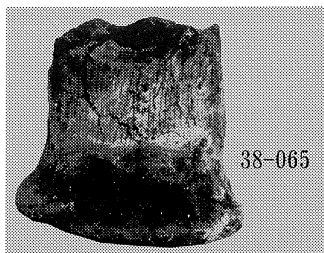
鉢類



こしき



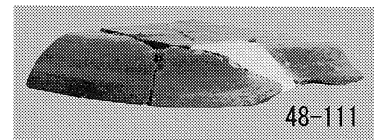
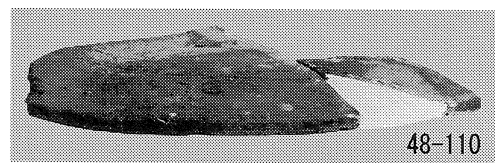
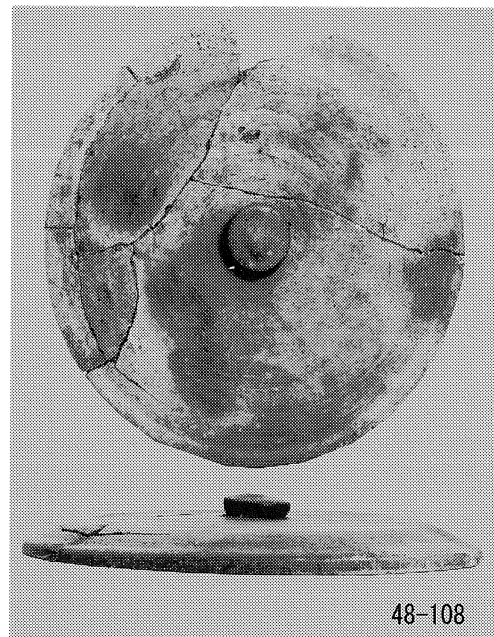
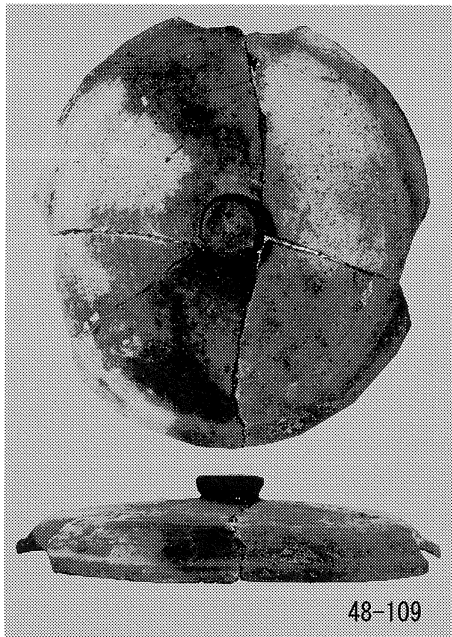
鉢類



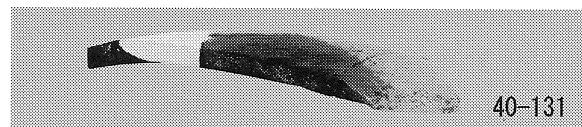
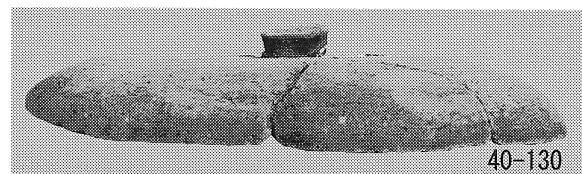
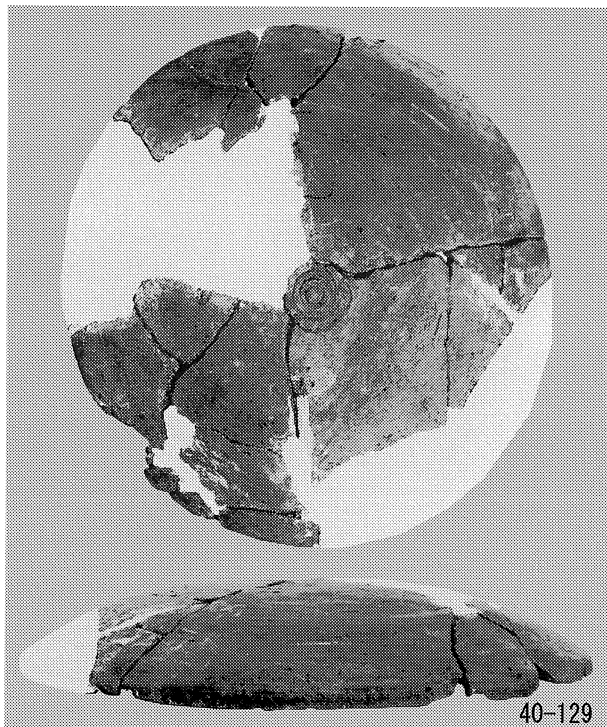
フイゴのふき口

二目川遺跡Ⅱ区北側土坑出土遺物(2)

図版10

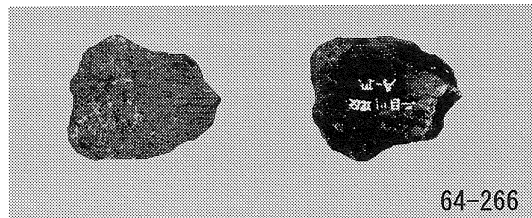
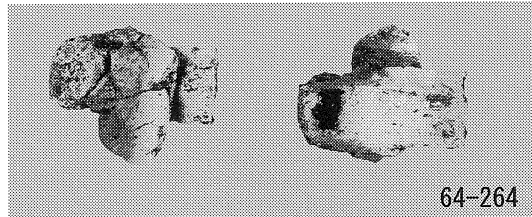
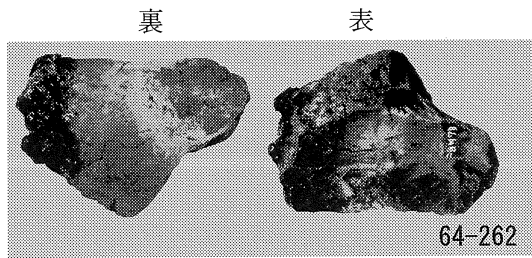


S X 1 出土坏フタ類

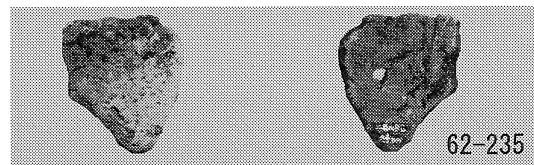
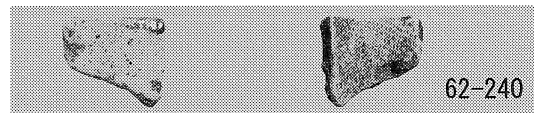
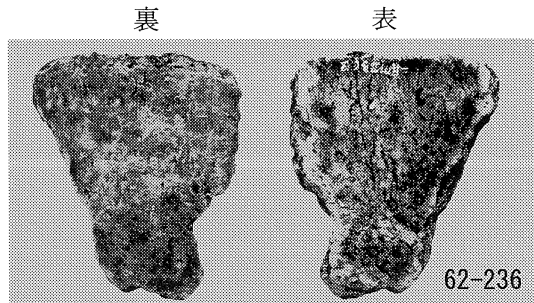


二目川遺跡Ⅱ区SX 1 (109~111)SX 5 (120~137)出土遺物

図版11



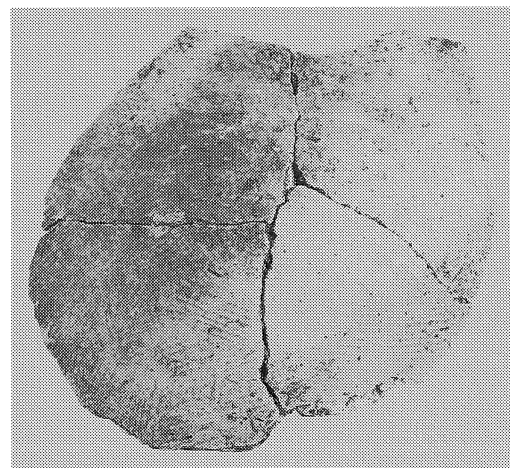
フィゴの羽口



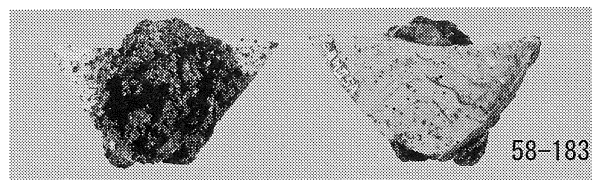
製塩土器



土製品



よう壁のついた須恵器片



タタキ痕の残るカメの胴部

二目川遺跡Ⅱ区包含層出土遺物

報 告 書 抄 録

フリガナ	フタメガワイセキ
書名	二目川遺跡
副書名	県道松岡日岡線改良工事に伴う関係埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	大分県文化財調査報告書
シリーズ番号	122
編著者	甲斐寿義、栗田勝弘、山路康弘
編集機関	大分県教育委員会
所在地	〒870-0021 大分県大分市府内町3-10-1
発行年月日	2001年3月30日

フリガナ 所収遺跡名	ショザイチ 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ふためがわいせき 二目川遺跡	おおいたしおおさよこおおさ 大分市大字横尾字 ふためがわ 二目川	322	156	33° 12' 14"	131° 39' 47"	19990630 ～ 19991012	2000	道路改良 工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
二目川遺跡	包含層 集落跡	古 代 近 世	遺物包含層 土坑 13 遺物包含層 掘建柱建物跡 2 土坑 36 溝状遺構 3 ピット 多数	須恵器 土師器 都城系土師器 施釉陶器 円面硯 製塩土器 轆の羽口 鉄滓 近世陶磁器類	

二 目 川 遺 跡

— 県道松岡日岡線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

大分県文化財調査報告書第 122 輯

編集 大分県教育委員会文化課（文化財資料室）

〒 8 7 0 - 1 1 1 3

大分市大字中判田字ビワノ門 1977 番地

TEL (097) 597-5675

発行 大分県教育委員会

〒 8 7 0 - 0 0 2 1

大分市府内町 3 丁目 1 0 番 1 号

TEL (097) 536-1111

印刷 有限会社元屋印刷
